る時は、其中の幾人が衆多に代りて犯罪の贖を爲し、以て全團体の難を救ふが如きことあり、是等は古代人が常に目擊せし所なれば、必然其觀念を神人の關係に移し、神の怒を宥めん爲には、或供物を爲して其罪を贖はさるべからずと信じ、若し其罪にして甚だ重大と認めたる時には、普通の供物に代へて人の生命を供ふることあり、かくて其身代りの供物により、衆人に及ぼす神の怒を辟けしむることあり、後に至り人類の思想及感情が温和に傾くに從ひ、神も亦人の生命の代りに動物の生命を以て、其償と爲すを甘ずとなすに至れり。夫のイサク(Isaac)或はイフヒゲニア(Iphigenia)の物語の如きは、必竟供物の觀念の漸々温和に傾きたるの記臆の痕を示すものならん、是等の供物の道義上の價値は、之を供ふるものが眞摯に其罪を悔ひ、神と再び親交を暖めんことを希望する精神に關す。是等の意義は始より供物に含有したれども、多衆は唯外形に重きを置きて其内心の働を顧みざりしが如し、供物其者に神の憤怒を宥め、其災害を避けしむるの力ある如く思惟し、爲に自己の道義的感情には、更に其思念を止めざりき、これ實に人情の自然なり、故に舊約書に於ける希伯來の豫言者、又は希臘の哲學者の如きは、一般の民人が只管に虛空なる儀式のみを頼み外形

的供物の効力にのみ、これ頼るの弊を矯めんが爲に、彼等は頻に其心を神に捧げ、神の聖意に服從する道義的禮拜の必要を說けり。然れども社會一般の宗教は、禮拜の表號なくして永存すること能はず、故に單純に其儀式を攻擊して、内心の拜禮を主張するも、若し劣等なる儀式的禮拜に代ゆるに高尚なる心靈的を以てし、之に依て其崇拜者の宗教心及道義心を喚發するにあらざれば、到底其効力あることなし。基督教の禮拜は此點に於ては、他に之と匹儔すべきものを見ず、其崇拜者の宗教的實驗を言辭と所作に依て表演するの道、其儀式の簡明なる事、其起原たる歷史的動機の活氣ある事及其宗教的觀念の意味深長なる等は、パウロより以來最も有力なる「ミスチシズム」を形造する要素となり、「バプテズマ」を愛餐とは、パウロ以前に在て已に教會中に行はれたる慣例なりしが、是等をして最も大切なる基督教の救濟の觀念と連環せしめ、以て教會の機密たらしめたるハ、即ちパウロの神學也。

「バプテズマ」の禮は「バプテズマ」のヨハネの創始に係る、彼は之を以て罪を悔ひ身を淨め、「メシヤ」の王國を待つの證と爲せり。基督教會も亦彼に倣ひ此儀式を用ゐたりしが、當初は其意義大躰に於ては彼此相異なる所なかりき。然れども基督教會

に在ては、耶蘇を基督なりと信ずる信仰の表白は、常に罪の許宥と、聖靈の奇跡的賜物(方言を語り、奇跡的に病を癒す等の事)を受くることゝ相伴へり。パウロに至り信仰の觀念一層深遠となり、「バプテズマ」は其信仰を表白する所作たるにより、彼に及び此儀式も神秘的に教會の首頭なる基督と一躰となるの意義を含有するに至れり。信徒は「バプテズマ」の水に沈むによりて、基督の死と復活とを新に其身に實驗す、而してかく新なる人となりしものは、世界の罪及死の遠し得ざる基督の榮光ある聖き生活に關與するものとなれり。パウロに從へば、「バプテズマ」は基督の死と復活とを表號的及戲曲的に再演するものなり。而して其儀式に與かるものは、基督教の中心たる救濟の觀念を其道義的死及復活とに依りて、內心に實成することゝはなれり。「バプテズマ」に依り靈なる新なる人生れ、彼は再び罪と律法の奴隸とならず、却て命と愛の靈、即ち神の子の靈は彼を支配する者とならん。去れば「バプテズマ」の意義に二樣あり、其一は新なる宗教上の位地の基礎也(凡そ「バプテズマ」を受て基督に入る爾曹は、基督を衣たる者なれば也。ガラヤ書第三章第二十七節)。第二は新なる道義的生活を送るの誓約也(神に向ふ善良心の約束。ペテロ前書第三章第二十七節)。茲に

余輩の記憶すべきは、希臘の「エリュジニ」の神祕式より始て與かるものは新に生れたりといひ、殊に其殿守となるべき祭司たらんと欲するものは、先づ機密の湯を浴し、之より出る時は其人も其名もともに全く改新し、舊は悉く去りて、舊き人と舊き名とは、茲に到りて悉く放捨せらるゝといふとなり。教會の親父等は「バプテズマ」の式と此神祕式との間に、甚だ相似たる所あるを認め、彼等は之が爲め「バプテズマ」の效能を殆ど魔術に異ならざるが如く觀念するの弊に陷らんとせり。然るに第四世紀以降次第に小兒の「バプテズマ」行はれ、大人の意識的信仰より發する「バプテズマ」に代ふるに至り、此儀式は實際に弊害に陷りたり、小兒に授くる「バプテズマ」は、大人の意識的信仰を表白する儀式たる「バプテズマ」と、其意義を異にすることあるは明白也。然れども小兒の「バプテズマ」は基督教が國教となるの時に於ては、必然行はるべきものたるや亦明白也。又何人と雖も國家的教會に於ては、小兒に「バプテズマ」を授くるは至當なり、否、永遠に之が正當なることを否定すること能はざるべし。小兒の「バプテズマ」に含有する思想は、頗る深遠にして亦眞理に適合す、基督教會に在てハ善と眞の神靈は客觀的勢力なり、一切人は其心靈的發達の始より、之に依て育てられ淨めら

れ、且つ強めらるゝもの也。彼等は其救と淨とに與からんが爲に、自ら其心を開きて其靈の感化力を受け、之に全く其身を任すべし、去れば小兒の「バプテズマ」は基督信徒特有の救の意識を一切の人に了解し易く說明するに最も適當なり、即ち神の民の救は不實なる理想的にあらず、各個人は其有限なる力を以て、千辛万苦其目的を成就せんと欲するも、到底達し得べからざるが如きものにあらず、救濟は活潑なる勢力として常に歷史的社會にあり、苟も其身を其勢力の感化力に與からんと欲するものは、容易に之を實驗し得べし。然れども斯の如く自ら其活力に身を委ね、以て救濟を成就することは、始め小兒の時に受けたる「バプテズマ」の儀式に伴ふものにあらず、這はこれ後年に至りて敎會の授くる宗敎的敎育に依て、始て補全せらるゝ也。敎會の敎育は單に小兒の「バプテズマ」に伴ふ必然の結果にあらず、寧ろ之が必然の補足なりといふべし。小兒の「バプテズマ」は神の救を理想的に保證し、而して之を實際ならしむる者は、獨り敎會の宗敎的敎育あるのみ、稍々成年に達し各個の基督信徒が、自個の信仰を嚴に表白するの監定試驗は、能く此理に適ふものにして、即ち幼少の時無意識にて受けたる表號的救濟の實を今や意識的に擧成する也。玆に至りて彼等が神と交はる誓約全く成就し、敎會は神に代り彼等に其幼少なる時に於て表號の式を授け、彼等は今や其自由なる動作によりて其誓約を全ふす。

古代の基督敎會は其集會に於て愛餐を守れり、此慣例は他の宗敎にも見る所にして、例せば「エスセネズ」(Essenes)の間に於けるが如し。此愛餐の時殊に麵包を割く嚴なる儀式により、基督信徒は耶蘇か最後の晩餐に於て、其弟子等と共に麵包を割き以て其十字架上に將に割かれんとする、巳が體軀の表彰となせしことを記憶す。かくて基督信徒の愛餐は、其主の最後の會食及其死を記憶するの儀式となり、而して此愛餐は宗敎上の集會と連關するに至りしより、竟に其禮拜の一部となり、自ら其中に宗敎的の意義を含有するに至りしも、未だ機密の意を含むことなかりき、これ夫のパウロが「コリント」人に贈りし前書の中に記したる、愛餐の景狀に依て見るべし、而して此愛餐をして機密の性質を有せしめたるも、これ亦パウロの神學なり。パウロはこれを稱して、主の晩餐と呼べり、而して之を猶太及異敎の祭宴に比したり。是等の祭宴に於ては神に供物を捧くるものは、其崇拜する神と、神秘的の關係を受くるに至るが如く、基督信徒も亦主の晩餐により、同じく基督と神秘的の關係に入

る、基督の流せし血と、其割きし體軀の表號なる、堅き麵包と盃とに與かることは、實に基督と一躰なるを顯はすのみならず、亦不可思議なる方法により、十字架上に磔せられし教會の主頭と實際に一躰ならしめ、かくして或意味により死に於て基督と一なる事、即ち彼と彼を信するもの、間に於ける血の誓約を成就するもの也、基督と一躰なりしものは、惡魔の支配せる世より脱離し、基督と活ける心靈的の關係に入り、其身躰の肢となり、神の子たるの靈を受け、神と和合して其平和に入るを得か故にパウロは直ちに斯の如き和合を來す、此淨められたる盃を稱して、新なる誓約或は基督の血の交と云へり（コリントヘ前書第十一章第二十五節及第十章第十六節）又常に此儀式を行ふ理由は、之によりて不斷基督の死を顯はさんとす、而して其死は即ち新なる誓約の基礎にして、舊は悉く去りて悉く新なり。パウロは主の晩餐も夫の「パプテズマ」と齊しく、神祕的又は表號的の所作にして、之により基督信徒の心に、彼の心を實驗するものと爲し、基督一個の外形的實驗を一切の人の內心の實驗、即ち救濟の觀念を實成する道義的感情に再演するものとなせり。パウロの意味に依れば、此機密は單純なる表號にあらず、之に依て基督の靈と守式者との間に於ける神秘的和同を來す、唯此和同を來すの力は、晩餐の麵包と盃とに存するにあらず、是等は唯其表號たるに過ぎず、寧ろ信仰を以て此式に與り、又表號的に一切の信者に因れる一致を顯はすは、これ即ち彼等をして其師なる基督と生死を共にするの誓に入れ、また眞に基督により相互の和合を來さしむるもの也、然るに後世に至り基督教會は、主の晩餐に關しパウロの有したる理想的觀念を離れ、之を實躰的物質的と變ぜしめたり。晩餐の麵包は絶えざる神の「ローゴス」の化身にして、此中一種奇跡的の能力あるが如く思惟したり、これ實に人情の自然にして、彼等崇拜者が此儀式に與りて、大に其心を淨められ、其精神を活さるゝ內心の實驗を、直ちに外形的なる儀式の飲食物に存するが如く思惟するに至りたる心理的理由は、余輩容易に之を了得すべし。

主の晩餐は、始より基督教の禮拜中に於ける中心の位地を占めたり、而して其儀式の漸次に發達したる形狀を見れば、余輩は之に附するに、救濟の戲曲たる語を以てするの外、他に適當なる熟語を見出す能はず、此儀式の中に含有する二個の分子あり、一は神の啓示、他は人の信仰の發現也、此儀式は多種の所作より成立し、救濟の宗教の

神隨なる神人の交通を、一種の對話によりて表演す、即ち一方には神の啓示あり、他方には之に對する信仰の應答あり、當初間は其所作祭司と信者との間に分たれしが、後に至り信者は唯傍觀のみに止り、有ゆる儀式は獨り祭司の執行する所となれり。斯の如きは希臘の教會に於て最も然りとす。其儀式中に抱含するものは、アダムの罪により救濟の必要起りし事より、基督教會に於て其救濟の全く成就せし事、換言せば世界及救濟の歴史の略形の如きもの也、之と同時に教會が常に內心的に實驗すべき救濟の感情を表號的に顯はすもの也。去れば神の救濟の業を顯はすの點より見れば、此聖典は神より人に賜はる恩惠の方便にして、其救濟に與りたる教會の謝意を表はす點より見れば、これ即ち教會が全く其神に服從するの所作にして、純然たる道義的獻祭の意義を含有す。斯の如く基督の愛の犧牲を祝謝する事により、基督の體軀なる教會は、自ら聖き犧牲として神に供ふ、これ即ち古代に於ける「マス」(Mass)若しくは「ユカリスト」(Eucharist)の意義なりし事實は、オーゴスチンに依るも明白也。然るに後世に至り普通の信者は、漸次に其式に與からざるに至り、獨り祭司のみ專ら之に關與し、又祭司の所作に直接なる救濟の力伴ふものと見做し、中古の

基督教國の民が、此儀式に關する內心の實驗よりも、寧ろ外形的に神の力の伴はんことを希望するの時に及び、純粹なる原意は漸次に移遷して外形的と變じ、終に魔術の觀念を伴ひ、宛も「マス」の祭祀には奇跡の伴ふが如く思惟せり。之に依て祭司は日々生者又は死者の爲に、基督の獻祭を演するものと見做すに至り、眞誠にして深遠なる觀念、即ち救濟は常に教會の中に演ずべき意義全く一變し、信仰者の內心に於ける道義的實驗に代ふるに祭司の奇跡を以てせり。之に依て祭司は救濟を司る者、良心の主、神の惠の寶を分與する者、教會と神との間に於ける欠くべからざる中保者となれり。「カトリック」教會の大なる誤謬は、祭司の執行する「マス」と密着なる關係あるにより、宗教改革者は異口同音に、諸惡の根元たる此弊毒に向て駁擊を試みたり、而して彼等は主の晩餐に於ては、基督と其信者とは、直接なる關係を有すと主張せり。此晩餐の意義に就ては「プロテスタント」の二大派なる「ルーテル」派教會(Lutheran)「レフヲームド」教會(Reformed church)は甚だ其意見を異にし、前者は該式を以て專ら神の惠を受くる方便なりとし、後者は之を以て神と基督に自己を捧げて、全く服從せんと欲する教會の精神を表彰するものと爲せり。此相違は兩教會に於て獲成

する敬虔の德の差違に基く、前者の德は沈靜にして、後者の德は活潑也、これ實に兩教會の異點を爲す所にして、夫の基督の體が現在如何に關する議論の如きは、單に其徴候たるに過ぎざる也、然れども事の實際より考ふれば、此兩教會は各該式中に抱含する意義の一方を固守するに過ぎず、余輩が曩に述べたる如く、兩意共に此式に於ては甚だ緊要なるものにして、古代の教會は二者共に該式中に抱含せしめたり、禮拜は一方より見れば實に恩惠の方便、他方より見ればこれ即ち信者の獻祭也、二個の「プロテスタント」の教會は、各自重きを其一方に置くと雖も、亦必ずしも全く他を忘却したるにあらず、「ルーテル」派教會は其晩餐に與かるに於て、活潑なる信仰の働の必用あるを認め、「レフヲーム」教會ハ信者の信仰の活潑なる動作に加へて、其救濟を確むる力の儀式中に存するを否定せざる也、是に由て之を觀れば、兩教會の爭點たる該儀式の意義は、孰れも正當に解したるものといふを得べし、唯彼等が不正當ならんとするは、自己の主張する一方の意義を以て其全意と認め、以て他方を排除せんとし、却て彼等各自其足らざる所を相補充するを知らざるにあり、若し彼等にして互に相裨補したらんには、則ち古代に於ける該聖典の本意に復歸すと謂つ

べし、されば公平に之を觀察する時は、現今兩教會間に於ける、最も熱心な論爭する聖晩餐の式に於て、此兩教會和同するの道なきにあらず、若し其一致の途に出でんか、彼等の位地は今よりも一層正聚なるに至らん。

尙ほ「プロテスタント」教が古代基督教會の禮拜に復歸したる一例を擧ぐれば、則ち禮拜の式中に於て專ら重きを言辭に置きたる事なり、これ實に當然なることにして、靈の宗教に於て言辭は、禮拜式の要部を占むべきものにして、其言辭たるや一般普通の民人に通曉せられざるべからず、固より禮拜式の所作は其中に深遠なる意義を含有すると雖も、若し之に伴ふ言辭ありて之を解釋するにあらざれば、以て作用の效を全ふすること能はず、單純なる儀式は動もすれば無用の觀物に成果つるの恐あり、かゝる儀式は多少普通の禮拜者の感情を喚起することなきにあらざるも、思想鮮明、意志堅固なるものを補益するの效力太だ薄弱也、禮拜者全躰を感動し、其思想及意志を左右し得るの力あるものは、獨り心靈の化身たる言辭あるのみ、原始に於て渾沌たる天地に一定の形狀を附し、光を與へ生命を注入したるものは、これ即ち言辭なり、斯の如く宗教に在ても、信仰者の心中に湧躍せる渾沌たる感情を

して、秩序ある敬虔及信仰を變ぜしむるものは、これ亦言辭の力に由るのみ。禮拜に使用する言辭に二種あり、其一は會衆の捧くる祈禱の言辭なり、而して或は會衆全躰自ら之を捧くることあり、(讃美歌)又は教役者が會衆に代りて之を捧くるもあり、固より此時に當りては單に會衆全躰の代言者たるに過ぎず。第二は說教の言辭にして教役者が會衆を教訓し勸誡せん爲に用ゐる所のもの也、かゝる說教の言辭は其基く所は聖書にあり、聖書の意義を解釋し、以て會衆全躰の德を養成せんとするにあり、茲に於ける教役者の位地は、宛然古代豫言者に等しき所ある也。

祈禱は神と交り、之に依り世の得て與ふべからざる救濟を仰かんと欲す、神に向ひて其救濟を需むるは、これ即ち祈願也、然れども已に得たる所の救濟を祝謝歡喜するに於ては、祈禱は即ち感謝なり、若しくば神の完全を觀し、自ら之に關與するの榮あるを感する時に於ては、己を忘れて神を崇尊する意義を含む。去れば神の觀念及宗教的感情愈々高尚なれば、祈禱も亦從て高尚となる也。然れども彼等にして高尚ならざる時に於ては、祈禱も亦卑近なり、概言せば世上の事情は、悉く皆祈禱の目的とならざるものなし。最下等なる請願より最高等なる道義的若しくは心靈的の請

願に至り各個人及神の王國全躰に於て、神の聖意の成就せんことを希望するまで及ぶもの也。劣等なる宗教に於ては其祈禱の目的とする所、亦從て劣等ならざるを得ず高尚なる道義的及心靈的の分子に至りては、漸を追ふて來る也。然れども基督教の祈禱に於ては、尙浮世の事を祈願するの分子存し、或は之を以て祈禱の初步とするを得れども、これ決して吾人が達せんとするの目的にあらず、基督教徒の祈禱は、利己的及浮世の配慮を捨て、其心を唯一の欠くべからざるもの、即ち神性的にして且幸福なる生活に關與するの目的を全成し、聖靈に由れる平和と歡樂とに向はしむるの方便也。已に我等の心をして此至高の善に向はしむれば、其他の事情は、自ら此大目的の中に包括せられ、各其處を得、是等の劣等なる目的は、既に是等自身の爲に希望するにあらず、唯之を以て最大の善に達するの方便として希望するに過ぎざるに至らん。凡そ祈禱の目的は結局神の聖意の成就せんことを欲する一の祈願に歸着すべきものなれば、眞誠なる祈禱の精神は、一方に於ては我等の爲に至善を知り、之を與ふる神の愛と知惠とを信し、他方に於ては幼兒の心を以て、己を全く神意に任じ、敢て利己的の慾望を遂げんとせず、又神を强ひて己が請願に從はしめんと

せず、常に己の身は大智全能の神の掌中に在りて、全く之に憑依するものなることを忘れざる精神なり。神の愛と知惠とを信ずることなくして、唯神の力に憑依するとの感情のみを存する時は、無氣無力にして怡悅なく活動なき靜寂、若しくは失望に墮落するに至らん。又謙恭にして己は神の力に全く憑依するものなるを悟らず、唯神の知惠と愛とを信ずる感情のみを有する時は、却て神に對し頑固なる幼兒が其我意を遂けんとするが如く、神の力を己が利巳的の請願を成就せしむる方便たらしめんと欲するが如き、不敬に陷るの恐あり。世の魔術を行ふものは即ち此精神を有せり、魔術とは靈妙なる神力を、或る禮拜の式により各個人の志望を滿足せしむるの機具たらしむるに外ならず。かゝる迷信と夫の利己的の祈禱との區界は甚だ不分明にして之を判識することは甚だ困難なり。無氣力なる放任と、不敬なる利己的の祈禱より全く別種にして、二つながら之を距ること遠きものは、夫の耶蘇の祈りたる、我心にあらず唯聖意のまゝに爲し給へとの幼兒の如き祈禱也。我等をしてかゝる純正なる祈禱の精神を養ふに、最も與りて力あるものは、會衆一堂に相會して、共に公開の祈禱を捧ぐること也。此祈禱に於ては各個人の利巳的の請願志

望は、背後に退き、其正面に顯はれたるは社會全躰の幸福、神の王國の光榮等にして悉く潔白、純正、公共、無私ならざるはなし、而して之に與る所のものは自ら其精神を淨められ、私心を脫し利己の目的を離れ、相互の感情に依て其宗教心を暖められ、只管に信仰と愛情の道に進まん。

教會に於て會衆の感情を動かすに、最も有力なるものは唱歌なり、教會の唱歌は一種の祈禱文にして之を奏するは會衆全躰が同時に同樣の祈禱を神に捧ぐるが如きものにして其結果固より大ならざるを得ず、加ふるに嚴肅なる音樂を以てする時は、其效果一層著しきものあるを見る。教會の唱歌は多少美術上規律の欠くる所ありて、其道の人の嗜好に適せざる所なきにあらざるも、一般の會衆は敢て此欠點を感することなし、又其道の人と雖も、彼等と共に宗教的感情の煥發する時に於て敢て此欠點を以て不快を感するが如きことなかるべし、余輩と雖も教會の唱歌及音樂には多少改良を要すべき點なしといふにはあらず、今少しく其種類を多からしめ、其樂譜を快活ならしめ、其音調を低からしめ、以て男子も亦容易に之を和唱するを得せしめ、殊に唱歌に錬熟したる一隊をして全會の唱歌を扶けしむるが如

きは甚だ有要なる事なり、又休日の夕に於て一種の禮拜式を設け聖書の中にて適當なる章句を擇み、之を唱歌に和し、之を會衆全躰に謠はしめ、其中には獨唱等を加ふれば宛然「オレトリオ」(神樂の種類)に髣髴たれども、彼の如く全く技術的ならず、然れども之を用ゐば大に效益する所あらん、斯の如き禮拜式は夫の「オレトリオ」に比して會衆の德を建つる效力に至りては較劣等なる所あるも、普通の禮拜式と其趣を異にする所あるを以て、或は世の嗜好に適すべし、斯の如く多小戯曲的の分子を混入する禮拜式は夫の普通の禮拜式と通俗の宗教的戯曲との中間に立つものなり、通俗の宗教的戯曲の元と「カトリック」教の禮拜式より起りたるが、異日「プロテスタント」の教會にもかゝる戯曲を採用するの期あらん、固より之を以て正當なる禮拜式に代へんといふの意にはあらず、唯其不足を補充せんと欲するのみ、又斯の如き戯曲は宗教と世俗の技術とを連環せしむるの鐵鎖となり、以て互に相補益せられ、宗教上の技術は之に依て一層其美を發揮し、世俗の技術は之に依て一層高尚なるに至らん、夫のトーマが云へる如く今時の演劇は單に美術のみを是れ主とするにより、之に道義及宗教上の聖き分子を混入せば、大に益する所あるを見ん、又「プロテスタント」の嚴重なる禮拜式にも、今少しく技術の分子を混入せば、這も亦大に益する所を見ん、然れども右の所說の如きは必竟將來に屬するものにして、今茲に之を評論するの必要なし、或は之に對して多少の異論を懷ける人も少からざるべしと雖も、若し適當なる人の手により是等の改良を實功せしむるを得ば、基督教會の禮拜上に一層の光榮を添ゆるは疑ふべからざる也。

教會の唱歌と祈禱とは、其會衆全躰が共同して、其信仰心を表白するものなれども、今茲に禮拜式中に於ける一個の要部を占むるものは、教役者の說教にして、其趣前兩者と異殊なる所あり、會衆に代りて祈禱を爲すの時に於ては、說教者は單に彼等の代言者たるに過ぎず、即ち教會に慣用し來れる方式によりて、會衆全体の意識を代表するなり、然れども說教の時に於ては、彼は其身に實驗したる宗教上の眞理を、其好む所の道に從ひて、自在に之を會衆の前に傳說するものなり、彼は宗教上の眞理を一切の信者の實際的必要に適用し、自己の意見に從ひて其適用を試む、其形狀より之を云へば說教も亦普通の演說に異なる所なしと雖も、その大に異なる所は說教は普通の學術演說の如く、一種の知識を會衆に頒たんとするにあらず、又政

談演說の如く或る社會の事變に對し、一の目的を貫徹せんが爲に公衆の意志を動かさしめんとするにもあらず、唯其力を人心の中點たる道義心及宗教心に向はしめ、其品性を涵養するにあるのみ。一言以てこれを蔽はゞ、即ち會衆の德を建つるにあり。說教者は基督信徒の通有たる宗教的理想を會衆の前に描き、自己の實驗に訴へ、之を會衆に通ぜんと欲するものなり、これ說教に特有の效力ある所以なり。說教は客觀的眞理を主觀的實驗を以て公衆に說述するにより、大に其宗教心を發揮するに與りて力あり、蓋し生命は生命より來るものなれば、宗教的生活は實驗したる宗教的生活によりて涵養せらる。然れども茲に說教に於ける特殊の難題及危殆あり、說教者は自ら宗教上の眞理を、自己の見解に依て說かざるを得ずと雖も、其說く所は會衆の心に於て、己に識認したる所たらざるべからず、然れども此兩者は果して能く符合し得べきものなりや、余輩は答へて、此兩者が全く符合すべしとは決して思惟すべからずと云はん。現今の特別なる狀態は暫く措くも、凡そ眞理にして高遠深邃なるに從ひ、其人々の之を解し之を說くの道も、亦大に異ならざるを得ず、又說教者の力愈々大なるに從ひ、其說く所の眞理は、一種の特色を有し、從て會衆の

心を喚發するの力も亦大也。去れば說教者が宗教上の眞理を說くに當り、自己の見識に從ひて之を說くは、所謂其權利にして何人も之を批判すべきにあらず、唯其問題とすべきは、其權理の區域にして、換言せば如何なる點までは、其會衆の已に信したる所を共に信せざるを得ざるやといふにあり。

一たび說教の目的は如何なるものなりやを考ふる時は、右の問題は自ら了解し得べし。抑說教は會衆に向ひ彼等の知らざることを教ゆる、所謂知識を分與するものにあらず。去れば、說教に於て學說を說き教義を說き、若しくば歷史上の事實につき辨論するが如きは、決して其目的に適ふものにあらず、即ち人の宗教的生活を形造するにあり。去れば說教者たる者は、基督教の眞理を理論上より說かず、寧ろ實際上より會衆に向ひ、生ける理想として說述すべし。基督信徒の敬虔及德義を及ぶだけ明瞭に、及ぶだけ快活に描出し、或は基督教の綱領たる中心の眞理より說き始めて漸々其細目に涉り、或は之を實際の生活に應用し、若しくば其道理の或る一個の現象につき說を起し、竟に基督信徒の品性上必須の原理に說及する如き事あり。說教の目的果して斯の如くんば、前陳の問題に關し、二個の重要なることあり、第一は說

教者と教會とは、左の事情に關し必ず和同せざるべからず、何ぞや、基督信徒の理想の性質これ也、或は其活潑なる敬虔心及道德を涵養するに、必須の動機及基督教の眞理により、如何にして神と世界に關する各個信徒の關係を造成するかの點にあり。是等の點に於て教會と同一なるは、說教者の爲には絕對的に欠くべからざる所也。然れども其理想を理論的に開陳するの道に於ては、說教者は全く自由なるを要す、之よ關する神學上及歷史上の意見は、說教の目的と直接の關係を有せざれば、各自の識見に從ひ、自在に其眞理と認る所に止り、敢て教會の干涉を受くべきの理由あることなし、斯の如きの問題は寧ろ神學校の關する所にして、教會の是非すべき所にあらず、又神學者として大に注意を要せざるべからざるも、說教者としては其說孰れに歸するも左まで關係の大なるにあらず、說教者は其教會に於ける信仰箇條を以て、理論上甚だ適當なる信仰の表號と認るも、實際教會の德を建つるに不適當と認るものあれば、之を採用せざるも可なり、之に反して假令理論上不都合なる信仰箇條と雖も、若し實際に於て其觀念及語句を用ゐるは、聽衆の爲に彼等の德を建て信仰を養ふに於て甚だ有益なりと認る時は、喜びて之を採用することあるべ

し、何となれば教會は是等の觀念と語句とを以て、其信仰を養成せられたるものなれば也。說教及禮拜に於て緊要と認る所は、其說く所の教義の論理に適し、哲學上及歷史上よりして一點の批難を容るべき所なしといふが如きにあらず、寧ろ聽衆の心情に訴へ、之を感化し、之を薰陶するに、果して有効なりや否やの點にあり、斯の如きは啻に其說く所の教義の性質上よりいふのみに非ず、大に教會の宗教上の知識如何に關係するとあり、若し其教會にして大に普通の信仰の箇條より遠離し更に重きを之に置かざる時に於ては、之が說教者たる者は强て舊來の信仰箇條を說教に適用し、之を以て宗教の中心なるが如く思惟して聽衆に臨むを要せず、蓋しかゝる信仰の表白は唯これ宗教心を顯はす爲に附帶したる外形たるに過ぎず、而して說教の大眼目とすべきは其外形にあらず、寧ろ宗教心を惹起し之を奬勵するに過ぎざれば也。若し之に反し教會の會衆舊來の信仰箇條を墨守し、之を以て其信仰の正當なる表白なりと思惟するの場合に於ては、之が說教者たるものは、好し其信仰箇條を以て適當なる宗教心の表白と認るも、又は不適當なるものにして大に改良を要すべき所ありと認るも、先づ其教會に於て彼等が墨守する信仰の表白を其儘に

使用するは、宗教的教育に於て甚だ策の得たるものと認る時は自由に之を使用し得べし。唯注意を要すべきは好し從來の信仰箇條を以て適切なる信仰の表白と認るものも、決して說教及禮拜の目的なる建德と其方便たる神學上の意見とを混同することなからんこと也。若し舊來の信仰箇條を以て適切なる信仰の表白なりと認めざることあるも、猥に輕躁の批評を下し、其教會の感情を害し、其信用を失し爲に宗教の主眼たる教會の德を建て信仰を養ふの方便を失はざらんこと是れなり。演壇に於て神學上の意見に對し熱心に之を主張し或は之を駁擊するが如きは決して其當を得たるものにあらず、敢て猥に從來の信仰箇條を批難し、若しくは之を辨護せんとするが如きは寧しくこれ淺見小慮たるに過ぎず、彼等は寧ろ神學校と教會、若しくば神學と宗教とを混同し、理論に熱心にして生活を害ふもの也。說教者にして友よ灰色は總て理論なり、緑色は生活の黃金樹なりとの言を忘却することなくんば、宗教界に於ける大疑問も大に其難を減ずる所あるべし。然れども實際の生活は却て人の學校的知識よりも貴き所あるは甚だ多福の至なり、理論に於ては全く反對よして彼此氷炭相容れざるが如きも實際に於ては其間全く調和し更に

區別あるを見ざるか如きことあり、神學上の議論に於ては、全く之と反對の位地に出で、互に誤謬迷信を以て、論難止まざるものも、彼等が實際の事業に於ては、殆と同一に歸し、神學上の問題に耳馴れたる人にあらざる限は、殆ど彼等が說教の間に區別あるを發見し能はざるに至らん。去ればこそ近世に至り、普通の人民は漸次に神學者の爭論を度外視し、其人の所論よりも寧ろ其人の人物を尊み、一たび說教者の人物にして高尙なる所を認め、其道德及宗教心に卓越したる所ありと信する時は、其人の神學上の意見如何の如きは敢て顧る所にあらず。余輩は此點につきては普通人民は甚だ賢き所ありと信ず、而して尙ほ余輩が希ふ所は此實際的の賢き所を以て教會を支配しつゝある當路者の中にも、擴張し彼等をして無用の爭論に可惜日子を浪費せしめざらんことを切望す。

公衆禮拜の一部たる說教は教會の建德を以て其目的と爲せり、教會の教役者は尙ほ此外に時々各個人の生涯若しくば教會全躰の生涯に於て特別の場合に臨み宗教上の儀式を以て、或は物話により之を聖ならしむるの職務あり、譬へば小兒の出產、青年の成期及婚姻死亡等に關し、特別なる禮拜式を設けて之を聖ならしむるの職

務あり、斯の如き儀式は大に各個人若しくは、各家族の信仰上及道德上の生活に裨益する所尠からず、各個人と宗教的社會との連環を愈々堅固ならしめ、其間をして密着ならしむるものは、通常の公衆の禮拜よりも、却て是等特別なる家族的禮拜にあり、教役者は宗教社會の代表者として是等の家族に至り、其苦樂を彼等と共に分つにより如何なる貧なるものも、又世に捨てられしものも、尙ほ社會全躰の留意する所となるを悟らしめ、彼等をして此世に存して全く孤立のものにあらず、其苦も樂も社會公衆の願つ所なるを悟らしむるに至る、斯の如く社會と各個人との間を連環するの感情を温むるにより、各個人をして社會に對する責任の甚だ重大なるを悟らしめ又自己の生涯の價値を思ひ、其行爲の社會に對し、鮮少ならざる關係を有することあるを悟らしめ、大に警戒する所あるに至らしむ、かゝれば教役者の爲す所は、即ち普通人民の德義心を養成するに於て其力甚だ重大なりといふべし、教役者は宗教社會の機關として、社會の理想若しくは公衆の良心を代表し其罷責の安慰の詞は、普通の人の詞にあらず、即ち社會の道義的理想の詞、公衆一般の良心の詞なるにより、彼等に向ひ權威あり、勢力あり、以て之を教導するの効力を有す、而して其効力は一種特別にして、政府の官吏及學校の教師等の有すること能はざる所也、

政府と學校とは必ず教會と一致共同して、民人德育の進達を勗めざるべからず、然れども彼等は教會に代りて此職務を能くし得る者にあらず、何となれば彼等兩者は直接に民人の心情と良心とに入り、之を統御支配するの力なければ也、固より彼等も亦世に善なるもの、及び誠なる者を代表するに相違なしと雖も、开は唯一局部に止り、宗教の如く人生の全躰を感化するの勢力を有せず、人の生るゝや宗教は直ちに之を淨めて至高の理想に達すべきものと定め、又宗教的教育を以て之を養育す、直接には幼少なる者に宗教上の教育を授け、間接には其家族及學校に於ける宗教的感化を以て、大に民人の宗教的及道義的の品性を養成するに力あり、又彼等が已に成長して學校の薫陶以外に立つに及びても、尙ほ教會の禮拜と其他の宗教上の儀式及勸話等により彼等を教育し、奬勵し、指導して終生其教育を怠らず、宗族の制度に於ても婚姻を以て單に法律上の契約と見做さず、之を以て宗教的契約にして上帝の前に結べる貴き契とし、容易に之に違犯すること能はざらしむるに至

る、固より婚姻の始は、純然たる法律上の契約なりしに相違なしと雖も、今や一變して之に宗教上の意義を附隨せしむるに至りしは、甚だ家族の清潔を保護するに有要なることとなれり。且つ生存競爭優勝劣敗の現世に在て、世人は徒に法律の文面に眼を鐘め、爲に動もすれば世の弱者を苦しめ、弱肉强食の痛弊に陷らんとするの時に臨み、宗教は直接或は間接に弱者の難を拯ひ强者の暴を挫き、大に法律の力の及ばざる所を補足し得るの力を有す。かくて宗教は世の不平均を補ひ社會の成文律上の不文なる上帝の律法あることを示し、以て社會の安寧秩序を保護するに甚だ鴻益あり。最後に及び已に知識の力も其他の力も全く無効力となり、唯悲と愁との聲のみ聞ゆる慘場に臨み、宗教は忽ち之に授くるに無限の喜と望とを以てし、彼等の眼を地上より放ちて天外に向はしめ墳墓の彼方なる希望を懷かしむるもの也。」

斯の如く宗教の制度と民人の道義的教育との關係酷だ密着にして、決して離別すべからざる所あるは、これ即ち基督教の特色にして他の宗教に比して大に勝りたる所ある所以なり。古代の通俗的宗教は未だ嘗て眞誠に教會と稱すべき團体を形造したるとなし。彼等の崇拜は政治と密着なる關係を有し其儀式を司るものは、悉く

皆政府の官吏にして、特別なる團体を組織し、政治に對し獨立の位地を有するものなかりき。固より禮拜は國家の目的と密着なる關係を有するものにして古代の通俗的宗教が、當時の民人の風俗の上に大なる勢力を有したることは、何人も疑を容れざる所也。然れども古代に在りては宗教の代表者が、組織的の方法により民人の德育を擔當したるは甚だ稀に見る所にして、古代の希臘に在て「デルフ」に於ける「アポロ」禮拜の盛時に、其祭司等の國民の德育に關し與りて力ありしことは、著明なる事實にして、教會の制度の德育に多少類する所あるが如しと雖も、之とても國民が特別なる場合に限りしものにして夫の祭司等は不斷國民の德育を指導したるものにはあらず、希臘に於ける通俗的禮拜は、余りに外形の儀式に流れ、爲に德育に關しては寧ろ効力薄弱なるに至れり。去れば希臘の聖賢は、夫の豫言者の如く常に祭司等に反對して、彼等が外形的禮拜式の無價値無能力なることを主張し、プラトーの理想的國家に於ては、彼は國民の教育を祭司に委せず、却て之を政治家及哲學者に委したり。イズラエルに在て國民の德育に與りて力ありしは、祭司にはあらず、彼等と全く別種の團体たりし豫言者なりき。廢寓後に至りては夫の學者と稱し

又は會堂の教師と稱せられたるもの、專ら此任に當り、數々時の祭司等が、儀式の一方に偏するを見て、彼等に反對せる傾向を顯はしたることありき。猶太人の會堂なるものゝ聖書と祈禱とを重んずる心靈的禮拜を主としたるにより、或點に於ては基督教會の先驅者と稱すべけれども、這は唯「ユダヤ」教の一部分にして其全躰にあらず、時の強大なる祭司等の團体及エルサレムの中央に於ける聖殿の儀式的禮拜の局外に中立したるものなり。また其の宗教は專らユダヤの律法に固着し、國家的性質を有しまゝ多少儀式的を存せることありしより、純然たる德育の機關たることは能はざりしなり。回々教に於ても右と同斷にして、該教に於ては大に其の宗教を蠻族の間に傳播し妄盲なる蠻人を感化することを力めしことは疑ふべからざるの事實なれども、これとても未だ純潔なる德育を進むるの力あらず、又其の宗教は專ら律法的にして、殊に一種民族の爲めに設けたる所あるにより、竟に進みて人類全体の心靈的教育を司るの勢力なかりし、始て人類の境界を脫し世界的宗教の榮譽を博したるは即ち佛教とす。佛教は「バラモ」教の儀式及教義を超越し、直ちに人類の中心に訴へ其救濟の說教により、平和と自由とを與へたり、また世の道德を進め腐

敗を淨め、罪惡を制するの力は、佛教の中心たる救濟の觀念に在て存することを疑ふべからず、之を歷史に徵するに佛教はよく蠻族を感化し、其妄盲を制御するの力を有したり、然れども佛法の教會も亦一方に偏依する所あるが爲め、多少其感化を減殺するの患を免れず、佛法の教會の起原は、通世したる僧徒の團体に發したる蔽ふべからざるの事實なり。故に其本は純然たる僧侶の團体なりしが、漸次に俗人も之に加り、竟に社會に向ひて强大なる勢力を有するに至りしも、未だ全く寺院的の趣味を脫することを能はざりし也、而して其理想とする所は、自己及世を捨つる消極的の德義にして、進みて一個人及社會全体を聖ならしむるの積極的の感化力に乏しき所あり、爲に歷史上に於ける感化力は寧ろ人をして靜寂無爲に傾かしむるも、活潑有爲ならしむるの力に乏しかりき。

然るに基督教會は一種特色の教育力を有し、爲に民人の德育に於て大なる勢力を有したり、教會は始よりして地の鹽、世の光たるべき責任あるを忘れず、又其俗界に對し及內部の組織を整頓するに於て此責任の意識を失はざりし、最初の間は勤めて此世を遠離し、只管に天より降るべき基督の王國を翹望したりしも、之が爲に此

世を制服し人を救ひ世を淨めて、將來に來らんとする王國の民の準備を爲すに熱心せり。然るに世の變遷に連れ將來に於ける王國の希望も、漸く薄弱に傾き背後に退歩するに至り、其始の未來に於ける大目的を成就せんとするの方便なりしものは、今や自ら其目的其れ自身と變せり。かくて基督の再來を翹望し、現世を輕視したる基督教會よりして現世を支配し各邦の教育を以て其責任義務と認むる中古の教會起れり。「カトリック」教會に欠點多く、亦其弱點も多かりし事は決して蔽ふへからざる事實なれども、之と同時に吾人は彼の教會の外交内政共に悉く皆人類の教育者たるへき責任を感ずる大なる動機に基きたることを否定することを能はざるべし。彼は此世を得んが爲に自ら力めて之に傚へり、又諸國民を救はん爲に彼は力めて萬事に於て彼等の間に傳りたる慣習及觀念を許容したるのみならず、亦自己の禮拜及信仰の中に是等を採用するに至れり。彼は異教國民を率ひて基督教的の思想及生活に至らしめんと、其教義を飾るに鬼神論及哲學等を以てするの必要を感せり、又禮拜の儀式を嚴にし不可思議と莊嚴の分子を用ゐて人心を擒にするの術を盡したり。彼亦僧侶の團体を組織し俗界の權力以外に獨立し民人の前に一種の

威嚴と權力を有せしむるの必要を感せり。されば中古の教會に於ける内外の爭、内にしては異端者及分裂者に對するの措置、外にしては帝王國民及市府等に對するの爭は彼が萬邦民の教育を司るべき責任ありとの、大なる觀念より發し來れる自然の結果なりしことは容易に悟了し得べし。中古の教會は之を以て其職務と認め之を成就するを其義務と信じ、又或點までは多少實際に之を成就することを得たり。

吾人「プロテスタント」は凡て是等の事情を許諾するを惜むの必要なし。殊に中古の始に於ては「カトリック」教會は能くも其義務を果したるものと稱すべし、然れども同時に斯の如く世界を支配せんと企てたる「カトリック」教會の事實に伴ふ弊害の夥多なりしは、余輩が認めざらんとするも得て能はざる處なり。最初間は彼教會の教育の效果大なるにより、多少其弊害を償ふ所ありしも、漸次其增長を見るに從ひ、世を蠹害すること最も甚しきに至り、其監督の如きは、當初は單に教會の信任を得て、其重職に立つ單純なる意識のみを有したりしが、漸次變遷して終に基督の代理、使徒の權任者たるの權威を專領して、教會を支配するの位地に立つことゝはな

れり。斯の如きは已に新約書中の牧會の書に於て見る所なるが、第二世紀の中半イグナチウスの書簡に於て、一層明白なるを見る。また基督を以て三位一躰の一個の「ペルソナ」と崇め、之を奥妙深遠の闇黒に遠げ、其禮拜に漸々奇跡的の分子を含有せしむるに至り、其代表として禮拜を司る監督の職にも、超自然的の榮光を放つに至れり。此を以て監督は聖靈の特別なる器物となり、一點誤謬なきの眞理及救濟の恩寵を專有し、天國の鑰を所持して教會と神との間に立てる中保者たるに至れり。抑々斯の如き變遷は、これ夫の中古の教會が其責任と認めたる萬邦民を教育するの義務を盡さんが爲に、之を支持せんと欲したるより生し來れる自然の結果なりと知るべし。然れども一旦茲に達するに及び、基督教は其の高貴なる道德及宗教の位地より墮落して劣等なるに至り、教會の信徒は皆これ祭司にして神と直接なる交を爲すとの、高尚なる信仰ハ消失して、特別なる祭司の一階級顯はれ、神と教會との間を隔離せしめ、信徒各直接に神の救濟を受くべきとの意識は一變して、各自の救濟も亦教會の主張する權威と、外形的恩惠の方便に由らざるべからざるに至れり。かくて神の小兒として、其恩惠の中に立つ自由の信仰は消失し、人爲の阻隔物なくして、

直接に神に對して責任を負ふ高尚なる道德心は廢頽し、再び律法及儀式の奴隷たる憐れむへき狀態に陷りたり。

宗教改革に及び各自直ちに心を神に獻呈して、之に服從するの信仰を以て救濟の唯一なる源と發見するに至り、基督信徒は祭司の中保及僧侶の壓制を脱し、直接に神の恩惠に與るの自由を得、各自自ら神の眞理を確信し、換言せば「プロテスタント」の基督教は、古代の使徒時代に復歸し、全信徒を擧げて皆これ神に仕ふるの祭司なりとの主義に立ち戻らしむるに於て、教官と教會との關係全く一新するに至れり。然れども又或者の誤想せし如く、全く之が爲に教官の階級を磨滅し去るの極弊に陷りたるにあらず、却て教官は始て基督教の心靈的及道義的性質に適ふ眞誠の位地に立つことを得るに至れり。凡て教官は「カトリック」教會に於けるが如く、教會の上に位し一種の權威を有するが如きものにあらず、寧ろ衆信徒の團体中の一部となり之が機關たるの用を爲す者となれり。「プロテスタント」の教役者は超自然的の職權を以て、教會の信仰と生活とを支配する「カトリック」教の祭司の如き者にあらず、彼は即ち詞の教役者なり、彼が公衆の禮拜及其他の職掌に於て凡ての者の名

及權威とにより」(詞は全教會の共有する所なれば也)宣言する所の詞によりて、衆人に基督教の精神を頒つべきの役目を有す、彼と教會の他の會員との區別は、純然たる社交的にして、恰も官吏と普通の民人との區別に等しく、唯道德及宗教的社會の機關たるに過ぎず。然り其區別は單純なる社交的にして宗教上に於て他人に勝りたるの權利を有する者にあらず、他の教會員と別種なる特別の關係を神に向て有する者にあらず、神の小兒たる權威の外に別種の特權を有する者にもあらざる也。一言以て之を蔽はゞ「プロテスタント」の教役者は奥妙機密の職權を有する者にあらず、故に彼は國法及之を代表する官吏に對し、例外の位地を有する者にあらず、凡て民人の負ふべき義務は彼も亦咸く之を負ふ也、彼は自己の職權を以て官權と平等なりと云はず、固より之に勝れりと云はざる也、彼は敢て政權を冒すことなく其律法を左右し其政略をして教會の目的に從はしめんと欲する者にもあらず、彼は國家の中に國家を組織し、若しくは國家の上に國家を組織するが如きことを爲さず。夫の羅馬「カトリック」教會が採用せる俗界的政略の如きは、「プロテスタント」教役者の全く排斥する所となれり、何となれば社會を支配するは彼の目的にあらず、却て之に仕ふるを以て其本分と思推すれば也。

「プロテスタント」の教會は斯の如く世界を支配するの權力を捨てゝ、敢て之を顧みざるにより其人民を教育する道德上の勢力、果して中古の「カトリック」教會に劣れる所ありとする耶、或は人民の德育ハ既に教會の與かる所にあらず、之れを政府に放任し、自己は唯宗教上の禮拜のみを勤むるを以て足れりとなすと思惟する耶、抑々此兩者共に誤れり、斯の如きはこれ道德及宗教的教育と律法及警察權により民人を强壓せんとするの業との間に於ける正當の區別を劃し得ざるもの也、宗教改革起り始て教會は其正當なる位地に復し、民人の道義的及心靈的教育を司るに甚だ適當なる道を得るに至れり。宗教改革者は福音の働くべき範圍、即ち道德及宗教の支配すべき範圍(ルーテルは之を稱して基督の王國と云へり)と國法及政權の支配すべき範圍を明に區分せり。此兩者はこれ即ち此世に顯はれたる神の王國の兩側面にして、其性質に於て各異殊なる所ありと雖も、全く之を分裂すべきものにはあらざる也。「プロテスタント」の主義たる信仰及良心の自由に基き、此兩者の間に區別あるを要するは、蓋し當然の事なりと雖も、宗教改革者は政權の神より發し、また國法及

社會の秩序は深く民人の生活に道義上甚だ肝要なる所あるを認得したるにより、彼等は教會を以て常に國家に委頼し、又其整理保護の下にあるべきものと思惟せり。斯の如く一方に於ては政教を分別し、他方に於ては教會を以て尚ほ國家に委頼する所あるの組織となせしにより、始て福音的教會の正當なる働を爲すの舞臺を開くことゝなれり。之に因て「プロテスタント」の教會は此世を支配せんと企てたる「カトリック」教會に勝り、一層純潔なる民人の德育を成就することを得るに至れり。」晩近に及び教會と政府とを分離せしめよとの聲頌に起りたるは何人も知る所なるが、吾人は斯の如き要求の起りし理由を容易に覺知し得べし、これ蓋し從來教會と政府との間に於ける間斷なき爭鬪の爲に、双方共に少々ならざる害毒を蒙りたるが故也。されば有害なる爭鬪を厭忌するの餘之を分離せんと欲する心起りたるは、必ずしも非理なる事にあらずと雖も、此弊害を矯正せんが爲め政教分離と云へるが如き激變を起さんとするが如きは、或は極端に走りたるの處置にはあらざる耶、余輩はかゝる大變革を行ふ前に於て(其結果を何人も之を豫知すること能はず、然れども必らず又必然社會全体に大震動を與ふるに相違なからん)須く現今兩者

の間に横はる問着及弊害は、果して其分離を要するが如き重大なるものにして、國家と教會は到底分離せざるを得ざるが如き性質を有するものなり耶、或は是等の問着弊害は唯一時の出來事にして之を除くの道は、互に少しく意を用ゐる所あり、又は互に退讓し各正當に其分限を守らしむるに依て成就し得るものにはあらざる耶、好し全く之を除却し能はざるも、其弊惡をして甚しきに至らざらしむるの力なき耶、是等は宜しく專心熟慮すべき要點なり、また「プロテスタント」に於て教會と稱する時は凡の教會を一括したるの謂にあらざることを注意すべし、諸の教會と國家との關係は各異殊ありて、其問着大なるものあれば小なるもあり、其弊害多きもあれば少なきもあるにより、夫の羅馬教會と等しく「プロテスタント」の諸教會と國家の關係は、悉く皆同一なりと思惟するは、抑々誤謬の甚だしきものと謂つべし。」羅馬の教會は其神政主義と千有餘年の歷史とにより、自主權利を有する近世文明國の政府とは、到底平和の關係を有ずること能はず、若しこれと平和の關係を有せんと欲せば、彼先づ世界を支配するの希望を放棄せざるべからず、然れども政府の外交内治に干渉し、社會の秩序、婚姻、教育、學制及學術等を自己の主義と其目的に從

はしめんと欲することを禁せんと欲するが如きは、これ即ち自らを滅すの業也。然れども近世の政府は其自主權を放棄するにあらざる限は、決して彼が要求に應する能はされば、近世の政府と羅馬教會との間には、決して眞誠の平和を保つこと能はず、假令公然相爭ふことなきも互に長目豺眼し、彼は一の機會を得は直ちに他の政略に干渉せんことを覬覦し、此は自己の制度法律を維持せんが爲に常に教會をして其境界を越えざらしめんに汲々たり。自己の利害を維持せんが爲には、政府は決して羅馬教會に對し無頓着の位地に安んすること能はず、また決して安ずべきものにあらざるなり。猥に抽象的自由說を重じて羅馬教會の如き强大にして且つ大望を有し、片時も油斷なく其目的を達せんと欲するの機會を覬覦しあるものを以て、其爲す所に放任して顧みざるが如きは、決して政府たるものゝ爲すべき業にあらず、若し誤りて斯の如き處置を爲さんか、其災害を蒙るや遠きにあらざるべし。一たび羅馬教會をして自由の運動を爲すべき餘地を與へんか、政府は必ず其の彼が自由と稱するものは、總ての人及總の者の上に無上の權威を以て之を支配せんと欲するものなるを悟り、後悔臍を噬ひも及ばざるべし。故に國家の爲に籌劃する

時は「カトリック」教會に對しては、政府は豈に漫に之を政權以外に放任して可ならん哉。

福音主義の教會に於ては事態全く前者と異なり、政府は之が爲に其獨立を毀損せらるゝが如き患憂は殆ど有得べきものならずと斷言し得べし。時々妄信的宗教家ありて政府の權限を犯さんことを勤めたるものなきにしもあらざるも、是等は例外の出來事にして、固より「プロテスタント」教會の主義とは無關係なり。福音主義の教會主義は此世を支配するにあらず、又政權の源は神に在り故に萬事に於て國政を整理するは其權利たり、また民人は其良心の許す限は萬事に於て政府に服從すべきの義務あることを教ゆ。「プロテスタント」の教會は到る所に於て、其國法及制度を遵奉し、又甘じて其保護監督の下に生存するを得なり、否「プロテスタント」教會は其始よりして自己に直接なる反對を爲すものにあらざる限りは、政府の權力を信用し、數々其組織及整理法とを政府の手に托したることさへありし。斯の如く政府に讓るに莫大なる權利を以てするの教會は、其妨害を爲すの患なきや蓋し言を費ずして明白也。

是に由て考ふるも政府は教會に對し當に權利の一方を持するのみならず、併せて其義務をも帶ぶること明白也、若し之を怠る時は必ずや國家を毀損せらるゝの患あり、假令妄信家が教會の清潔を保たん爲に主張する教會の自由といふが如き、若しくば抽象的自由論者の純然たる理論に基きて之を爲すも、其害を受くるの點に至りては彼此咸な同一なり。教會に對する政府の義務は、凡て社交的關係に於ける義務と等しく、消極積極の兩側面あり、消極より云へば政府は成るべく教會の信仰と禮拜とに干涉するを止め、其の內部の生活を毀損せざらんことを勗めざるべからず、又積極より云へば、政府は教會の社會に於ける位地及運動、吾人が稱して民人の德育といふ教會の事業を及ぶ丈け補助すべし、かく教會と政府との關係に於ける兩側面の區別を明にし、一方より云へば教會は宗教的禮拜の爲に設けられたるものなれども、他方より見れば、民人の德育を司るものなりとの二個の異れる性質あることを記臆するは甚だ緊要の事なり。政府が教會の信仰及禮拜に關し全く其自由に放任し、單に內外より起る一切の妨害を除くの保護に止り、其國民の德育に關する點に於ては之を整理し、之を指揮し、之を補助することを勗むるにより、兩者

の間に起る一切の鬪爭は除かれ、互に其欠點を相補ひ以て各自の目的を達し得べし。

政府は教會の幫助を假らずして、其治政を全ふすること能はず、教會も亦政府の幫助に依らざれば、以て其目的を達すること能はざるは、少しく思慮あるものゝ容易に認め得る所也。法律の力は漸く民人外形の行爲を制御するに止り、其內心の事情に關しては、全く無効力たれども、凡て社會の安寧秩序は法律及警察の力の達し得ざる人心內部の情態に關係す、また國家の觀念は實に高尚にして民人の道義心を喚起するの効力を有すと雖も、これ唯其一小部分に止り、民人の多數は此の觀念に因りて其の道義心を涵養せらるゝが如きものにあらず、國家てふ觀念は彼等の爲には無味淡泊なる抽象的なれば、以て其感情を動かすに足らず、多數の民人が政府と直接の交接を有するは、重に收稅吏の媒介による、然れども斯の如き交接は、彼等の心に國家を愛するの感情を起さしむるには甚だ不適當なり、或者は學校を以て善良なる國民を形造する強大なる要具なりといふ、余輩は教育の要具として學校の有效あるを疑はざるも、學校の感化力を受くるの事實は頗る單簡にして唯之の

みに委頼する時は、充分の好果を見ることを能はず、また僅少なる日子の間に於ける學校の教育も、亦大に家庭と教會との補助に委頼す、若し此協力なく或は家庭と教會の教育は、學校の感化に反對するものならんか、如何に善良なる學校の教育を授くるも、恐らく其學生の道義心を涵養するの力あらざるべし、殊に現今の如く實利を主眼とし、唯教育と云へば成るべく多數の知識を學生の腦髓に貯蓄せしむるを以て其本領と爲し、却て人間全躰の諸能力を圓滿に發達せしむるの必要を忘れたる時代にありては、學校の教育も亦從て其の感化力の微弱なるや明也、苟も圓滿なる發達を希望するものは、單に知識の一方に偏することなく、學生の正當なる感情を發達せしめ、又其の身躰の發育をも計らざるべからず、然るに策茲に出でずして只管に知識を貯ふの一端に眩惑狂奔する時は、學校の效果愈々減するに至らん、若し人あり方今教育の方法大に進み、其生活の道甚だ複雜なるにより、學生の學習するもの、多々益々加倍するを以て及ぶ丈け多の知識を學徒に授くるの必要あるを以て、圓滿なる諸能力の發育を計るの餘暇なしと云はんか、余輩は之に應じて假令如何なる事情の存するも、現今の如く學校の教育諸種の知識を貯へしむる一方に偏せしむる時は、高尚なる人物、善良なる國民を鑄陶するに遺憾なしとする耶、唯徒に其學ぶ所は多種多端に渉ると雖も、咸これ淺薄非近の知識にして、又一個の深遠玄妙の達人に至るものなく、空しく半可通半識者の人物を輩出し、猥に自ら尊大にして、世の古老先人を嘲り、恰も天地を一呑したるが如く世に誇り、柔順鄙重に其身を處するの道を知らざるが如き輕躁巧慧の徒輩を見るのみ。

現今の如く物質的勢力熾にして、實利主義其勢力を逞するの時に於ては、其權衡を制して心靈的の勢力を發達せしめんとするには、基督教會を措きて他に良法あるを見ず、教會の代表者たる教役者は公衆の禮拜及其他の宗教上の職務により、此物質的傾向を阻遏して其弊害を矯正するに最も適當せり。第一教會の主張する道德は夫の空中樓閣の如き類にあらず、國民が幼時より多數年間陶活せられたる世界に關する宗教的觀念に基き、其教育は啻に幼時に止まらず、民人の生涯に渉れば其効果も一時半刻の者にあらず、嚮にも余輩が述べたるが如く宗教的教育の主眼とする所は、理論にあらずして實際に民人の道義的及宗教的品性を涵養するにあり、また啻に公衆の禮拜の時に於けるのみならず、教會の牧師は各個人の生涯中最も其心を動

し易き歡樂の日にも、悲痛の時にも、慰と誡の詞を以て常に是等を敎育す。變遷周流極りなき此世に在て疲衰困憊せる人心は、牧師の述ぶる永遠の眞理を聞きて、大に其心を安慰し、牧師が道を傳ふる時に當りては、金殿玉樓に住める貴人にも、茅屋破窓の下に臥す貧者にも、更に差違する所なく、齊しく彼等に授くるに福音の眞理と、神の恩惠の詞を以てするにより、其働ハ上下貴賤の隔障を打破して、眞に平等の道念を涵養するの力ある也。現今の如く口に平等說を唱へながら、其實は上下貧富次第に相隔絕するの時に於ては、一切の人に對し同樣の感情を以て同樣の眞理を傳へ、彼等をして同一の神の律法に從はしめんと欲ずる牧師の働は最も大切肝要なり、敎會は啻に民人の靈魂を養ふのみならず、亦彼等の肉の貧しきと病をも助くることをも勤む。政府も之が爲に多少力を盡す所なきにあらざれども、兎角に政府の爲す所は法律に檢束せられ、其運動自在ならざるが爲に、適宜の幇助を適宜の場所に與ふること能はざること數々也。また貧者若しくは病者等は政府の監理よりは敎會の牧師に委賴し易く、牧師は豫め人情世態に通する所あるを以て能く其事情を酌量し、不運と罪惡とが相錯乂して、殆と分別し能はざるが如きことあるを觀通し、一方に於ては肉の賜物を以て其目下の難を拯ひ、他方に於ては數々其難の源なる靈の病を除さん爲に、福音の眞理を以てすることあり。牧師は富者に接しては其の慳貪の心を柔げて慈悲の心を起さしめ、貧人に對しては其失望の心を回復し、之を奬勵し且つ其分限に安ぜしむるの業を爲すにより、彼は實にこれ貧富の間に於ける爭鬪を調停し政府の力の及ばざる所に於て民人間の階級の間に生する怨恨を除抹し得るもの也。又牧師の感化力は獨り其職掌を務むる時に限らず、彼が敎會の中にあるは一切の信徒をして常に神及天の如何を憶記せしむるの目標たり、彼は總て貴きもの善なるもの心靈的及未來に關するものを代表す。彼の高貴なる威嚴と自負に等しき恩愛とにより、其人物一種奇態にして民人を敎訓する詞は、他に其比類なきの勢力を有す、殊に田舍の敎會に於ては牧師は、其敎會員の良心、彼輩の中に於ける道德及權威の代表者及支柱にして、一般の人は高尙なる品格と職權の威嚴を有する牧師を現世及來世の權威を代表するものと信ずる也。かゝれは福音主義の敎役者も亦其敎會と神との中間に立つ中保者たれども、「カトリック」敎會の祭司の如く、外形的權威を以て然るにあらず、唯其道義上より神の眞理を敎え、基督信徒生活の理想

を其身に表彰するに由るかゝれば、カトリック教會の祭司の如く神と民人との間に立ちて其間を隔離するものにあらず、寧ろ彼等を率ひて神に到らしむるの中保者たり、余輩が曩に中保者を論するの段に於て示したる區別は、今此カトリック及「プロテスタント」の教役者に就きても亦同樣なるを見るべし。

是に由て之を觀れば、教會の教役者の手に成れる民人の德育は、國家の爲に必須たるや明白也、去れば政府も亦及ぶだけ教會の業を保護せざるべからず、政府は牧師の階級を以て國民間に於ける正當なる團体と認め、之を保護し直接に禮拜に關せざる限は、其整理をも補助せざるべからず、而して教會の牧師は其生計に窮せざらん爲めに、之に適當なる給料を與ふるとを計らざるべからず、何となれば生計に窮する者は、勢ひ社會に立ちて其獨立を保持すると能はず、爲に他人の尊敬を失ふこと多し、且つや牧師は啻に禮拜の事を司るのみならず、民人の德育を司るにより、稱り教會の公僕たるのみならず、亦國家の公僕たるの資格あるにより、政府は之が教育を忽諸に附すべきものにあらず、時勢に遲れて時の文明と共進し得ざるものは、到底人民の上に勢力を有すると能はざるべし、如何に高尚なる人物にても時勢に

遲れたる教役者は時の有識者に對して勢力を持すること能はず、其思想は一方に偏して當世の要求に應ずること能はざるに至るべし。去れば凡て教會の公僕者たらんと欲するものに向ひ、普通大學の教育を要求するはこれ即ち政府の義務也、又其大學の教育なるものも、單に專門の神學のみに限らず、博く人類全躰の學科をも加へざるべからず、然れども神學の傍區に二三の講義を設け、以て其目的を達せんとするが如きは甚だ不充分なる方法と云はざるべからず、今此弊を矯めんと欲するには、大學に於ける教育にして牧會に志すものと他の事業に志すものとの間を一層親近ならしむるを以て甚だ適當なる方法と思惟す、大學に於ける學生は其牧會に志す者も、又他の事業に志す者も多くは同樣の教育を受けしめ、彼よりして此に移り、此よりして彼に移つるに易からしむるを以て得策と爲す、斯の如きは啻に教會を益するのみならず、亦大に學校にも益する所なるべし、若し此事實行せらるゝ曉に於ては、現今の如く教會と學校との間に、爭鬪を起すの道絶え、兩々相提携して互に裨補せらるゝに至らん。

然るに現今の傾向は、其反對にありて、漸次に教會と學校及社會との間を隔離せん

とするもの、如し、社會は教會を以て、已に陳腐に屬する文明の有害物と認め、成べく社會の事業に干渉せしめざらんことを力め、教會はかゝる社會の傾向に接し、成べく俗界の事業に觸れざらんことを力むるものゝ如し、これ實に相互の不利益の極にして、其責其罪實に相互に在り、若し互に能く相互の價値を認定して其分限を守るに於ては、是等の弊害を洗除し去ること、亦難事にあらざるべし、社會は其民人の道德を教會に托せざるを得ず、之を除きては他に其代用を爲し得るものなきを悟らざるへからず、教會は亦社會の爲に民人の德育を施すに當り、其事業は必ずしも確定したる宗教上の教說の如何に關すべきにあらず、假令教說は禮拜に於て甚だ必要なるも、一般民人の德育に於ては、孰れの方法に從ふも更に異なる所なきを悟らざるべからず、若し然らざれば爭でか異殊の教說を進率する教會にして、同一の德育事業を成功し得べきの理あらんや、若し教會が民人の德育を必ず確定した神教說と伴はしめんと欲するが如きことあらば、到底現今に於ては社會の抵抗力に接せざるを得ざる也、果して斯の如くならんか、これ即ち光を桝の下に隱し、以て世を益するの効力を失ふに至らん、若し基督教の詞に從ひ、世の光、地の鹽とならん

と欲せば、須く先づ一切民人の德育に必須なる基督教主義の理想と其教說とを得同せざらんことを力むべし、凡そ教說及儀式の如きものは、禮拜の爲に設けられたるものにして、禮拜の時に於て欠くべからざるものなりと雖も、之を以て宗教的教育と爲すは誤れり、否、是等は單に其目的を達するの方便にして、必ずしも一切の者に向ひ同樣に之を遵奉せしことを望むべきの必要なし、唯其時に於て之を用ゐるべきと否とは、時機に臨み事情に應し、教役者の適宜に任じて可也。

教會の制度も亦全く政府の無干渉なるべきものにあらず、何となれば其制度の如何により、大に國民の上に利害を及ぼす所あれば也、「カトリック」教會に對しては、政府は更に其制度に干渉すること能はず、これ蓋し彼の教會には千有余年の歷史的口碑あり、其制度を悉く基督の自ら設けられたる教會制度に基くものなりと主張するに由る、然れども政府は國家の安全を保護せんが爲に、夫の教會に對しても、高等なる教官、監督及大監督の如きものも、其任免に關しては必ず自ら之に干與する所なかるべからず、若し其人にして國家の安寧秩序に不利益なりと認むる時は、其領内に於て職權を行ふことを許さゞる丈の權威を有せざるべからず、かゝる權威

は「カトリック」の政府が從來使用したるものなれば、「プロテスタント」の政府に於ても、自己の保存を圖る爲に、其權威を持するは亦止むべからざる也。

教會の制度に關する「プロステタント」の見解は、全く「カトリック」教の見解と異殊なる點あり、後者は教會を以て國家的に組織したる社會と看做すが故に、教會自身は即ち絶對の目的也、其禮拜の如きは、唯其目的に達するの方便たるに過ぎず、然れども「プロテスタント」に至りては、禮拜、說教及其他靈魂の爲に經營するを以て、其最大目的と爲す、而して教會の制度の如きは、唯此目的を達するの方便たるに過ぎず、故に教會政治或は教會制度の如きは、「プロテスタント」に於ては、已に宗教上の問題にあらざるなり、故に羅馬法王の權威の「カトリック」信徒に於けるが如く一の教會制度も信仰の箇條となるべきものにあらず、唯實際上の便利に從ひ、如何なる制度を用ゆるも、時と場合の需用に應するを以て足れりと爲す、故に教法改革後の「プロテスタント」の諸教會は、種々雜多なる教會制度を採用したりき、「レフォームド」教會は、其制度の基礎を會衆主義に則り、教會の政治を悉く其代表したる長老會、中會、大會等に由て施行す。此制度は「プロテスタント」の主義たる會衆は、皆これ神の祭司たりと

の精神に適合するものにして、教會の自持及其擴張の爲に甚だ適切せり、若し此會衆主義にあらざりせば、「カルヴァン」派の諸教會は迫害の中に在て彼が如き活潑に國家の革命を計り、或は教會の擴張を計ること能はざりしならん、「カルヴァン」派の教會が世界の歷史に於て著しき位地を有したるは、蓋し此主義に基けり、之に反し「ルーテル」派の教會は其政治を擧げて神學者と法律家を以て組織したる教官會に放任したれば、其教會は始より會衆の教會と云はんよりは寧ろ神學者の教會たりし也。

これ固より「カトリック」の宗門政治の如きものにあらざるも稍之に類似したるの傾あり、夫の教會に於けるが如く救濟及信仰に關し超自然的の權力を有する祭司の階級なきも、聖書に關し特權の知識を有し、會衆の上に立ち之を指導するの權職を有する神學者の一階級を起し、此小數の團体により教會全体の政治を司ることゝはなれり。固より斯の如き小數政治も時と場合に於ては必ずしも便益なきにあらず、夫の三十年間戰爭の後獨乙人民の宗教及道德を維持し、其自持の力を失はざらしめしものは、實に「ルーテル」派の教官なりしことは、歷史に於て照々乎たるの事

實也。然れども此制度の弊害も亦輕々視すべきものにあらず、恰も政治は官吏の職業たるが如く、教會の政治も全く神學者の職業となりて、普通の信徒の與かり知らざるところとなれり、會衆一般が其の政治に參與すること愈々減するに從ひ、民人一般の宗教上及道義上の生活に於ける教會の感化力も、亦隨て減少せり。斯の如き會衆と教官等の間に於ける隔離の弊害を矯正するの効力を有したるものは、夫の「パイチズム」と「ラショナリズム」也。殊に後者は教會の教官等をして其力を專ら教說上に致さしめず、寧ろ之を道義的及實際的に移したるにより、大に此弊を矯正することを得たりき。然れども今世紀に於ける非「ラショナリズム」の運動は、其益する所夥多なりしにも係はらず、教會の教官等をして堅固なる「オルソドックス」の教說を維持せしめんと欲するにより、從て彼等に特別なる階級の精神を養成し、自ら普通の會衆より自己を區別するの傾向を長ぜり。

右の弊害を矯正せんが爲に、近頃會衆政治の主義を輸入して、教會中に代議者を撰むことゝなれり、これ宛も「ルーテル」派と「レフヲームド」派の教會制度を折衷したるものゝ如し。然るに其結果たるや折衷制度熱心家の渴望せし如きものたらずして、却て傍觀者の憂慮せし諸種の弊害を現出するに至れり。始て此折衷制度の行はれんとするに當り、局外者は說を爲して曰く、會衆政治は美は即ち美なりと雖も、現今の如く宗教界の思想動搖して已まざる時に於ては、其制度の好果を見るの前、先つ其の弊害に遭遇することあらんを恐る。今や事實に於て其の憂慮の稍當れる所あるを見る、一たび代議會起りて教會政治に參與するに當り、神學上及教會の制度上に種々の黨派を生じ、其の爭隙は宛然普通の國會に於けるが如く紛亂錯雜し、一府教會內に異論百出、竟に黨派の精神を强盛ならしめたり。然れども今に至り此弊害を見直ちに之を癈止すべきにあらざれば、政府は愈々進みて教會制度に干涉し是等黨派の爭隙を其窮極に至らしめざらんことを勤むるの必要を感ずるに至れり。固より政府は其職權を以て教會の內治若しくは其信仰禮拜等に干涉し、猥に甚督信徒の自由を妨害すべきにあらざるも、政權の許す限は適宜の處置を施して各黨派の爭隙を制し、多數者の壓制を防禦し、少數者の權利を保護し、各人各個の信仰と良心の自由とを全ふせしむることを勤めざる可からざる也。

第十章　宗教と道德

高等なる文明の世に於て、宗教と道德が互に密着して相應響するは爭ふべからざるの事實なり、されば世人が誤て世の始より常に然りしものと想像するは、蓋し自然の結論なり、また事實に於て之を斷定するも敢て不當のことにあらざるを信ずれども、此の斷定を下すの前に於て吾人は左の二個の事情を記憶せざるべからず。(第一)道德と宗教との間に應響の關係ありといふは、此二者を以て同一なりとするの意にあらず。(第二)太古の宗教も道德も吾人が現今に於て此名稱を附するものとは、稍々其趣を異にすること也。此兩點は世人の往々看過し去る處にして、或者は純粹なる道德は、純粹なる宗教の一要素たるにより、元と天啓より發したりと主張し、或者は其反對に出でゝ宗教は高尚なる道德心より吾人の義務を神の命令なりと認むるより、若しくば吾人の道義心を鞏固ならしめん爲め、神の幇助を仰がんと欲する良心の必要上より發したるものといふ。されば近世に至り宗教學進歩して、太古の宗教と現今の道德の理想との間には、大なる徑庭あるを發見するに至り、前者の議論に全く反對するの說起るに至りしは蓋し自然の勢ならん。太古未開曖昧

の世に在て宗教上甚だ緊要にして貴重なるものと尊敬したる中には、道理に照さば全く無價値なるもの多く、又今日より之を回顧せば、決して怨すべからざる汚穢の行爲も、彼等太古人は更に宗教上より之を非難することなく、否、却て宗教の名を以て是等の醜態を現したることあるを見て、宗教と道德とは全く無關係なりしが、世の進歩するに從ひ此兩者ハ相混同して一体なるに至れりとの說を主張する者あるは、必ずしも怪むに足らざる也。

然れどもかゝる主說は、元これ本問題に關する諸の現象を充分に理會し得ざるより、發し來れる早計の結論たるに過ぎず、若し宗教と道德は齊しく人類の理性より發し、其理性は始に於ては感情の形狀を裝ふて、實際に顯はれたるものとし、而して人類は有機的唯一なりと信ずる時は、吾人は始よりして此兩者の間に、密着の關係ありしことを認めずんばあらず、かゝる關係ありしことは、之を事實に徵して證明し得べし。凡そ道德の起原は、社會の原型たる家族に於ける、家人相互の交際より生したる慣習に發したり、家族の間に自然に發する同情、共愛及家主に對する恭順、畏敬、信任等の感情は、これ即ち道義心及社交上義務責任の觀念の由て發したる源也。

是等の觀念は秩序及規律の必用を感するにより、一層鞏固なるを得、最後に於て大なる法律の根底たる賞罰の觀念も之に伴ひて發したり。是等の感情は人生固有にして、人類の理性は始より自然に是等の感情に依て顯はれ、而して社會に於ける習慣制度も之れより發せり。各個人は之れに依て其の行爲の定規を得、茲に始て道義心即ち良心なるもの發生するを得たり。良心を以て人生固有なる道義の實典の如く思惟するは、心理學に晦なる者の謬見にして、斯の如きは文明進歩の最終の結果を以て、其始に歸せんとするの類也。凡そ吾人が意識の容量として存するものは、一も固有と稱すべきものなし、唯固有ともいふべきは、外界の刺激によりて、是等の容量を形造する能力是れ而已。家族、種族及民族の間に於ける社交上の關係により、吾人が本性の社交的感情を發揮し、竟に習慣制度の如きものを形造すること、なれり。夫の義務責任若しくば法律制度といへるが如き抽象的觀念は、右の如き社交的感情より發揮し來れるものなり。然り而して社交上の關係愈々複雜なるに從ひ、是等の觀念も次第に發達し、而して其の發達の有樣は、決して一定するものにあらず、此に於てか民族と時代とにより、其道德上の見解に異種異類を生するに至れり。

夫の超自然的論者は道德の發育には、斯の如き自然的の發育あることを看過するにより、之が正當なる解釋を下すこと能はざる也。然れども近世の實驗派は、單に其發育の自然的事情にのみ抱泥して、却て其事情に斯れ由らざる道德の基礎あることを忘却したりし故に、彼等は道德を以て實驗的實利に基くものと看做し、大に其價値を減殺せんとしたり。實驗派は亦宗教の起原を以て不道理なる拜靈拜物の妄信及主我主義の魔術等にありとするを以て、宗教と道德上の間に同一の基礎あることを承認せざるが如し。唯兩者の間に齊しき所あるは、二ながら理性に基かずといふの一事あるのみ。斯の如く道德と宗教は全く異れる基礎より發したるものなれば、始に於て彼等の間に一致の痕なきは、實に怪しむに足らず、却て怪しむべきは後世に至り彼等が和合して、互に應響するに至りし事實也。

余輩の見る所は大に之と異なり、宗教と道德とは其發達如何なる境遇によるも、二者共に人の理性に基くものと思惟す。人は萬有を見て得たる所の感得によりて宗教心を惹起し、又社交的生活の刺激によりて道德心を發揮す、是れ二つながら人の理性の動作也。假令其顯はるゝ所の形狀は如何に異なるも、元と同一の根本より發したる

とは常に道德と宗敎との間に密着の關係あるを見て知り得べし。されば如何に世人が利己を以て太古宗敎の本源及本質なりとするも、余輩は斷々乎として宗敎は人の理性より發し其の神と等しき性質より發し、決して不理不善の劣等なる情慾より發したる者にあらざるとを主張せんと欲す。道德と云ひ宗敎と云ひ、これ皆齊しく道理に基く恭順と同情に發する義務の感想より起りし者也。此感想は社會の連鎖たる點よりしては、道德及風俗の源、又人類と世界を支配するの能力若しくは神との連鎖たる點より見れば、宗敎と禮拜の基礎たり。宗敎及道德に於ける此感想は齊しく是人類を敎育し、之を拯ひ以て各自の利己心を制せしめんとするの方便にして、未だ之に依て其利己心を增長せしめんとするが如き方便たらざる也。若し此感想にして利己の方便たる者ならんか、亦は決して純然たる原始の狀態にあらず、寧ろ墮落せる宗敎なりといはざるべからず、斯の如きは素撲の信仰にあらずして、虛僞の信仰即ち迷信也。迷信は神の觀念をして其心を淨め、利己を制する者たらしめず、却て之を利用し以て己れ此世を支配せんとする、利己の目的を達せしめん機具と爲す者也。迷信と素撲なる原始の信仰との區別は、恰も幼兒と病身者の如し、彼は幼

稚なるが故に其力に乏しと雖も、正當なる人には相違なし、此は其身躰の正當なる發達を誤りたるが故に、墮落して斯の如くなりし。太古人が自然界の諸現象を以て神と奉信するは、これ其信仰の幼稚なるものなれども也。然れども迷信家が神を以て自己の慾望を達するの機具と爲さんと欲し、之に仕ふることを爲さず、却て之を利用せんとするが如きは、これ決して幼稚なる信仰にはあらで、之をこれ信仰の墮落と云はずして何ぞや。然れども斯の如く墮落したる信仰の前に於て、已に神の觀念及之と實際的關係を有するの道あることと及其關係を實際ならしむる動作及言語ありしことを認めざるべからず。然れども總て是等は信仰上の要素なれば魔術的迷信の以前に、業に已に宗敎心ありしことを假定せざるべからず、蓋し世に病氣あるは、其以前に必ずや健康なる身體ありしことを證明すれば也。あらゆる迷信及魔術の如きは、皆これ太古の淡泊素樸なる幼稚の宗敎心より墮落し來れるや明白也。去れば近世に於て實驗派の學者が劣等なる拜物及拜靈敎の例證を引きて、宗敎と道德は元と全く無關係なりしといふは、これ其の謬見たるを免れず、余輩は却て其反對に出でゝ、此兩者は同一の根本より發し來れる二樣の發現にして、當初間は兩者

相混淆して、其間に區別を劃することを能はざりしと云はん。

余輩が稱して宗教心の本といふ恭順とは、畏敬、尊上、信任及同情等の混和にして、其摸型は家族の間に於ける相互の關係に於て見る所なり。恭順の基礎は自ら抵抗し能はざる洪大なる勢力に接して發ずる所の畏怖心にありとは、余輩が決して否定するにあらず、否、今日に於ては益々此眞理を明にするの必要あるを見る。聖書に神を恐るゝは智恵の始なりとあるは誠也、社會若しくは各個人をして、合理的たらしめんとする教育の始は、凡て天地の洪大なる諸勢力若しくは神は人類の利己を助くる機具にあらず、彼等は人類と獨立して存在し、又其運動は單に人類の爲をのみ計るにあらざれば、之に服從して敢て害を專にせざるを以て、人の本分と爲すべきことを教ゆるにあり。先づ此傲慢なる主我的の情慾を抑制し、茲に始て人の本性を發達せしむることを得、又神を恐るゝと同時に起る感情は、之を信任する事也。天地の諸勢力は啻に洪大なるのみならず、其運動は秩序整然たるものなるにより、之により人類の裨益を蒙ること少々にあらず、故に神を恐るゝ心は、一變して尊敬の精神に到る。また其神は自己の生活の爲に實際的關係を有する所あるを悟り、茲に

始て神人交際の端緒を開き、太古の禮拜なるもの起り、殊に人の生涯中、出產、死去、成期、婚姻、戰爭、播種及收穫の時期に於て、神は人類の苦樂を分つとの信仰を起すに至れり。斯の如き時に於て人類の慣行し來れる儀式は、これ即ち總て社會習慣風俗の源にして即ち道德の根本茲に在りといふを得べし。近頃是等の事情に關する學術進歩したるにより、總て是れ等の慣行は悉く宗教的性質を帶びたるものにして、彼等太古人が自己の生活と神の生活とを連環し、互に相應援せんと欲する即ち古代禮拜式の一部なること愈々明白となれり。加旃凡て政府、市府、國家及び之れを統御する王族の源は、悉く皆宗教にありて政教混淆し、一切の政治は神の保護の下にありしが如し、是等に由て考ふれば道德の始は宗教にありしこと亦疑を容るべからず。

然れども道德の宗教の上に及ぼしたる影響も亦少々ならず神人間の關係と社交上の關係とは、嚮に述べたるが如く同樣の性質を有する恭順に基けば、後世に至り神の觀念稍々變化し地上の國王君主の如く、神は自然界及人類界を支配する獨立の存在者と信ずるに至れり。かく神人同形說起るに及び之に伴ふ一個の結果ある

を見る、一方に於ては神の觀念愈々高尚となり、之れを以て人類の理想及び社會に於ける善良高尚なるものを代表するものとなせども、他方に於ては神の觀念漸次に墮落して軟弱不潔なる人類と同樣の情慾不德義を有するものにして、宛も貪慾なる君主の如きものと同視せられたり。斯の如く單純なる太古人の神の觀念或は下落し或は昇進せしにより、其の禮拜式にも諸種の分子を抱含せしむることゝなれり。元と禮拜は單に神と交り之と運命を共にせんと欲するの精神を顯はすものなりしが、今や一變して供物を爲し、祭典を行ひ、宮殿を築き、祭司の階級を設くるが如き種々なる禮拜の要具を增加することゝはなれり。從來道德と宗敎とは合一にして共行せしものなるに、今や兩者の間に分別を生じ宗敎は獨り自ら社交及道德の上に位するものなりと主張するに至り、道德と宗敎分離したりしより、兩者の間に往々爭鬪を惹起することあり、又宗敎道德孰れか大に墮落したるが如きことあるは蓋し自然の勢なりしならん。夫の蠻人の間に於けるが如く太古の素撲なる狀態を解脫して未だ文明の道に進み得ざりしものゝ間に於ては、宗敎も大に墮落し神の觀念を以て各個人の情慾を制するの代りに、却て之を以て其目的を遂ぐるの

機具となすに至り、高等なる神ハ漸次に背後に退き無數の劣等なる靈は、其位地を奪ひ蠻人は只管之のみを信じて以て自己の情慾を遂ぐるの要具と爲せり。彼等の間に於ける神の觀念は、これ即ち彼等の墮落したる心情を反射したるに過ぎざれば、拜物拜靈若しくは魔術崇拜の如きは太古の社會が壞敗したる結果と知らる。斯の如く壞敗したる宗敎が社會及道德上に其影響を及ぼしたるは、これ亦自然の勢にして、かく社會と宗敎とが二つながら壞敗して、互に相影響したる結果は、蠻人の間に行はるゝ魔術信仰の上に顯はれ、近世の實驗學者をして宗敎と道德とは始より相關係なきもの、否、互に反對の位地に立つものなりとの大早計なる結論を爲さしむるに至りしも、亦必ずしも怪むに足らざる也。

宗敎と道德との腐敗せし過程に就きては、余輩之を歷史に徵して知るを得ずと雖も、其結果たるや亞弗利加の黑奴の如き蠻族間に行るゝ宗敎に於て、明白に之を認るを得、而して之と全く反對なる現象は開化民人の間に行はれたる埃及の宗敎に於て見る所也。埃及人の宗敎は其の神の觀念及死者の靈魂に關する信仰其他拜物的獸類崇拜等に於ては、亞弗利加の蠻族間の宗敎に甚だ類したる所あるを以て、其

宗教上の道德を社交上に及ぼしたる點に於て、彼と異なる所愈々顯著となれり、之に關する二個の點あり第一は埃及の宗教に於ては自然及道義界に於ける神の政治は秩序整然たりとの觀念と、末世に於ける賞罰の觀念也、埃及の語に「マート」(Mat)と稱するは法の意義を有せり、此法たるや人意若しくば神意に發したる命令の如きものにあらず、之を物界より見るも亦道義界より見るも、世界を支配する一定不動なる秩序の意の如し、埃及の宗教に於ては此思想太だ重要の位地を占め、「マート」は竟に神と尊崇せられ、天女、世界の攝政及下界の首頭、嚴密に之を云へば彼の上に「マートの主神なし、然れども總の大なる神と關係を有し、殊に日の神「ラー」(Re)最衡の神及天啓の中保者「トス」(Thoth)と關係を有すること、宛も「ユリニス」(Erinnye)及「ダイケ」(Dike)と「ゼウス」(Zeus)の關係に於けるが如し、埃及の王は天主の「ラー」の子と稱せられ「マート」は其娘也、されば埃及に於ける政治は、齊しく天地を支配する神より出でたること、宛も自然界の理法の如きものと信じたり、社會秩序の保護者として諸の神は人類の賞罰を司る審判者也、「死者の書」と稱する經典に依れば、死者の靈は未來に於て「オシリス」及四十二の審判者の前に引出され、是等の神は各主司する職分ありて律法

の保護者たり、故に死者の行爲を審判するの時に於て其標準を律法に則れり、最も面白きものは「死者の書」に於ける未來審判の光景を寫したる段也、死者の靈は先づ女神「マート」の前に出づ、彼は一の手に笏、他手には人の生涯を表するものを持し、而して心臟即ち其道性を表彰するものを「オシリス」の前に置き、他の一端には「マート」の像を載す、「ホーロス」(Horus)は其量目に眼を注ぎ、齋神「テヒュチー」(Tehuti)は其結果を記す、かく量らるべき罪は、道義及律法上に係はれども、禮拜に關するもあり、其の中の最も大なるものは、神、兩親及官吏に對して不順なる事、及相互に交誼を破る事等也、王、親若しくば其神を瀆し、或は耳を惡に傾けて、眞と正とを聽かず、或は隣人を害ひ、或は心に神を嘲るが如きものは、幸福なる死者の數に入ること能はざるなりと、是に由て之を觀れば、斯の如き死者の審判及「死者の書」に於ける道義法の觀念等は古代埃及人の道德を形造するに於て、甚だ力ありしこと明也、されば太古の宗教の素撲なる觀念は、其發達宜しきを得るの地に於ては、道德上に斯の如き影響を及ぼし得るは、歷史上の事實として見るを得べし、埃及人は世界の眞誠なる秩序の總念を人性視して、女神「マート」と稱せしが、此總念

は獨り埃及人の專有たらず、太古より「インドゼルマン」人種の思想にも亦知られたる處也。「宗教の起原及發育」と稱する書に於て「マクス、ミルレル」は、夫の毗陀の「リタ」(Rista)と云へる詞は、元と天地日月の整然たる運行を意味し、それより一變して禮拜及普通の道義上の行爲に於て、人の蹈むべき正道の意義を含有するに至れりと云へり。「ゼント」に於て之に對するの詞は「アルヤ」(Asha)にして、其意味は世界を支配するの理法、自然界の秩序及人の正道等也。是に就きて「マクス、ミルレル」は左の如き說を爲せり、曰く、是に因て考ふれば世界の秩序を信ずることは、昔時印度及「イーラン」人種が東西に分たれざりし時に、彼等が共有の宗教の一部分たりしならん、故に世界秩序の觀念は、最古の「アウェスター」の「ゲタ」(Gâtha)及毗陀の詩よりも、尙故意に屬せり、此觀念は後世多種の神を信ずるに至り、思辨的思想の結果たらず、否、南方「ユリアジ」人種の太古の宗教の基礎たるにより、彼等の宗教を了知するには、夫の夜明、「アグニ」(Agni)「インツラ」(Indra)及「ルツラ」(Rudra)の話說を知るより尙肝要なりと、かゝれば世界秩序の觀念は印度及「イーラン」人種又は埃及人の間に於ても、最古より傳來し、彼等が其觀念を得たるは、天地の整然たる運行及日月四時の秩序ある循環等を目擊

したるの結果也。されば此觀念は宗教心の最古の要素にして、社會に於ける道德及法律の基礎なるは亦爭ふべからず。又此の觀念は啻に理論の上に止まらず、大に人類の道義心を動かしたるものなるは、夫の毗陀の歌中に於ける懺悔の辭に由るも明白にして、彼等は「ワルナ」に向ひ彼等の過失を恕し、人生の弱點を憐まれんことを請ひたるが如きは其類也。今此素樸なる信仰を以て、複雜なる「バラマ」教の儀式的宗教に比する時は、余輩は近世實驗派の結論に反對し、世界秩序の觀念は是等の儀式的宗教よりも、甚だ往古に屬すると主張せざるを得ず。「バラマ」の律法的宗教に於ける人生の理想は、夫の「マヌ」の律法の中に示されたり、此律法は印度に於ける上級の人の儀式的、律法的及道義的生活の爲に設けられたるものにして、其一生涯を嚴格なる律法の支配の下に置かんとす。此律法の重に主張せし所は、實際的道德にして家族の大切なると、殊に親の義務の大なることを敎えたれども、其弱點とも稱すべき二個の大なる過失あり、其第一は凡て律法的宗教に伴ふ普通の弊害にして、儀式の一方に偏して精神の自由を亡し、各個人及社會全躰に於ける、活潑なる動作を妨害したり。第二の弊は印度人特有のものにして、公敎と秘敎との二種の道德を設け、

前者は一切人の守るべき道、後者は大悟得脫、完全なる救濟に入らんとする少數者の爲に設けられたり、前者は凡て社會に對するの義務を盡すにあり、後者は全く社會より解脫して、俗界の關係を絶ち、獨り隱遁して靜寂なる生涯を送るにあり、斯の如き二重道德は印度人種のみに限らるゝにあらざれども、「バラマ」敎に於ける二重道德の特質とも稱すべきは、其公共道德は智愚賢不肖の差別なく、一切の人の守るべきにして、唯全く工夫修行し盡したるの後、尙進みで其充全に達せんと欲する者のみ、始て秘敎の道に入るを得、前者は一般の民人に於ては生涯嚴守すべき法なれども、それより一層高尙に進まんとする者の爲には、律法的道德の束縛を脫して、內心自由に達するの道をも開けり、これ多く他の宗敎に見ざる所の事情也、然れども此二重道德は、社會進步の爲には甚だ有害なりしことを認めざるべからず、外形の行爲は悉く無益なりと悟るの知識に至りては、獨り小數なる遁世者流の能する所にして、一切の民人は更に之に與かることを能はずと爲さば、這般の知識を得るの要果して那邊に存する耶、また曾に外形の行爲のみならず、道德上の行爲及社交上の義務、妻子に對し家族に對するの擔務も、悉く皆無益障碍の業とし、俗を去り世を遁れて

無爲靜寂なる生涯を送るとせば、社會の爲に果して何の效益する所かある、斯の如く一方に於ては儀式に束縛せられたる、公共的道德行はれ、他方に於ては其束縛は脫したるも、空漠たる抽象的道德にして、社會の爲に稗益する所なき、秘敎的道德行はれたるは、印度人の强固なる精神を剝奪して、其文明の進路を障害したる所以なりき。

佛敎は「バラマ」の秘敎に基きて、救濟の道を離し、之を以て普通民人の共有と爲せり、斯敎の「バラマ」敎に優れる所は、普通民人を愛することと深切、其傳道の精神旺盛にして種族、邦土の境を越え、また「バラマ」敎の如く儀式的及理論に束縛せられず、其說敎は通俗的にして、其禮拜も亦簡略なり、殊に其敎祖の人物高尙にして、後世善を慕ふ者の因て以て理想となすに足るものあるに由る、佛敎は凡て外形的の事物を虛無と認め、單に內心のみに力を用ゐ、人の救濟は其心の潔淨なると、克己、忍辱、柔和、慈悲とにありとするを以て、宗敎をして政治及法律等より分離し、個人的と爲したる第一の宗敎也、斯の如く「バラマ」に比し佛敎は大に進步したる所ありと雖も、これ亦「バラマ」の秘敎に基く所あるにより、其弱點も亦少々ならず、「バラマ」敎に於ては秘敎的

の道德は、已に公敎的道德を修めて、尙完全に進まんとする少數者の爲にのみ設けたるものにして、稍々人生の後年に於て用ゆる所なりしに、佛敎の遁世主義は人生の全般に適用し、之が爲め一種の寺院的生活を創設するに至れり。玆に於て乎、佛敎の道德も亦二重を襲ひ、寺院內外の隔離あるに至る、即ち寺院內の道德は完全にして、寺院外の道德は尙不完全あるを免れず、故に僧侶の生活と俗人の生活は大に其趣を異にし、玆に再び「パラマ」に劣らざる儀式的宗敎を現出するに至り、其道德は寧ろ消極的にして、暴戾なる蠻族をして柔順ならしむるに力なきにあらざるも、國民の氣象を鼓舞して、其發達を奬勵する積極的の力甚だ乏しかりし、これ其宗敎より發し來れる自然の結果と知るべし。

希臘に於ても宗敎と法律及習慣とは、最初間は相混和し來り、互に相應響して發達せしが、終に道德は宗敎より獨立したり、然れ共是れ又以て民人の希望を滿足せしむるの力なかりき。現今の實驗派が主張する如く、道德と宗敎とはもと無關係なりとの說は、古代の希臘の事蹟に依て證明すると能はず。ホーモルの詩及ヘレオアトの作等に依て考ふれば、太古の希臘人の生活は、全く宗敎に依て支配せられたるや

明也、また道德と習慣とは、始より宗敎上の信仰、即ち正義は人の運命を支配し、善惡は必ず道義的世界の秩序に於て其應報を受く、而して此秩序は諸の神、殊に「ゼウス」の支持する所なり。然れども埃及の「マート」に於けるが如く、道も亦人性觀せられ、或時は「リーケー」と稱せられ、或時は「エリニス」と稱せられ、「ゼウス」の機關として其政治を司るものなりき。「マート」及「リケ」は自然界及道義界を支配するものなるが如く、「リーケ」及「エレニス」も亦同樣の性質也。「エレニス」は神罰を執行し、同時に自然界の秩序を保護す、例せば「イリアッド」に於て「エリニス」は「アキレス」の馬をして人語を解するを禁し、若し大陽にして行路を失ふことあれば、再び之を回復せしむるの勢を有す。されば希臘に於ても、印度、イーラン及埃及に於けるが如く、道義界及自然界の秩序は密着なる關係を有し、彼此共に神意に出づるものと爲せしが如き觀あり、ホーモル後に於て神の攝理てふ觀念愈々熾となり、善人は凡て神に愛せらるゝ故に、彼は常に幸福を受く、假令「オヂレヨス」或は「ヘラクレス」の如く、數多の艱苦に遇ふことあるも、是等は竟に善人の爲に益を爲すの方便たるに過ぎず、何となれば「ゼウス」は人類を智惠に進ましめ苦痛も亦其敎の一部たればなりと。之に反して不善者は

必ず早晩神罰を免るべからず、將た善惡の賞罰にして其身の生前に來らざる時は其子孫末代に及ぶ、又彼等が不幸に遭遇するにより、其祖の靈は「ヘーデス」に在て苦痛を受け、後代に至りては末來に於ける直接の賞罰の信仰、漸く一般普通となり、夫の「エルヂ」の祭司の如きは、最も此信仰の道德上に關係ることを主張せり。プラトーも亦此事に關し、說を爲して曰く、人の靈は不滅なるにより、及ぶだけ此世の生活を淸淨にせざるべからざるを敎ゆと。

希臘の「アイドス」といへる詞は、同國人が神政に對するの感想を顯はせり、これ余輩が曩に宗敎と道德との本源なりと主張したる、恭順の意義と同一なり、即ち凡て貴き者に對し恭順、尊敬の感情を表彰す、蓋し畏怖の分子も其中に含有せざるにあらざれとも、「アイドス」の詞は單純なる畏怖に異なる所あり、畏怖よりは却て謙遜、尊敬、正義、見得、愛情等の諸感想と常に相伴へり。そも〳〵「アイドス」の目的なるものは、神、官吏、道義の秩序、義務、兩親、老人及其他救助を要すべき者等也。若者は其單身の時に於ては、己に向ひて「アイドス」の情を懷くべく、將た己が前に「アイドス」の形狀を描出すべし。此最後の二事に於ては「アイドス」は人類の威嚴に對する尊敬の感情、即ち

道性を傷けんとを恐るゝ感情也、又長者に對する尊敬、及法律習慣等に對する尊敬は元と神の聖き支配を恐るゝに基くものなれば、此尊敬は通常人爲の法律に對する感情よりも、一層高等に位す。普通の法律は世界の神聖なる秩序の眞理と善とを完全に表せざるにより、時に此尊敬心は是等に反對することなきにあらず、希臘人の宗敎及道德心は、夫の「アイドス」の總念に依て、其特色を顯はすものなるが、同時に神と交通し神人密着の關係を有せんと欲するの心情も亦含有せざるにあらず、此感想は後に至り神の姿に均しからんことを希望する精神を發揮することゝはなれり。夫のオヂセー中の言に、一切人の神を慕ふと云へることは、希臘人一般の精神を表すとの禮拜も亦虛空なる儀式若しくば報酬を期する利己的の動作のみにはあらず、禮拜は即ち神人交通して最大幸福を得んと欲する精神に出てたり。プラトーが有ゆる詞の中よりて、最も貴く、最も誠なるものは善人が神に供物を爲し、或は祈禱に依て之と交り、其他種々なる方法によりて神に仕ふるは、至貴至善なるものなり、故に幸福なる生活を來すに最も適當なりと云ひしは、實に能く希臘人の精神を表彰したりと謂つべし。彼又惡人は禮拜に依て益を受くることなし、何となれば惡人

の不潔なる心を有す、而して心の汚れたるものより贈物を受るは、敢て善人及神の爲す所にあらず、故に不潔不淨なる者は、神に對して無用の禮拜を爲す者と云ひしは、好し當時一般の感想を表するに足らざるも、有識者の心意を代表して殆ど餘蘊なし、斯の如き思想は獨り哲學者のみに限らず、當時汎く行はれたる祭司の間に於ても亦見る所にして、「エピゾロス」宮殿に彫鏤したる辭に曰く、心の清き者のみ此宮殿の閾を蹈ひを得べし、清淨なる思想を有する者の外他に清き者はあらず、罪を放れたる聖きものにあらざれば、神と交通し能はずとの感想は、宗教が民人の道德上に及ぼしたる影響中の最も大なるもの也、古代に在ては此感想後代に於けるが如く明白ならざりしも、夫の「デルフ*」に於ける「アポロ」の禮拜等に於て、業に已に其勢力ありしを見る、不淨なる者を禮拜に與らしめずとの事情の如きは、即ち其一例として見るべし、かゝる希臘人の宗教上に於ける大變革は、夫の「オリンピヤンド」の始と、波斯戰爭との間に起りしものなりと（シュミッドの言）此間の變革に於て起りし最も著しきものは、必ず其の身を淨めざるべからずとの感想にして此感想は「アポロ」の禮拜及「デルフ*」の神託に依て大に栽培せられしなり、「ピサゴラス」學派

と「アポロ」の禮拜とは密着なる關係を有するものにして、前者の宗教上に關する所說は、後者より出でたるもの甚だ多し、「ピサゴラス」派の元祖の言に曰く、爾等神に從へよ、又曰く、人は神に近く時最も完全なりと、是等の言より見れば神は實に世界秩序の保護者たるのみならず、亦人類の近つきて以て其模範と爲すべきとの感想ありしや明白也、ピンダルは元と「デルフ*」の祭司の仲間に屬し、幼年の比頃には彼等に依て專ら宗教及道德上の教育を受けたるが、其短歌に於て「アポロ」の禮拜につき、彼「アポロ」は其禮拜者の心に平和を與ふるとの言を以てせり、ソクラテスも亦ピサゴラスと此點に就きては其說を同ふし、彼は常に神靈の擁護の下にあるを感じたりき、彼は神の命じたる天職に忠實なるは、寧ろ生命よりも勝れりと思惟せり、プラトーは凡て是等の宗教上の傾向を一括して、人は神の所有なれば、其力の及ぶ限は神に似るべきなりと、

「デルフ*」に於ける聖なる光の神「アポロ」の禮拜よりして起りたる潔齊を慕ふ精神は、希臘民人の上流社會の道德上に莫大なる勢力を及ぼし、固より俗間の宗教に於ても、之が爲に贖罪及潔齊に關する諸の外形的儀式起るに至れり、是等の儀式に關

する規法は、「デルフヰ」の祭司等の定めたる所なれども、公法及習慣によりて終に希臘人一般の遵奉する所となれり。此規法によれば不潔なる者として或は贖を要し若しくば公共の禮拜式より斥けらるゝものは、儀式及道義上の罰にして、固より其間に明瞭なる區別はなかりき。全体より之を云へば「デルフヰ」の禮拜式の傾向は、儀式と道義とを分別して、彼此を獨立せしめんとするにあらず、寧ろ是等を調和並行せしめんとしたるの觀あり。道德上の罰を以て最も不潔と爲せしことは、左の「デルフヰ」の神託に由るも明白也、曰く、若し人戰爭に於て其友を助け、さる時は、たとひ其手は血に塗れざるも不潔也、また其友を助けんと欲し、誤りて之を殺すことあるも更に其人は汚るゝことなしと。潔齊に關する綿密なる儀式は、單に希臘の中世に屬す、即ち「ドリ」人種の移住より波斯戰爭との間に於ける「デルフヰ」神託の全盛の時代なりき。蓋しホーモル及ヘレオッドに於て更に是等の總念の影跡あるを見出さざるは、必ずや祭司の階級起り、禮拜上の儀式愈々複雜を加ふるに及び、儀式的に身を淨むるの觀念從て發生せしもの也。一旦此觀念の發するに當りては、之を用ゐるの方法により、利害の兩端に別る。其利ある點より云へば、道は大に民人の德育上に勢

力を及ぼし、公共の道德を維持するに與りて力あり、希臘人の間に在て不潔と認められたる者は、公衆の禮拜式及祭典の饗宴に列することを能はざれば也、其害ある點より云へば、普通民人は儀式上の罰と道德上の罪との區別を明劃することを能はざるにより、乍ち迷信に陷り祭司に委頼して其罪を贖ひ、其身を淨めんことを勤むるに至る、これ實に祭司等が乘じて以て、其權力を增長せしむる好機會也。一たび此點に達せんか、宛も「パリサイ」人が儀式を斯れ重じて、道義的行爲を輕じたるが如く、專ら外形の方式に拘泥偏依するに至る、斯の如きは希臘に於ても數々見る所にして、プラトーは其の「レポブリック」(共和論)に於て「オルフェオス」の祭司等が術策を用ゐ、一切人の犯せし罪若しくば其先祖の犯罪を贖はんが爲には、高き贖罪の金を出さしめたりとの事を記載したりき。

禮拜的潔齊の觀念一たび迷信的行爲に陷るや、希臘民人中深遠の思想及潔白の感情を有する人輩は、大に之に反對を試るに至れり。其反對するや、曾に儀式上の攻擊に止まらず、斯國傳來の宗教上の神話にも及ぼし、哲學者ゼノファネス及ヘラクリトス等は大に俗間の禮拜及信仰を冷評したりき。ヘラクリトスの如きは潔齊の儀式

は、恰も、泥を以て泥を洗ふが如しとまでに放言し、神は供物を要せず、又其眞形は通俗人の崇拜する肖像の如きものにあらず、またポーモル及ヘルオッドに於けるが如く、人類の醜態を以て神に歸するは、甚しき不敬の至なりと、此最後の批評は、寧ろ酷に過ぎたるものならん、希臘國の神話に於ける神人同形說は、夫の民人の宗敎上及道德上には、左まで大なる影響を及ぼしたるものにあらず、然れども又全く影響せざりしとは斷言すべからず、シニミッドの云へるか如く、希臘人種は想像と宗敎及道德の兩觀念の間を區別して、多少是等を獨立せしむるの力ありき、今より之を見れば、其神話に於ける諸の想像的觀念が、彼等の宗敎及道德上の感想に大影響を及ぼさざりしは、甚だ怪むべきが如しと雖も、此の兩觀念は全く無關係ならざりし蓋し詩歌的の觀念は、人生の全躰に關するものなるにより、希臘の宗敎及道德心も往時神話の想像的記事により、多少の害を象りたることあり、而して人智の進達するに從ひ、始め無害なりし往時の神話も、漸々民人の德義上に影響を及ぼすことゝなれり。昔は神話に於ける諸の記事中にて、道德上より之を見れば、太だ非理なるものありと雖も、尙ほ之を怪しむることなく其の非理の行爲ある神を社會の秩序及

道德を保護する者と崇拜せしが、後代深遠の思想家には、是等の神話中の記事は、宗敎及道德心に有害なりと認められ、全く排除せられたり、然るに一方にハ「ソフ・ストー派の如き學派起り、却て是等の神話を以て自己の不德を隱蔽する口實と爲せしかば、想像的神話の記事は、恐るべき害毒を希臘人の道德に及ぼせり、かくて知識の進渉するに從ひ多の哲學者は、頻に往時の神話を冷罵するに至りしを以て、玆に始て希臘國傳來の宗敎を顚覆するの端緒を開きたり。

去ればペリクレスの世に於ける文華は、啻に神話的及禮拜的の迷信を顚覆したるのみならず、併せて國民の信仰及道德をも覆沒したりき、而して此時に至るまで相連環して離れざりし宗敎と道德との間をも分別するに至れり、然れども通俗の宗敎は往時の神話に基き、彼此相離るべからざる者なるにより、彼を排して此のみを改良せんと欲するが如きは、到底能すべき所にあらず、只改良の道は、人性の自然に基き、道德の基礎を哲理上に則るのみ、これ夫の「ソクラテス」派の實行せし所也。ソクラテス及プラトーの道德は、その深遠なる宗敎心に基くや明なれどもソクラテスの宗敎心は通俗間の宗敎とは頗る緣遠きものにして、プラトーの如きは全く通俗の

の宗教と其關係を絶ち、其道德の理想を思辨的理想界に置きたり。アリストーテルは倫理の基礎を宗教に置かず、單に之を以て人の行爲及ひ思想の樣々なる狀態を分析解說するものとなせり。然るに「ストイク」派起るに及び、再び倫理と哲理とを關係せしめ、竟に道德をして宗教と密着する關係を有するに至らしめたり。彼等は人の理性を以て神の理性より發射し來れるものなれば、之に基く行爲は即ち神命を奉し、神政に從ふものと爲せり。凡そ人は神の智惠に干與する所あるにより、其智惠は即ち一切の人を連環する道義的連鎖也、又人性は齊しく神に似たるにより、民人種族の間に隔離あることなし。かくて「ストイク」哲學は、狹隘なる民人種族の境壁を打碎し、竟に全人類を網羅する神の王國の基を開けり。余輩は獨に「ストイク」派の人類に關する觀念を輕視すべからず、何となれば古代に於て狹隘なる國家的觀念を破り、世界的觀念の基を開き、殊に羅馬人の國家崇拜の弊風を大革したることあるは、著明なる事實なり。然れども此哲學も亦以て社會の革新を全ふすること能はざりき、蓋し哲理的觀念は、宗教的觀念の如く、一般普通の道義的勢力を有すること能はざるの理に由るのみならず、殊に「ストイク」派に在ては、思想を重じて感情を輕

じたるにより、社會的道德の基礎を立つるに至らざりき。「ストイク」派の所說は、理論には適合する所あるも、實際に於て好果を結ぶこと能はず、却て其眞の益は基督教の爲に先驅の勞を取り、又後來大に基督教の敎理を明にする要具たりし所也。

羅馬及彼斯の國家的宗教に就きては、別に綿密なる議論を要せず、此兩國に於ては希臘及印度に於けるが如く、宗教と道德との關係上に著明なる發達あらざりし。羅馬及彼斯に在ては宗教と政治とは、常に密着なる關係を有し、互に相保持し、殊に政治は宗教的觀念の爲に、强硬なる發達を爲せり。國家が其政治的領分を擴張せしは、其崇拜する神の爲にして、その神の王國を世界に擴張せしむるの意に出でたりし、然れども斯の如く政教一致の邦國に在ては、政治上に於て其目的を達するの日に到れば、宗教の勢力は自ら消滅に歸す。國家的宗教は自ら文明を產出するの力なし、唯時に外國の文明を摸倣するの道あるのみ。然れども道も亦充全なる好果を結ぶこと能はず。若し彼斯人希臘を亡せしとせんか、恐らくは古代の文明を見ること能はざりしならん、又羅馬が希臘を亡ぼしたる時は、これ即ち古代文明の腐敗したる始なり、されば國家的宗教は文明全躰に於ては害する所あるも益する所尠し。

「ユダヤ」教も亦國教なりしが、羅馬人の爲にエルサレムの滅亡に至るまで繼續したりき。然れども斯教には、始より世界的宗教に變化すべきの分子を有したり、これイスラエルの豫言者が、其の國民的宗教に注入したる道德の分子なり。彼等はイスラエルの聖者を以て其內外を問はず、一切の人の罪を罰する神にして、諸邦の運命を得て人類德育の方便と爲すものと信じ、古代の「セミチック」人種に於ける、神の至聖てふ觀念は、其人種に於ける高尙なる道德心を涵養するものとなれり。聖き神は聖き民を以て其所有と爲さんと欲す。故に總て其民に於ける宗教及道德上の不義は悉く之を罰し、以て自ら恐るべき神なることを示すものと信ぜり。斯の如く神に對する罰を感することと深く、又之に罰あることを信じたるは、これ「セミチック」人種一般の宗教心の結果也。然れど、もイスラエルの內外を問はず、普通の民人が神に對するの罪と思惟せしものは、多くは皆禮拜の儀式に關せり。然るに豫言者は之に反し神は外形的の儀式を喜ぶものにあらず、唯之に仕ふるの道は、其心を淨むるの一法あるのみと云へり。斯の如く一方に於ては儀式的禮拜を重し、他方に於ては心靈的靈拜を主張したるが、此兩分子は其間互に消長盛衰ありしと雖も、常に希伯來人種

の宗教中に存したり。紀元前第八世紀より基督教の起るまで、希伯來の宗教に關する要點は、實に此二個の分子の爭鬪よてありき。夫の申命記の如きは、此兩分子共に存すと雖も、心靈的の分子常に勝を制したるが如し。神の律法を遵奉するは、唯其罰を恐るゝ爲にあらで、寧ろ心根より彼を愛するが爲也。固より禮拜に關する儀式等も、其中に設けられざるにあらずと雖も、是等は必竟心靈的崇拜の目的を進せん爲なる方便のみ。爾後二百年エッラ及其學派の手に成れる律法の文に至りては、大に前者と異なる所あり、此に於ては外形上の儀式及法律等は、甚だ重要となり、些細なる外形の儀式も、重大なる道德上の事情よりも緊要となれり。祭司の如きも神と民人との間に立つ中保者と變じ、國民的感情愈々旺盛に趣きたり、而して此精神の最も熾にして、儀式を重ずるの最も甚だしかりしは、夫の「パリサイ」の徒なりき。「パリサイ」派の神學は、殆ど律法及ひ外形的儀式にのみ拘泥し、更に心靈上及高尙なる道義上に及ぶことなかりし。神は民人の教育を全ふせん爲に、暫く猶太人種を撰みて、特別に保護し給へるとの謂にあらず、(これ豫言者の說なりき)却て其祖先及律法の爲に神より特別に撰まれて、其恩寵を永遠に繼續するものと信じたりき。彼等は、異邦

人は神前に一の價値なし、神は暫く彼等が世に存在するを許し給へども、彼等の救濟を欲し給はじ、彼等異邦人を地獄の永遠の罰に處せんが爲に撰み給へり、故に猶太人は彼等に對して、一の義務を負ふ所なし、彼等と交るべからず、彼等の文明も知識も採用すべからず、彼等より益を得べからず、又彼等に益を與ふべからず、異邦人と婚姻するは姦淫也、異邦人と商賣するには、唯彼を損ふを以て目的と爲すべしと信じたりき。猶太人の道德の價値は、其心の如何に關するにあらず、天に於ける道德に關する記錄の計算上に由る。凡そ人の行爲は律法を守る事及施行を爲す事の如きは、其人の賓として天に畜積せられ、天の賓は其祖先の功德の遺物によりて補償せらるゝことあり、故に人の天に於て受くる所の報酬は、自己幷自己に關係ある人の功德に由る也。然れども此善行に對し其惡業の記錄をも存せり、故に之に對して必ず罰を受けざるべからず、而して其罪障は自己若しくは彼と關係ある人の難行苦戒により消滅することあり、若し人の死に臨み尙ほ罪の贖全く成就せざるを恐るゝことあらば、其欠を補はんが爲には、善事の爲に自己の資產を遺すに依り之を償ふことを得べし。

基督教は豫言者の精神に基き、「パリサイ」的「ユダヤ」教に反動して起り、而して其の道德の基礎はイスラエルの宗教より得たるものにて、即ち神を世界の支配者及審判者と崇め、全く其聖意に服從すべきの義務あるを信ずる事、舊約聖書は神の天啓にして權威あるものなるを信ずる事、及來世に於ける賞罰を信ずる事等なりき。其の「ユダヤ」教と異なる所は、儀文を捨て、靈に復り、昔の豫言に倣ひ最も直接なる神の默示は、人の心に働く神の聖靈にありとすることなり。耶蘇は始より「パリサイ」人及學者輩が外形を重じ、偏に儀文上に偏したるを攻擊し、皿を洗ひ或は手足を淨めんよりは、寧ろ其の心を潔白にせよ、神と賓に貳仕することを爲さず、全身を擧げて神に從ひ其の聖意を奉ずべし、自ら義なりと誇り、罪あるものを輕視せず、却て彼等をも其の日を善人乃至不善人にも輝す惠ある神の小供又は己の兄弟として愛撫すべしと敎えたり。耶蘇の敎理は通俗的にして、其詞も簡明なりしが、パウロに至り其敎理を神學的及論理的に說明したれば、彼に在ては內部と外部、精神と儀文、幼兒の如き愛と奴隸の律法を見るに至れり。愛は律法の終なりとは、これパウロの敎えし所也、然れども愛は外より命じて行はしむべきものにあらず、唯神の愛に接して

心に始めて發揮するもの也。耶蘇は直接に神の愛に接し、パウロは又間接に基督に顯はれたる神の愛に接し、其心と命とを全く彼に獻ずるの信仰を惹起せり。かくてパウロは道德上の最も大なる動機を基督に依て顯はれたる神の愛に接して、自ら其心に起る所の愛の感情を起したり。

これ實に猶太の律法的宗敎及希臘の聖人等が敎へし道德を、遙に超越したる道德の新なる原理也。その後者と相似たる所は、內心的と自由なり、愛に基くの行爲は、外來の命令的律法の下にあるものにあらず、必ずや其內心より發し、其自己の感情より發するもの也。然れども其感情たるや利己的にあらずして利己を超越したるものなれば、其感情は聖靈の動作に由れりと信ず。神を愛するものは、其心に神の默示を得たりと感じ、又其默示により己が爲すべき事と、爲すべからざる事との區別を立て、又總て宗敎上の口碑及行爲等に關することは、孰れか最大目的に達するに適當なり耶、否耶を知るを得。かくて律法の權威を脫し、之を以て永遠に守るべき神の聖意の發現なりとせず、却て人類敎育の初步の爲に、假に設けたる所の方便なりとす。之と同時に律法の宗敎に於ける國民的制限廢せられ、儀文の律法は單に猶太人種の爲に與へらるれども、靈の福音は猶太人及異邦人の總て信ずる所を救ふ神の力たり。神の子の福音を信ずるにより、一切の人皆神の愛に與かり、其約束と義務、其賜物と役務とを受くる也。かくて此信仰は宗敎及道德上を合同する連鎖となり、一切の人類を合同せしめて、新しき神の民と爲す。使徒パウロの說と「ストイク」學派の說とは、茲に到りて大に相似たる痕あるを見る。然れども「ストイク」學派は專ら理論に偏したるを以て、其實際に世界に有する勢力薄弱なれども、パウロは單に理論に偏することなく、信仰と愛とに基きたるを以て、其結果は能く世界を支配するの實力を有するに至れり。「ストイク」派は其敎說の根據を神と人の同性なる事及神の理法は人類の理性に附與せられたるものなることを基礎として、人は皆神の王國の民なれば同一なる道義の原理に由らざるべからずと主張したれども、其論や空漠として憑る所なきを以て竟に其實成を見ること能はず、殊に「ストイク」派は、パウロと異なることなく、人生の軟弱にして腐敗したることを主張せしにより、其道德の理想に達すること能はざりしや明白也。然るに使徒パウロの說は、斯の如く空漠なるものにあらず、其根據を基督に依て顯はれたる神の天啓に則り、また其天啓は古來イ

ズラエルに顯はれたる諸の天啓の終局なりと信じたるにより、彼の道義上の原理は實際的にして且つ歴史的なりき、これ實に彼の說が大に實際界に勢力を持するに至りし所以也。

基督敎の倫理は十八世紀間の發達によりて、漸く圓滿純粹に其原理を實成するを得たり。該敎の神髓たる四海兄弟主義も、當初の間は其實成せらるゝ所甚だ狹隘にして、僅に信仰を同しくする兄弟の間に行はれたるのみなりし。基督信徒が同信徒中の貧者、病者、無告の人及囚徒等に對して其愛情の顯はれたる厚篤を見て、時の異邦人等は大に之を怪み、見よ、彼等は如何に相愛するものなるやと云へり。然り當時敎傳は公共の樂事とし、或は上下貴賤の差別なく、虛僞と貪慾等を以て充滿したる濁穢の世に於て、斯の如き大なる愛を見るは、實に彼等には未曾有の椿事なりしならん。然れども初代の基督敎徒は、專ら此世を避けて戒行なるの一方に偏し、進みて此世を制服し、之を淨めて神の王國と爲すの精神に乏しかりし也。然れども余輩が玆に忘るべからざる事は、基督信徒が避けんとせし世は、世界全躰の謂にあらず、唯當時の異敎人が支配せし世なりき。斯の如く彼等が世を避けんと欲したる精神の由て

發せし源を尋ぬるに、其大なる者二個あり、一は當時異邦人の風俗大に壞頽したるが爲め、一は當時の基督信徒が世の終局將に近きにありと信じたるが故也。當時の羅馬帝國の風俗は、最も壞頽して惡業醜態到らざる所なかりき。去れば正實に心靈の潔白を希望するの基督信徒が、彼等と共に齒するを愧ぢ、之を避けて孤立せんとするの精神を起せしは、蓋し自然の勢ならん。又當時の羅馬帝國の公共の事業は概ね皆異敎の禮拜と關係する所ありしかば、基督信徒は異敎を以て、悉く惡魔を崇拜するものなりと認めたるにより、之と關係ある羅馬帝國の公共の事業と關係することを能はざりき。故に及ぶ丈け之を避け、其政令に違背せざらんことをのみ汲々たりしが、羅馬政府は尙ほ之をも滿足することを能はず、彼等を以て國家に有害ありと認め大に之に迫害を加ふるに至れり。玆を以て基督信徒ハ、當時政府の爲す所は、これ即ち惡魔の業にして、世の終局既に近つき、基督將に再來して彼等を亡さんとするにより、惡魔ハ大に奮激して最後の災害を基督敎會に蒙らしめんとするものと信じたるは、これ決して怪むべき限にあらず。

基督の再來及神の王國の建設將に近にあり、然れども惡魔の支配は、其時期に至る

も絶ゆることなく、現世界は依然として彼の機内にありとの信仰へ、古代の基督信徒の道義上の思想に、最も強大なる勢力を有したりき。一方より見ればかゝる信仰を有し、常に惡魔の中心に立つとの感想を懷ける者は、常に其身を戒嚴し且つ喜びて此世を捨離す。加旃遠からずして基督の再來により、彼と共に此世に勝ち、彼と共に其榮光に浴するの希望を有するものは、之に依て大に世の惡と戰ふの勇氣を鼓舞するを得たり。然れども他方より之を見れば、基督の再來將に近にありと信したるにより、進みて此世界を改良せんと欲する精神に乏しかりしは、これ蓋し當然の事也。若し此世界は暫時にして直ちに滅亡せられ、之と同時に諸行無常に歸することあらば、何の目的ありてか、浮世の改良を計ることをせん、假令之を計るも寧ろ徒勞に屬すれば、唯兄弟相互に扶翼し、假の世を及ふだけ煩累なくして過すに如かずとの精神を起すに至らん。啻に世界全躰の事情に止まらず、家族の如きも假に設けたるものなれば、必ずしも之を以て永遠の組織なりと爲さず、パウロの如きは家族なるものは、今更に之を捨つるに及ばざれども、若し能ふべくんば今後は家族なくして、一意神に仕へ、基督の再來を待つは、却て便宜なりと云へり。パウロの此教は後世

の基督教に至りて二重道德の根據となり、即ち一般普通の人は家族を有し、最も信仰に富み又神に仕ふるに熱心なる者は、無家族にて世に處するの說起るに至れり。これ即ち羅馬教僧侶間に於ける無妻主義の行はれたる所以なり。獨り此說に反して異說を唱へたる者は、アレキサンデリヤのクレメントなりき。彼は希臘の學、殊に哲學に通じたる所あるを以て、かゝる極端なる無妻主義を排斥していはく、眞誠の基督信徒は無妻と帶妻とに係はらず、能く其信仰を全ふし得べし。婚姻の如きは啻に基督信徒に有害ならざるのみならず、却て無妻の人よりも其德を圓滿養ふの便利を有すと。然れども斯の如き說は、固より當時に於て甚だ少數なりしを以て、一般基督教會に容れられず、隱遁主義は始より基督教會に跋扈せしにより、僅に一二の有識者の意見を以て之を排除することゝ難かりし也。

斯の如き場合に於ては、教會の取るべき道唯だ一あるのみ、即ち二重道德の法を設け、低き道德は一切基督信徒の遵奉すべきもの、高き道德は唯其中にて完全に達せんと欲する者の爲に設く。高き道德を修めんとする者に要するは無妻、自苦、自貧及斷食を嚴重に守るべき事等もあり、斯の如き二重道德の制度は、多少基督教外の原

因より來りしものあり、而して此種の道德を遵奉する「モンタ」の團体は、動もすれば敎會の僧侶の團体と相對立して、恐るべき競爭者となるの傾向あれども、西敎會に於ては巧に之を其の祭司階級の一となして、却て自己の爲に之れを利用したりき。

斯の如く道德を高低に分ち、一は只義務にして、他は功德ある者と爲すの制及基督信徒の完全を以て、外形的行爲と同一にしたるが如きは、これ即ち律法的「ユダヤ」敎の精神を、再び基督敎會内に輸入し來りしものにして、唯其異なる所は「ユダヤ」敎の如く國民的の分子を有せざりしのみ。羅馬とエルサレムとは稍相似たる所あるを以て、斯の如く外形的律法宗敎は、玆に至りて大に發達するを得たり。羅馬敎會に於ける基督敎の道德の見解は、夫の懺悔の法を設けたるを以て、直ちに之を明悟し得べし、彼は早くも嚴酷なる理想的道德の容易に實行し難きを悟り、墮落者の爲に懺悔の法を設け、從來敎會が認めて許すべからざる罪惡としたるも、之を免して再び敎會の交際を許せり。唯要する處のものは、其前に嚴重なる懺悔の法を設け、罪の輕重に從ひて之を消滅するの道を行ふことと也。重罪と輕罪との區別は、若し前者を犯す

者にして、永遠の罰を免ぜられんことを欲せば必ず敎會の設けたる贖罪の法に從ひて、之を消滅せざるべからず、然れども輕罪を犯したるものは、唯祈禱、施行、又は普通の斷食を守ることにより、他に贖罪の法に由らず、其の罪業を消滅するを得べし。かくて贖罪の事は法律的となり、敎會の祭司等が其罪の輕重を定め、之が消滅の事を執行するや、宛も法廷に於ける判官が規定の法律を適用して、罪の輕重を判するが如し。中古の蠻族を馴御し其惡風を矯正する時に於ては、此贖罪法も一の有益なる敎育の方便たりしに相違なしと雖も、之に依て大に福音主義心靈的道德を毀損し、之に代るに「ユダヤ」敎の律法的道德を以てし、唯彼が如く一國民に限らず、之を以て世界を支配せんとするに至りしは、同時に余輩が承認すべき所のもの也。此律法的道德と共に、種々なる弊習中古の敎會に進入し、大に之が腐敗の基を開けり、其主因と稱すべきものは、敎會の贖罪の法なりしや明白也。此法によれば罪の免除を得る道は、必ず敎會の爲に義務を盡すべき事、即ち贖罪金を納めて其罪の免除を得る事也。實に道德上の潔白と誠實とは、此に至りて大に腐敗せりと謂つべし。加ふるに祭司の間に往々敗德者多く、大に敎會の勢力を減殺したり、これ夫の高等なる道德

の制酷だ人情に適合せざる所あるを以て、強ひて無妻主義を守らしめたるが如きは、殊に其道德の腐敗を來せし一因なりと知るべし。

煩瑣學派は此弊習を矯正せんが爲には、何等の運動をも爲さゞりき、これ蓋し彼等の目的とする所は、神學に於ても倫理に於ても、唯從前傳來せし所の敎義を、理論上より解脫し保護するに止るを以てなり。然るにアベラルトの如きは、實に群鷄中の一鶴にして、滔々たる天下外形的道德のみを主とするの時に當り、專ら內心的道德を主張し、益々極端に走り、果は全く空論に陷り、殆ど實際的功用を失ふまでに至れり。然れども彼が當時の贖罪制度につきて嚴評を下したるは、實にプロテスタントの眞意に適し、其功績俄に埋沒すべからず。彼が如き潔白なる道義上の感情を有したる者は、敎會歷史中稀に見る所也。彼云へり、地獄の刑罰を恐れ、また之が爲に贖罪の道を行ふが如きは、必竟道義上の價値なきもの也、眞誠の懺悔は神の罰を恐るゝより發するにあらず、却て神を愛するに基く、愛に依らざれば罪の免除を得ることは難し、蓋し愛は罪の原因たる神を粗忽にするの心を除却すれば也、懺悔は謹遜と道德上の敎育の爲には、甚だ有益なる方法也、然れども之とても金錢の爲に罪の免除を

得るが如き、破廉恥の行爲なき善良なる祭司に向ひ、懺悔を表するの時に於て始めて其功用を全ふするを得べし。鍵の功用は唯監督たるの故を以て授けられたるにあらず、即ち其人の品格に於ては使徒等の如く、且つ其權威を利己的に用ゐず、只管神の義に從ひて用ゐる所の者に授けられたり、祭司等が不法の裁判は無益にして、一切の者悉く皆神の審判に與からざるはなしと。是等の點に於てはアベラルトは、人の良心を祭司等の權威より自由ならしめし運動を爲したるもの、換言せば彼はプロテスタント敎法改革の先驅者たりし也。

アベラルドの正反對に立ちし者をトマス、アクヰナスとす。彼は倫理に於ても中古の「カトリック」敎會の威嚴を代表せり、彼の倫理說は、敎會の超自然主義と、アリストーテル及プラトーの說とを巧に調合して、敎會の主張せし二元主義を維持したり、而してアクヰナスの說には、超自然と自然の二元は相提携して顯はる、最大の善にも二個あり、一は神を知り、且つ之を愛する事より來る無限の福祉、他は人類社會に於ける、正當なる生活より來る有限の幸福也。前者は被造者の力を超越す、故に之を得るの道は唯神の惠に賴るの一あるのみ、德にも亦二樣あり、自然の德は敎育と修行と

によりて得らるゝものにして、即ち人の本性に符合する事也。トマスは之をプラトーに倣ひ、智惠、公義、節度及勇氣の四に分てり、然るに之に加ふるに三個の超自然的の德あり、即ち信、愛、望是れ也。是等は皆神を目的とするものにして、之を得るの道は、唯教會の施す恩惠の一方便に由るの外なし。信は人智の及ばざる所を補ひ、之をして超自然的の眞理を悟らしむ、例せば神の存在を知るは自然の知識なれども、其三位一躰たるの性質を知るは、超自然的の知識也。かくて信は總て基督信徒の道德の根據となりたれども、單に之のみに委頼して道德を形造することを能はず、故に之に加へて愛の力を假らざるべからず、人の意志に正當なる動機を與へて、其働を全ふせしめ得るものは、即ち愛と望也。基督信徒の愛は、第一神に對する愛、第二神の爲に被造者を愛する愛、殊に其人の隣人及自己に對するの愛なり、神の愛に對するの罪は、隣人の愛に對するの罪よりも重し。

世界の主たる神の理法にも、亦二樣の性質あり、一は自然の理法或は人性に賦與せられたる通有原理の知識にして總ての國法は之より發す。他は神の罰及教會に依て示されたる超自然的の理法にして、人類を延て現在及永遠の命に至らしむる者也

此超自然の理法にも亦二個の區別あり、一は基督信徒一切の守るべき德義、他は完全なる福音的の勸告にして、或る少數者に限りて實行し得べきもの也。トマスは其教說の基礎を沈思的生活は實際的生活に勝るとのアリストーテルの格言に則り、左の如く立論せり、人若し最高なる神の沈思的愛に達せんと欲せば、曾に直接に之に反對するもの、即ち罪を避くべきのみならず、假令直接には神に反對せざるも、其愛を完全圓滿に成就するの道に於て障碍たるものは、悉く排除せざるべからず。富貴の如き肉慾の如き及自由の意志より發する傲慢の如きは此類也。故に完全なる「クリスチャン」の生活を送らんと欲せば、須く先づ此三者を捨離せざるべからず、而して自ら甘じて貧困、無妻、柔順、換言せば寺院的生活を送らざるべからず。トマス謂へらく、獨り寺院的生活を送るもの、始て其全身及其一切の者を神に捧げたるなり、未だ俗界に生活するものは、其幾分を神に捧げ、其幾分を己に殘せり、人は此世の實と靈の實との間に生する者なれば、是に近づくものは彼に遠り、彼に近つくものは此に遠るは、これ蓋し自然の理也。去れば「クリスチャン」の德義も二個の生活の理想に別れ、其間內心の結合を許さゞるにより、教會に於て二個の階級を設くるの必要

となれり、心靈的階級は沈思的神の愛若しくは恭順を代表する者となり、而して此德は世界に於て活潑なる道德とは相容れざるもの也、俗界的階級は世界に於ける活潑なる道德を代表す、而して道も亦全く價値なきにあらざるも、神の完全なる愛と對峙の位地に立ち、常に之に達する障碍たるを免れず、是等は「カトリック」教會の倫理の特質たる恭順と道德との二個の區別を明表す、而して其起原を尋るに、初代に於ける遁世主義の基督教が、一變して世界を現在に支配せんとする大望を懷くところの羅馬カトリック教に遷らんとするに當り、遁世主義と制世主義とを調和せんが爲に形造したる者也。

トマス、アクヰナスの倫理の中には、大なる價値を有する分子なきにあらず、一たび之を夫の超自然主義より脫離せしむる時は、合理的倫理の種子となるに足るべきものあるは、歷史家の決して輕視すべきものにあらず、即ち彼が主張せし自然の理法は、合理的實在者に於ける固有のものにして、世界を整理する神の理性の發現の形狀なれば、其本質に於ては神の意志と同一にして、有らゆる律法の基礎なりとの思想也、アクヰナスは恐く此觀念を羅馬の法律學により「ストイク」派の哲學より得たるしならん、而して後世に於ける獨立なる合理的の理法及倫理哲學の基となれり、是等はヒュゴー、グローシュスの自然の理法に起り、カント及ヘーゲルの實用的哲學に於て成就せり、トマスの倫理中に於ける此合理的分子に正反對なるものは名目派の「ポジチビズム」也、スコートス及オッカムのウヰリヤムは、道義法は專恣的神意の限定に基くものとなり、而して其意志は神の理性に依て限定せらるゝものにあらざれば、吾人は之を吾人が理性の力に由て知ること能はず、唯教會の傳說により其權威に委頼して之を知り得る也、かくて倫理も亦教說の如く單純なる權威に服する外形的信仰となれり、是等は則ち中古の末期に於ける懷疑說の氣焰を大に助けたり、夫の「ゼジュイティズム」の起原はトマスにあらずして、寧ろ該派の說に起因す、「ゼジュイティズム」は教會の惠恣的決議を以て、世界の道義的秩序に交代せしめたる、「ポジチビズム」を正當に適用したるに過ぎざる也、世に眞善なるものなし、又無得絕對的に衆人の服從すべき永遠の理法あることなし、唯教會の權威に依りて善なりと主張する者のみ、即ち善たる也、然りと雖も總じて權威を以て定むる所のことは、必ずしも必然的にあらずして、多くは概然的也、故に人の義務と稱すべきもの、客觀

的必然の勢力を有するにあらず、寧ろ主觀的概然たるにより、時に應じて自由に其意義を定むるが如き弊害を生したりき、斯の如く一方に於て永遠の理法より離れたる結果は、他方に於ては全く教會の命令に服從して顧みざるの傾となれり、總て俗人たる者は其意見を自由ならしむることを能はず、必ず僧侶の指揮を待たざるを得ず、僧侶の判決する處は、彼に於ては良心の聲、神の告示たり、されば彼の爲す所は つきて、責任を負ふ所の者は其祭司にして、教會は前代未曾有の權力を以て、人の思想意志、動作を支配するに至れり、又「ゼシュイット」派を利用して諸國の王及人民を使用し、彼等をして教會の目的を達するの要具たらしむるを得たり、又教會の權力を擴張し、異端者を亡し資產を得るの道に於ては、如何なる事をも厭ふ所なきに至れり、彼等「ゼシュイット」の如きは、其奸策を逞ふし或は家族の至聖を冒し、或は國民と政府との間を離間し、或時は專制政府に加擔し、或時は革命黨に結托するが如き、變轉極りなきの手段を以て、一意教會の權力を擴張せんことを是れ力めたり、「ゼシュイット」の如きは、實にこれ羅馬「カトリック」教の腐敗を表彰するに適當なるものとなれり。

基督教は豫言者の道義的宗教に基き猶太の律法的宗教に反動して崛起したるが今や「カトリック」の律法的宗教に反動して、福音の道義的宗教に復歸せんとするの傾向は「プロテスタント」の宗教改革によりて顯はれたり、然れども此兩者共に單に古に復したりといふのみならず、亦大なる進歩をも爲したり、福音に顯はれたる神の愛を信ずるの信仰は、これ即ち道德の大本なりとは、教法改革者の齊しく主導せし所也、斯くて一方には全く祭司の權威及人爲の口碑の束縛を脫し、他方に於ては神に對し人に對するの愛を以て、其身を支配するの主義を唱導したりき、ルーテル曰く、基督信徒は信仰に於ては、自ら好みて一切の者及一切の人の僕たり、信仰に依れば彼は神によりて自己の上に出で、愛に依れば彼再び自己の下に行くものなれども、彼は常に神と其愛の中に宿るものなりと、中古に於ける神の愛と實際的道德との間に生したる不調和は、茲に至りて全く平治するを得たり、神の愛は人をして啻に沈思に導くのみならず、大に彼を勵まして神の榮の爲に又は人の爲に働かしむる動機也、此働は單純に利己心に基くにあらず、或は報酬を望み若しくは功德を積む等の精神に發したるにあらず、唯一切の事に神の恩を感し、之を親愛するの情溢

れて自ら茲に至る。去れば道德上の動作は、夫のアクヴィナスの云へるが如く、神の愛の妨害たるべきものにあらず、却て其愛を顯はし、また其愛あるを證するものとなる也。而して此愛より發するものにあらざれば、世に善と稱すべきものなきにより、世に義務以上の功績なし、却て如何に力を盡して神に仕へ、其命を奉せんとするも、我等の心は唯其不充分なるを感するのみ、更に我等が義務以上に逸出して、更に我爲よ餘功を積むが如きことあらず。茲に至りて「カトリック」敎會の主張する二重道德、即ち一は神の命令を奉し、他は所謂福音的勸告に止るとの事情の基礎全く破壞したり。されば「プロテスタント」の說により、夫の寺院的道德「カトリック」敎會が、普通の道德に優りたると稱したる處のものは、其效力を奪はるゝに至れり、否、若し之を人の爲に計る愛の定規を以てせば、斯の如き寺院的道德は徒に時間と精神とを勞したる無用の業にして、奚ぞ神の心を喜ばしむるに足らんや。若し神の心に適ふ眞誠の德義を守らんと欲せば、須く其各自の義務を全ふし、之に依りて世間普通の公益を計るべし、故に家を治め及社會に對するの義務を全するは、これ即ち神の意に適する役務ならん。かくて敎會の爲に蔑視せられたる社會の道義的秩序は、再び元の

權威に復するを得、婚禮の如き政權の如きは皆神の定めたる所にして、其貴重なることと敢て敎會に劣る所なしといふに至れり、而して道德も再び敎會の羈絆を脫して自由を得、其自在の發達を全ふするの機會を得たり。

「プロテスタント」の神學も、初代基督敎の神學と等しく、永く純潔なる道義的宗敎の高位に止ること能はず、竟に敎義上の爭隙を生じ、之が爲に道德は却て其有後に退き唯宗敎の一部分として論定せらるゝに至れり。固より其原因は「カトリック」敎と同じからざるも、其結果に於ては彼此稍相似たる所あり、人の信仰を束縛するに敎會の權威を以てするが如く、或は良心を鈍からしめ、善惡を感識するの力を減少せしめたるが如きは即ち此類也。「カトリック」敎會に於けるが如く、敎會の定めたる敎義を遵奉するは、宗敎上の義務となりて其德義上の行爲の上に置かるゝ所となり、之を維持するは政府の義務なりとまでに主張するに至れり。かくて夫の野蠻的迫害は、再び「プロテスタント」の間に害毒を及ぼすに至り、「カルヴィン」派の敎會に於ては非三位一躰論者及「アナ、バプテスト」の如きは死刑に處せられたり。又嚴重なる安息日の法律を犯すものは頗る嚴酷なる處刑を受けたり。「ルーテル」派の敎會に於ても

其附屬する國主の意に從ひ、或時は「ルーテル」派の人敎會を追はれ、或時は「メフンツ」派の人敎會を追はれたるが如き事ありて、諸派の軋轢間斷なかりき。斯の如く信仰の異同により國法を以て之を處理するが如きは、これ實に羅馬「カトリック」の遺物にして、「プロテスタント」の歷史に於ける一大汚點なるが、當時最も其害毒の甚しかりしは、夫の魔術者と稱せらるゝ者を、殘酷に處刑する事也、玆に至りて彼等は基督敎以前の異敎の轍に陷れり。

此時に當り社會進歩上に大なる補益たりしものは、夫の古代文學の復興及博物學の進歩等にして、其結果たるや、自由なる哲理的研究の精神を惹起し、實際に於ては判斷力を分明にし、且つ感情を潔白ならしむるに至れり。然れども是等の運動は、敎會内の運動とは直接の關係を有せざりし。碩儒スピノザ、ロック、レヤフーベレー等の如きは、公然宗敎上信仰の自由を主張し、威力を以て各人の信仰及其思想の上に加ふるの甚だ不可なるを論じたり。ベツケル、トマルツス、スペー（スペーはセシユイット派の人なり）然れども其說大に同派の趣味に異なる所あるにより、世人彼を稱して白き烏と呼ぶ）等は學理上より正確なる論法を以て、當時魔術に關する處置の酷だ

不法狂暴なるを攻擊したり。吾人は彼等が人類の爲め、眞誠なる基督敎道德の爲に其功績甚だ鮮少にあらざるを記憶すべし。第十七世紀及第十八世紀の正理論は、動もすれば世の批難を受くれども、若し其實際上の結果を以て、之を量る時は、却て遥に第十九世紀の獨斷的「ポジチビズム」に優勝なる處あるを認めざるべからず。

道德をして自個獨立の基礎に立たしめんとするの傾向は、カントの正理論に至りて其極點に達したり、蓋し彼は道德を以て外形的若しくは偶然的より獨立せしめ、夫の獨斷的口碑、及實驗的實理等より分離せしめ、以て人生固有なる理性の命令に歸せしめたり、而して其命令は一切の者が絕對的に遵奉すべき所にして、實にこれカントの道義學に於ける大なる功績なりき。然れども彼の說の弱點は、其道德の基礎と認めたる理性を以て、空虛なる抽象的となし、之を吾人が情性と相容れざるが如きものと思惟したるにあり。之により彼の實用理性は實に其動力を失ひたるのみならず、また道德の歸着すべき原理をも得ること能はざりき。蓋し斯の如き原理は單純なる想念のみに存するにあらず、必ず人性の全躰に存するものなればなり。故に彼の道德と宗敎との關係は、單純なる外形的に至れり。彼の說に依れば、道德上

の義務はこれ即ち神なる律法者の命令也、又曰く、同時に人類を支配し、且つ之を審判するもの也、是れ即ち道德と宗教との關係ある處なりと、然れども此關係たるや餘りに偶然的にして、道德の原理に基くと云はんより、寧ろ後來に於て附着せしめたるといふの勝れるに如かず、彼又曰く、道德の法は假令神の定むる處なるも、之に依て更に其權威を增すことなし、蓋し道德の權威は獨り其自己の原理に基くものなれば也、又吾人が義務を盡すに當り、更に賞罰の觀念によりて、之を左右せらるゝが如きことあるべからず、然らずんば、これ即ち主樂主義に陷るの患ありと、かく道德と宗教との關係は、全く外形的となり、前者は後者の補助を待たずして獨立するの力あれば、余輩殆ど後者の必要あるを見ざるに至る、固より此はカントの眞意にあらず、彼は從來の教說に適合せしめんが爲に、殊更にかゝる言を爲したるにあらず、彼に於ては道德と宗教の別つべからざるは、殆ど必然の理なるが如き處あれども、彼は兩者の間に深奧なる內心的の關係あるを發見し能はざりしにより、其關係は單に外部の一方に求めたりき、彼が其深遠なる關係を見出すこと能はざりし所以のものは、彼が主張せし理性の總念は、寧ろ抽象的に過ぎたるを以て左の緊要なる二

個の箇條を忘却したれば也、即ち人の理性は元と世界を支配する神の理性より發したる事及人の理性は其情性と密着なる關係ありて、互に相連結して顯はれたる事を忘れたり、道德と宗教との心理的關係は、後者に基き其の哲理的關係は、前者に基く、若しカントにして理性も亦人の心に宿り其想念の理法として顯はるゝ未前に、業に已に感情として顯はるゝことあるを悟らば、彼の道德論上一層重饒に一層眞實なりしなちん、且つ宗教及道義的感情の間に於て、有益なる交叉の運動あるを發見したるならん、且つ吾人の道義性は始より完備して吾人に賦與せられたるものにあらず、漸々發達して覺に其十全を致すものなることを發見したりしならん、然らば宗教の如きは人類の德育に於て、歷史的階段を爲したるものなるを悟り、茲に始て天哲の總念に於ける永古不朽の眞理あるを發見するに至らん。

カントの道義說の欠點は、彼が道德を以て宗教より分離せしめんと爲せし傾向にあり、而して此欠點は夫の感情的及直覺的傾向の矯正する所となれり、蓋し斯の如き傾向は、夫の正理的傾向の日耳曼の思想界に顯はれし當初より伴隨したるものにして、其起原は、パイチズムにあり、此パイチズムなるものは、夫の凝冷したるプロ

テスタント」の「オルソドクス」に反對して起りたる福音主義の活潑なる反動にてありき、「パイチズム」も後に至り、頗る狹隘なる獨斷的怯懦なる遁世主義の襲ふ所となり、「プロテスタント」の高尚なる道德の地位よりして、中古の「トマス、エ、ケンピス」流の「ミスチシズム」に陷れり、然れども其始「パイチズム」が福音的基督敎を回復したるの功勞は、亦俄に沒却すべからざる所也、夫のスペーネル、フランケー、ゴットフリード、アルノルド、テルステケン、ベングル、ヂンゼンドルフ等は、敎會歷史に於ける其名最も芳しかりし輩也、當時の通弊たる儀文崇拜及冷淡なる正理論を矯正し、敬虔なる感情を保持し、基督敎は書にあらず、敎義にあらず、寧ろ聖き愛を以て、己の心を神に捧げ、又其の愛を實際に働かしむるにありて、苟も基督敎の敎義を正當に了解せんと欲するものは、此愛の力により其心の內部を新にせざるべからず、蓋し感情と意志とは、宗敎に於て之を知識より分別すること能はざればなりと主張せり、彼等は敎義的知識は、必ず道義的感情の爲に其地步を讓らざるべからずと主張し、以て諸種の信仰告白の爭を調和すべきを示せり、夫のヘルムホット兄弟の同盟の如きは、即ち此調和の結果也、最後に於て彼等の中に於て常に養成せられたる宗敎上內心的の經驗又は內心の經驗に深く注意するの慣習及各個人の道德を涵養して、其完全に達せしむるの働は、當時の流行たる美術的崇拜及科學に於ける各個人の獨立なる思想研究及確信と太だ相接近するに至れり、

斯の如く宗敎的個人主義と、俗界的個人主義との混淆は、近世に於ける人世の理想を形造するに、最も大切なる要素となれり、(ハーマン、ラファテル、クラッデオス、クロプストック、ヘルデル、フィヒテ、シュライエルマヘル等によりて代表せらるゝところなり)斯の如き理想の特質は、正理論の明快なる思想及自由と宗敎上の深遠なる思想及美術的感情とが、最も親密に混和して互に助援するの點にあり、かゝる情緖の間に於ては、正理的道義は感情的となり、無上大法は美麗なる靈の高等なる道德となれり、夫のシルレル、ヤコビ及フヰヒテーの如きは、即ち之が代表者也、若し善德にして單に其嗜好に逆ひ、義務を尊敬する事のみならず、寧ろ義務に向ひて發するの嗜好なりとせば、若し意志と善行とは、二ながら理性と心情との和一より發するものとせば、若し冷淡なる義務は、神より降りし總の誠なるもの、善なる者を愛するの熱心に變ずることあらば、業に己に道德と宗敎とを隔離したるの境壁撤去せ

られたるや明白也、感情的道義論の主張する所に依れば、愈々之を深白に了解するに從ひ、愈々自然の不潔なる感情より脱し、而して愈々宗教的となる也、果して然らば道德と宗教とは、同じ神性ある能力の發揮したるものにして、一は社會の表面に顯はれて活潑なる運動を爲し、他は絶對なる生活の基趾及目的の深遠に達するの運動也。

右の教説には眞理もあり又有益なる事柄もあれども、又多少欠點なき能はず、而して其欠點なるや頗る重大にして、這般の道德は容易に社會の歴史的生活に適應せざることゝ恰もカントの道德に於けるが如し、而して彼に於けるが如き義務を感する熱心も大に缺乏したる所あり、故に此獨個的道德は際限なき主觀的に陷り、以て自己を總ての社會の秩序及習慣の上に置かんとするの恐あり、然るに此極弊を矯正する、の道は、左の二個の點より來れり、一は今世紀の始に於て國民(獨乙)の被りたる大なる危殆也、二はカント派の哲學者が彼の批評學に客觀的の轉化を與へたること也、若し理性にして單純なる主觀的形式的の思想にあらずして、人類間に於ける神の靈、其靈の本質は世界の歴史の進行に於て愈々深白に、愈々完全に發達し、曾に落を

懐念し、又之を理法として指示するのみならず、實物として形造し、法律、習慣、宗教、國家、教會及學術等に於て活潑なる歴史的勢力の形式を附與するものとせば、各個人の道德も自己一身の圓滿美善なる生活を專一にするにあらず、寧ろ歴史的社會の客觀的目的及其道義的制度殊に家族及國家の制度に忠實無私に服從するにあり」

ヘーゲルはヘルデルの轍に倣ひ、近世の思想界に於て歴史的生活に向ふ感情を惹起せり、斯の如き道義思想に於ける歴史的及社交的の轉向は、大に近世の思想界をして、歴史的宗教に向はしめたると明白也、ヘーゲルが宗教と教會とを尊重し、彼等に對しては保守の位地を維持したることは、世人の熟知する所也、然れども彼は宗教と道德との關係を明瞭に追索することゝ能はざりき、而して其理由二個あり、即ち彼は宗教を以て恰も神學と同一視し、專ら知識の一方より觀察し、又國家を以て往古の精神に則り、一切の道德を網羅するもの、如く思惟したりき、是等の誤謬の結果は、ヘーゲル派左黨の非宗教的傾向に於て顯はる、然のみならず夫のローテーの如きは、宗教の本躰ハ單に道德の一あるのみ、而して教會と禮拜とは終に消滅し、剩す所は國家と文明あるのみとまでに主張するに至れり、然るにクラゼー及シュ

フィエルマヘルの徒は、宗教と道德を以て、互に相應響するの關係を有せしめ、假令各獨立し又多少異なる所ありと雖も、是れ齊しく同一の基礎より發し、又互に相助援すべきものなりと主張せり。

道德は吾人が合理的被造者として、社會に於ける運命を實成せしめ、宗教は亦神に關係して吾人の運命を實成せしむ。總て社交的關係は他の世界秩序と共に神に基するものなれば、道德上の義務の究極の基礎は、宗教的憑依の感情にあり、而してこれ又信任の感情及神と交り、之と等しからんことを欲するの希望によりて助援せらるゝもの也。是等は實に人の道德心を鼓舞奬激するの動機也。是等宗教的動機の道德上の價値は、神に關する意識の性質如何により、其意識は道德の理想如何にも由るものなれば、宗教及道德上の意識は、互に相應響し以て始て其歷史的發達を全ふす。基督教に於ける神の愛と隣人の愛とは、共に相合して道德上の動機となるにより、其結果は清淨自由及活動ある道德となれり。殊に教義及教會の制限により て防遏せられざるに於ては、其結果愈々大なり。然れども道德の正當なる發達の爲には、世の文華及道義哲學上の教義等は、又欲ぐべからざる助援なれば、宗教の動機

に基し、其歷史的發達に於て、人性の事情及必要等を正當に了解するに依て指導せらるゝに於ては、道德は竟に神の王國即ち善の外他に一物なき通有なる人類の社會に於て自ら實成するに至らん。

第十一章　宗教と理學

萬國民の間に於ける理學の始は、大率皆彼等の宗教思想に發したるが如し、人類は其世界を理會せんと欲する情望を、先づ宗教上の神話及昔譚に依て滿足せしめたり。神及天地開闢に關する昔譚は、深思家をして一層深く是等の事情を研究せしむる奬勵物となりしが、尙ほ其結果は詩歌的の分子多く、未だ充分なる理學の思想に達すること能はざりき。世運の進歩に從ひ是等の神話及天地開闢談も漸々學理の方向に其歩を進め、爰に始めて物理及其他の理學の端緒を開くに至れり。埃及、印度及希臘に於ける哲學の起原は、其國の鬼神論に在り、而して埃及及カルデヤの祭司等は、往古より禮拜上の必要により天文學を研究するに至れり。然れども彼等祭司の知識は猶宗教上の口碑と密着し、其形狀に於ても其容量に於ても、全く鬼神論と分離すること能はざりしが、惟り希臘の哲學者に於ては、當初より理學と鬼神論との間に判然たる區別を生じたれば、理學は獨立して組織的研究の道に進むを得、而して普通の口碑的宗教に對しては、或は其反對の位地に立ち、又は之を度外視して、不問に置きたるが如き狀ありき。ヘラクリトス及ゼノファネス以降、希臘に於ける

宗教と理學との關係は、唯消極的にして或時は正反對の位地に立ち、或時は全く無頓着なりしが如し、獨り「ストイク」派及後世の「キヲ、プラトニ」派に至り、彼等の凡神的觀念を利用して、俗間の多神說を支持せんと試みたりき。然れども彼等の籌劃も徒に畫餅に屬し、兩者の調和甚だ困難なるを證明するに至れり、蓋し鬼神的自然宗教の中には眞誠なる觀念元資甚だ乏しく、また活潑なる發育を爲すの力少きにより、理學の感化力を以て到底之を變饒又は改新ならしむること能はざりき。哲學者中に於て最も敬虔者と稱せられたるソクラテスの如きも、終に毒殺の難を免れず、其主張せし唯心哲學も希臘人の宗教上に一の好果をも與ふること能はざりき。獨り基督教に至り希臘哲學は、大に其發達の麹酵となれり、蓋し基督教の如きは希臘の哲學思想に對しては頗る強大なる和合の傾向を有すればなり。

基督教國に於ても、理學は宗教より發し來れり、即ち神學の產む所也。然れども茲に於ても娘は竟に母より放れ去りて獨立するに至れり、然れども其關係は希臘に於ける宗教と理學との關係とは全く別種にして、宗教と理學とは假令屢々反對し、屢々爭鬪を起すことありしも、未だ曾て全く分離したることなし、彼等は互に應響し、

感化し、助援することを得たり、而してかゝる特別なる關係は、必竟基督敎には往時より敎義若しくは「ドグマ」なるものありて、其中哲學と密着なる關係ある分子と、又之と大に異なる分子との二者を含有するに由るならん。此兩側はドグマの起原と密着なる關係を有せり。夫の「ドグマ」は哲學の感化を被りたる神學的思辨より發したりとは、普通の見解なるが、これ固より理なきにあらず、煩瑣學派の形狀を裝ふたる「ドグマ」の如きは、即ち此類也。然れども吾人の忘るべからざるものは、抑々神學上の思辨は其材料を既に當時の社會に存する宗敎上の觀念に則らざるを得ざりし事也、而して是等の觀念は、必ずしも宗敎的思辨より發したるにあらず、余輩が曩に述べたる豫言的直覺より來れり、此豫言的直覺は意識の一種の形狀にして、之に依り永遠の價値ある高等なる眞理は人の心意に表顯せり、即ち神の言辭が人形を裝ひ、自然の制限の中に顯はる、故に其本躰と形式、其本質と現象とは、全く相合して其間に區別あるを見ること能はざるものあり。

基督敎の「ドグマ」の基礎たる宗敎的觀念中には舊約の豫言者より遺傳したるものあり、又使徒及傳道者が深く基督の生活と其死とを思念するにより、自然と其心に

發生したるもの也。豫言者の道義的唯一神論、即ち世界は一の大なる道義的支配の下に存する事、人類は神の姿に死し神と交通すべきの運命ある事、人の靈魂は無限の價値ある事、善人の心には神の靈の在す事、信仰と愛の力により世界の惡と罪とを亡し得る事、神の王國は必ず此世に來り又は天に於て成就する事等總て是等パイブル」の緊要なる彼等豫言者の敎理は、最も重大にして且つ永久確實なる眞理なれば、其中には世界に關する理學的觀得の爲に豊なる種子を含畜せり。故に使徒が總て智惠と知識の寶は、基督(基督敎の信仰)の中に隱れありと云ひしは、敢て不當の言にあらず、(コロサイ書第二章第三節)是等の眞理は當初幼兒若しくは詩歌的の形狀を以て顯はれたるものにして、吾人の眼には其死滅すべき外殼と貴重の種核とを區別すること難からずと雖も、其始め是等の眞理を世に輸入したるもの及び彼等に依て之を受けたる當時の敎會は、未だ此兩者の間を區別すること能はざりき。夫の豫言者の如きも、高尚なる神の道義的性質を知得しつゝも、尙ほ神に附するに人の形と人の情とを以てせり、又彼等豫言者は神の顯現を其心意中にありし內心的の出來事として實驗したるも、昔譚は之を可見的及可聞的の出來事と云ひ做し、玆に於て

種々なる奇跡談起り、殆ど現今に於て道義的宗教の經驗とは全く比較し能はざるところのものを現出するに至れり。信仰の眼は歴史の中に於て、常に神の支配の痕、神の智惠の道、神の聖き愛の命を見ると雖も、球言者の希望は、尙ほ將來に向て馳せ神の王國を奇跡的に天より下り、人の子は天の雲に乘りて降るものとして待てり、使徒は罪と義とを以て、我等の中に宿れる肉と靈との二個の反對の勢力なるを知れり、然れども彼又罪はアダムより遺傳し來り、義は基督の贖罪の死によりて得たる恩惠の賜物、救濟の結果なりと云へり。斯の如く已に遙に自然的見神論を超越したる道義的宗教に於ても、尙ほ心靈的種核と觸感的形狀と相混淆し、吾人は容易に其間を區別し、後者の如きは單に理想に被らしめたる想像的表號たるを悟り得れども、當初に在りては、これ決して單純なる表號、單純なる詩歌的の外衣にして、心靈的の思想に被らしめたるものとは信ぜざりき。斯の如く精神と形狀との間を往來して更に一定不動なる事能はざるは、これ宗教的觀念の特色なり、然り、宗教的觀念は人の理性より發し來るものなれども、其第一の必要は人の感情の爲にして、智性の爲にあらざれば、其形狀も亦當初は自由なる詩歌的の形狀たりし也。理論上より

斷する時は、斯の如きは實に宗教的觀念の欠點にして、其價値を毀損するが如しと雖も、宗教上の實際より考ふる時は、寧ろ之を以て甚だ便益なりと思惟せざるを得ず、肉と靈との間に彷徨する宗教的觀念は、人をして肉より靈に進ましむる爲に甚だ便益なりと謂つべし、また其特性は必要に從ひ、一個人若しくば宗教社會の生活の度に從ひ、容易に之に應ずるの餘地を有せしむ。宗教心の發達するに從ひ、漸々深遠なる意義を傳來の宗教的觀念に輸入するに至る、而して最初は唯形體上の事として理會せられたるものも、今や漸々心靈的の意義を有するに至れり而して當初の間は心靈的意義と形體上の意義と相並行したるものも、漸を追て前者は後者を壓倒し、終に後者をして單に前者の表號たるに過ぎざるものと理會せしむるに至れり、是れ吾人が常に宗教の歴史に於て見る處なり。夫の神人同形說若しくば神人同情說の如きは、宗教心の進歩と共に、次第に其の本來の形體上の意義を失ひ、單に形容的に過ぎざるものと理會せらるゝに至る。「バイブル」に於ける神の嗣、神の子、神の王國等の總念が、時勢に從ひて大に其意義を變更したるも同じき理也。去れば苟も歴史的宗教を解せんと欲するものは、須く宗教的觀念は、時勢に從ひ容易に其意

義を變更し得るものたるを理會せざるべからず。

一たび宗教社會に於て信仰箇條を一定し、之を永久に確實なる文辭形式に顯はすの必要起るに當り、從來容易に流動變易したりし觀念も茲に至りて煩瑣學的の固躰を得るに至れり。斯の如く宗教的觀念を固躰の「ドグマ」に作形するの働は、已に原造的想像の區域を離れて反察的理論に屬す、而して其假定する所は、普通一般の宗教的眞理なれども一層之を精密に解釋し、敷衍し、詳明せんと欲す、其觀念中に於て相矛盾するが如きものゝ間に區畫を設け、其關係を說明し、而して互に相和同する所あるをも示すなり。宗教的意識の假定に論理上の基礎を設け、其前提より論理的結論を引き、また當時の習慣(其起原は往々「ドグマ」と全く無緣なるもの尠からず)及世界に關する當時の見解との關係をも示し斯くて宗教心の容量を可なりに擴張せしめ、一種の組織躰となしたれば、從來孤立したるの時に於ては、專恣なる假定と見做され、爲に疑難を免れざりし諸分子も、相支持し相助援して、茲に始めて世界全体に關する見解を造出し、世人の信用を博するに至れり。定義一たび明白となり其論理的結果も明かなるに至り、始の單純なる詩歌的の觀念中に潛伏したりし樣々の難

問、知識上の蹉跌石は、今や其本性を顯はし宗教的「ドグマ」を以て其僅正確なる眞理を表彰したるものとは、到底智性の甘受し能はざる所となれり、何となれば、斯の如きはこれ即ち智性の理法に反對するものを受納せしめんと欲するものなれば也、而のみならず宗教的觀念を組織躰なる「ドグマ」に編成するに當り、是等の觀念と全く其起原を異にする所の當時の文明に屬する普通の觀念とを密着せしめんと欲するにより、勢ひ是等の外裝の爲に宗教的觀念は、其原意を隱蔽せられ、容易に之を了知すること能はざるに至らしむ、夫の新約書の神學と第五世紀の神學との間に、大差あることは、世人の咸な熟知する處なり。然れども當時の親父等の事業を以て、唯彼等の專恣なる思辨の所爲なりと看做し、敢て其中に進化の理法存し、之によりて右の結果を生したる事あるを認定せざらんとするは、これ亦誤謬たるを免れず、例せば當時に流行したる哲學上の總念——言辭は煩鎖學的に作形したる信仰を顯はすに、最も好適なる方便たりしが如し、吾人は基督教の思想は、始より「プラトー」及「ストイク」哲學に甚だ近似したる所あるを以て、大に之に牽引せられ、其結果竟に基督教の「ドグマ」を編成するに至れり。夫の親父等が新約書中に含有する思想を一層

敢術して、終に彼の如き組織躰の「ドグマ」を編成したるは、決して彼等の過誤なりと斷すべからず、また新約書中に是等の意義の含有せらるゝことを否定し、以て教會の「ドグマ」を編成したるの責任を、擧て悉く親父等に歸せしめんとするは、これ決して歷史的正當なる判斷を下したるものと云ふべからず。

斯の如く一たび哲學の助援により宗教的觀念を知識上より解釋する「ドグマ」の起るに當り、其解釋せられたる觀念の眞理は、既に鞏固確實なるものと假定せらるゝに至れり、これ夫の煩瑣學的「ドグマ」編成の時代即ち信仰の細條目に至るまで「ドグマ」の組織体に編成したるの時代に屬するものにして、其特色は單に信仰上已に確定したる所の事柄に論理的形式を附するに限るにありき。然れども斯の如き形式的思想が稍々堅固なるに從ひ、また「ドグマ」とは全く獨立したる哲學思想と愈々密着なるに及び、思想は竟に自己獨立の權利を以て「ドグマ」の容量にまで反對するの勢を生じたり。かゝる變遷は宗教社會に在りて、漸次に擴張し、冥々の裡に大なる進歩を爲せり、當初の間反察的理性が教義上の權威の束縛を離れて獨立自在の運動を試みしは、「ドグマ」以外に中立する所謂此の世の學術研窮にありき、是れ蓋

し其學術は如何に自由に研窮するも、信仰上無害なりと認められたればなり。然れども一たび知識の樹の實を食ひ自由の研究を味ふに於ては、最早單純なる信仰の樂園即ち信仰上に於ける無爲無心の幼兒時代を失し、其眼は開けて普通學術研究の結果と、信仰上の口碑的觀念との間には殆ど渡るべからざる潭淵あるを發見す、然れども信仰にして尙ほ感情の上に、思想の習慣の上に、輿論の上に、或は當時の社會の組織の上に其勢力を把持し敢て其權威を失する事なかりし間は、二重眞理の說世に行はれ、一は哲理上の眞理(世俗の眞理)他は神學上の眞理(天啓の眞理)にして、假令互に撞着し互に矛盾する事あるも、彼此共に眞誠なるを失はず、何となれば彼等は全く無關係なるものなれば、亦互に相凌犯するとなしと、然れども斯の如きは最も淡泊素樸なる避難の道なりと云はざるべからず、余輩は古今の學者間にかゝる淡泊なる議論の行はれたるを見、殆ど彼等は眞摯に然か思ひしや否やを疑ふ程なり、誰かウルリヤム、オーカム或はペートル、ベーレー等の書を見て其議論果して眞摯なる心より發せしや否やを疑はざるものあらん哉、かゝる異常なる教義の歷史的起原を知るに當り、吾人は愈々其疑を深からしむるものあり、譬へば中古の末に於

ける「アフェロイスト」派が、そのアリストーテルの哲學より得たる異端說を隱蔽せん爲に此說を利用したるが如き、又フレデリッキ第二世の代に於て各宗各派の有識者の間に交通甚だ盛なりし結果として、總ての宗敎に對し殆ど無頓着なる有樣は大に此が培養に便なりしが如き是れなり。余輩は歷史に徵し是等の敎義は必竟懷疑說の凶兆なるを知る、然れども之れ決して維持し得べき位地にあらず、唯變遷時代の徵候として顯はれたるに過ぎず、世界に關する舊說已に崩壞し去らんとし尙ほ多少の抵抗力を有し、新說まさに來らんとするも未だ明白鞏固の點を欠ぎ、其舊說との關係を明了ならしむる能はざる時に於て常に見る所の徵候たるに過ぎず、今少しく宗敎心の發達に就て考ふれば曩に述べたる二重眞理の說は、「ドグマ」の眞理と理性の權利との二者を維持せんと欲する學說に依て繼續せられ、また之れと密着の關係を有す、其說にいはく「ドグマ」は理性に反對するものにあらず、寧ろ其上に位するものなりと、これ即ち超自然論也。超然論は兩者の間を精細に區分し、其衝突を避けんが爲に、兩者各其區界を守り敢て相犯すこと無からしめんとす、夫のフィプニッ及ウルフ等の學說は即ち此種類にして、理性と「ドグマ」の間に精細なる畛界を劃し、以て敎會の信仰と平和を保つを期したりき。斯の如く兩者の和親を企てんと欲する精神は太だ嘉みすべきも、唯之にのみ委して其平和を保たんと欲するが如きは、到底及ふべき處にあらず、ウルフ自身の如きも、常に其胸中に於ける爭鬪を制すること能はざりき、然かのみならず、斯の如く兩者の間に精細なる畛界を設け、以て其衝突を避けんとするが如きは、唯これ妄想にして到底維持し得べき學說たること能はず、試に思へ理性は宇宙及其中に於ける地球の位置、地球の上に於ける生物の發育、人類の性質と其古代の歷史等に就き、自由の研究を放擲し得る耶、余輩の考ふる處に依れば、是等の問題は理性が其研究の正當なる領分として要求する所なれども、既に是等の問題に於て、理性は敎會の口碑の區域に進入しあるにあらず耶、且つ聖書の歷史及「ドグマ」の編成に關する神學上の爭論の歷史、又敎會歷史及普通歷史の如きは、皆是れ理性の自由なる研究の領內に屬するにあらず耶、是等の歷史的研究は聖書の超自然的權威の「ドグマ」及古代に於ける敎會の會議に依て定めたる諸の「ドグマ」の爲には頗る危險なるものなるが、吾人は其研究の結果中如何なる點に境界を設けて彼此の間を分別し得る耶、一たび理性をして是等の歷史的研究

により「バイブル」の編纂及諸の不可思議なる「ドグマ」の起原等を了知するに至らしめば、彼れ豈に一歩を進め從來神の默示によりて授けられたれば、固より理性の上に位すと信せられたる諸の宗教上の眞理をも、併せて之を其の自由なる研究の法庭に召喚せずして止まんや。余輩は已に實際に於て理性が斯の如き動作を爲したる事を獨乙正理論の元祖たるセムレル以後「プロテスタント」の神學の歴史に徴して明知するを得、また理性の本質に徴して考ふるも其然るべきを信ず、何となれば吾人の理性が一たび自己の權利を確認し、其中に存する論理の規法は即ちこれ唯一なる知識の原則なるを悟り、而して彼又諸の客觀的眞理を知り、其論理的理法に從ひ、現世界の中に理性の存するあるを發見するは、これ其の權内にして、また其義務たるを悟るに於ては、彼はその内外の實驗に於て得る所の總ての者に應用し、更に其動作に制限を設き、其區域に境界を劃するが如き事を爲さゞるべし。少くとも畫線を引き是れより先きには合理的思想を適用すべからずと云ふに於ては、若し明白なる理を示すにあらずんば、彼れ豈に之を甘受する事あらん耶。夫の超自然論も右の事實を認定し、合理的理論により吾人の理性を超越する天啓の可能たり必要たり又現に存在することを證せんと試みたるにあらず耶、而して斯の如きは實に甚しき自家撞着の論なるを知らざるか如し、何となれば理性は何を以て隱蔽、暗黑、蔽昧、しかも自身に顯はれざる所のものを以て、天啓の眞理と認むるを得ん、これ豈に吾人に命して判斷力を下さしめ、而して同時に其判斷力を奪はんとするものに非らずして何ぞや。若し理性にして天啓の事實を證するの力ありとせば(斯の如き力の理性に存することは超自然論も、其反對論の爲に必らず承認すべきもの)其理性は併せて天啓をも了知し得るの力ありとは、これ其必然的結果なり、故に余輩は將に云はんとす、世には總て吾人の知識の達し得ざる超合理的眞理なるものあることなしと、茲に至りて超自然論は竟に自滅せりと謂つべし。

正理論は超自然論よりして左の如く結論せり曰く、凡そ理性の上に位すと稱せらるゝものは、これ即ち理性に矛盾する者なりと、而して悉く超自然論を排斥し、吾人の理性に屬する判斷及知識の特權を信仰の領分全躰に及ぼしたり。大凡絶對的に了解し難きものも、唯權威に委して之を眞理なりと信ずべしとの要求は、悉く不正不當の要求なりとして之を排斥したり。斯の如きは單に吾人の意をして宗教に於ても正當の

動作をなさしめ、宗教を以て自己以外に置かず、却て自己の領内に加へ其内部をも了知せんと欲するの要求たるに過ぎざれば甚だ至當の事なりと信ず、かくて正理論は此見解に基き總て口碑的信仰に嚴密なる批評を加へ、以て其中に含有する宗教上の意義を一層深遂に攻究する知識の爲に道を開きし者なり、これ實に正理論の宗教學に於る功績にして何人と雖も之を拒否することは能はざるべし、然れども正理論の要は此點に止り、消極的に知識上より口碑的信仰に向ひ嚴密なる批評を加ふるのみにして、積極的に其中に含有する宗教上の眞理を看破することを勗めざりき、之に由て考ふれば正理論の假定も、また超自然論の假定と等しく其誤謬たるを免れざるなり、此兩者は共に宗教と、之を形式的に顯はしたる「ドグマ」とを混同し、表號と本躰との區別を劃することを能はざりき、此誤れる前提より彼等各正反對の結論を得たり、而して其結論たるや正否錯綜各宗教の半側面を過重し、以て其全面を正當に悟得することを能はざりき、超自然論の得たる眞理は、信仰に於て實驗する吾人の中に神と連環せる生活あるの事實也、また其誤謬は宗教的實驗の眞理と之を表彰する理論的形式とを混合し、此形式を以て直ちに客觀的眞理と看做し活ける實際的宗

教の實驗を以て知識の目的なりとするにあり、而して是等は知識の目的たる事能はざるの理あるを知らざるなり、又正理論の誤謬は「ドグマ」の中に隱匿したる深遂にして、活ける宗教上の眞理の種核あるを忘れたるにあり、正理論は透明にして知識的なれども感情的及直覺的生活の暗奥、又心情と想像の理性の宗教上に於ける特種の働を了知することを能はず、また正理論は專ら主觀的にして諸種の思想を了解するの力乏しく、且つ人類の能力には歷史的發達あり、各個の意識は當時普通全般の意識に憑依する所あるを悟得せざるなり、超自然論は宗教の貴重なる種核を保存せんが爲に、却て其の死滅すべき外形に重きを置き、爲に宗教其自身をして形式的若しくば機械的に陷らしむ、正理論は不滿足なる器物を破毀し、爲に却て宗教の貴重なる容量を失ひ、或は道義的宗教を以て之に易へんと欲す、而して宗教心は之によりて更に滿足することを能はず、又數々非宗教的主樂主義若しくは自然論に陷ることあり、宗教上に於ける正理論の功は積極的なるもの甚だ鮮少なれども、消極的に「ドグマ」を評し、之が爲に正當の思想を費したる點に於ては、其の功亦少々ならざる也、煩瑣學は「ドグマ」其自身を以て純正無謬の眞理なりと信じて疑はざりし

が一たび正理論起るに及び、思想全く一變して、已に「ドグマ」の中には一個の眞理だも含有することなしと認るに至れり。

斯の如く信仰の形式將に破船せんとする時に當り、「ミスチシズム」は之が救助船となりて、信仰と其の讓與しがたき權利とを濟ひ、破壞的批評の暴風を凌ぎ、漸く安全の埠頭に導き來れり。「ミスチシズム」の主眼とする處は、神と己と一躰なることを直接に感識するにあり、これ即ち宗教の根本的感情にして、宗教的生活の中心を得たりと云はざるべからず。然れども「ミスチシズム」をして宗教界に於ける一種獨特の傾向たらしむるものは、蓋し「ミスチック」派の人は諸の外形的補助に依らず、直接に神と交り神の中に生活して滿足せんと欲するにあり。斯の如く神に酩酊するに於ては、自己と世界とは全く忘却せられ、自ら己に至高完全なる眞理を得たりと信ず。然れども此眞理たるや、單純不明なる一種の感情の形式の中にあれば、頗る茫漠として到底明了なる知識と爲すに足らず、故に「ミスチック」の意識と、發達したる宗教的知識との關係は、宛も蕾の花と滿開の花との關係の如し、而して此特質の中に「ミスチシズム」の强點及弱點とを併有す。

「ミスチシズム」の强點は、第一其感情の温かなると又其感情を專ら內心的生活に集るにあり、次きに其の懷く所の貴重なる宗教的感情を、大膽、原造、深遠なる想像力によりて描出し、以て思辨的思想の爲に漠然と其方向を示すにあり、最後に於て總て客觀的宗教の鐵鎖束縛より脫し、自由に神と交り神の中に生活するにあり。普通の宗教家は總て經典、教義、昔譚及習慣等を以て、宗教上必須の具なりと信し、否、是等を以て宗教其自身の如く思惟すれども、眞誠の「ミスチック」に至りては、更に重きを是等に置かず、宛も朝暾の前に、群星の光芒消滅するが如く、內心に於ける神の發現の前には、あらゆる宗教上の外式は消滅するもの也。「ミスチック」の爲す所は、正理派の自由思想家の如く、是等の形式を直接に攻擊するにあらず、若し之を攻擊せんと欲せば多少之に思想を費さゞるべからず、然れども彼れ之を爲さず、故に是等の形式には贊同も反對も表せず、全く無頓着なり。「ミスチック」派の人が總て外形的方式を超越し、是等の幫助により、心靈上一の利益をも受くることなし、況んや普通信者の信する如く、是等の形式に束縛せらるゝものにあらずとて、專ら其內心の宗教的生活にのみ注心し、敢て一切の方式及歷史的口碑に無頓着なるは、其結果總て是等のものを排

斥して顧みざる、夫の正理論の直接なる攻擊的批評と更に撰む所なし。唯其異なる所は「ミスチック」の批評は、其宗教的生活の圓滿にして强堅なるより發出すれども、正理論の批評は、其宗教的生活の空虛なると、其單純なる智性の無能力なるにあり、と れ常に夫の僧侶輩が、正理論派の自由思想家よりも、寧ろ「ミスチック」派の異端を恐るゝ所以なり。前者の攻擊は現在の宗教の爲に左まで恐るゝに足らず、何となれば空虛なる消極的の批評は、假令一時は其猖獗を逞するも、一たび心情の要求勃起するの時に於ては、忽ち其勢力を失ふ、然れども「ミスチック」の批評は宛も堅き地を耕き返す鋤の如し、其爲す所新且つ永久なる生活の貴き種子を受けしむべき準備を爲すにあれば也。夫のカユジェタン(Cajetan)が大に恐怖したるは、自由思想家若しくば俗界の人の冷笑にはあらで、寧ろ獨乙の「モンク」の深き眼より「ミスチシズム」の熱光及思辨的思想の電光が、將に來らんとする暴風雨の前驅として世界に閃き渡りたる事なりき。中古の「ミスチシズム」が煩理學派の滅亡を來すの準備となり、且つルーテルにより直接に宗教改革を惹起するの力ありしは、世人の熟知する處なり。後世の「ストイク」及「プラトー」派の「ミスチシズム」及エピクテトス、マルコス、オリヽオス、プロークロス及プロチノス等の、「ミスチシズム」に於て、吾人は舊故の神及宮殿の滅亡新にして且つ深遠なる宗教の勝利を成就したる最も大切なる動力たりしを認め得べし。印度に於ても亦然り、「ミスチシズム」は「バラモ」教の儀式及階級等に反對し、而して佛陀の宗教改革の爲に其準備を爲せり。波斯に於ける「スヒ＊ズム」の「ミスチシズム」は、大に「イズラム」の凝結せる口碑的律法的宗教に反對したりき。「ミスチシズム」は總て宗教の外形的方式に對し、無頓着なると共に宗教上に於ける混容の傾向を有す。かゝる傾向は正理論派の所論にも、多少存せざるにあらざれども、彼は宗教其自身に對し、全く無頓着なるに發し、此は最も宗教の貴重なる種核を重ずるにより、其外形若しくば特質等に無頓着なるよゝ發せり。

かゝる無頓着はこれ亦「ミスチシズム」の根本的欠點の由て起る所以なり、即ち「ミスチシズム」は其宗教上の力自由及眞理を明白なる意識の目的となし、之に思想上の堅固なる基礎を與へて、其價値を高からしむることを勗めざる也。「ミスチック」は其宗教的生活の眞實なる唯一を失はざらんが爲に、寧ろ不明瞭なる感情的生活を主とし、之を以て思想及反察に易へざらんとを勗む、蓋し思想及反察は、唯だ物の明白なら

んことを主とするにより、其唯一なる生活を分析し去らんとすればなり、故に「ミスチシズム」は宗教發達に於ける麹酵の如しと雖も、其宗教上の知識を增進するに於ては一歩を正理論に輸す、蓋し後者は其宗教的容量に於ては貧乏なるも、其理論は稍々明瞭なるものなれば也。ビーデルマン(Biedermann)いはく「ミスチシズム」は科學の問題を正統に理會す、何となれば彼其宗教的生活の直接なる事實を表彰せんと欲むればなり然れども「ミスチシズム」其自身を以て科學の原理と爲すは、これ即ち科學を否定するものと云はざるべからず、蓋し科學の要は智性の働により、生活を正當に了解せんと欲するあればなりと。此知識上の欠點は大に「ミスチシズム」をして雜琿混雜せしめたりき、彼が宗教の形式及口碑に對し、原理上より主張したる自由は、其知識上の孱弱により、之を具体的に主導するを忘れたり。內心に於てかくも自由なる「ミスチック」をして、再び口碑の軛を負ふに至らしめたるは、專ら感情の一方に偏したるを以て、普通宗教上の權威に、公然抵抗するを嫌忌するの情のみより發したるにあらず、彼等が貴重なる感情を世に顯はすに當り、之を包圍する形式の必用を實際に感したるが爲なり、而して彼等の目的を達するに最も便利なる形式は、教

會の普通の信仰なり。彼其の感情に基ける宗教的生活は、不明了にして形式を有せざるにより、自然に教會の「ドグマ」を以て其理論上の支持者となし、之に依て漠然たる感想を表彰せんと試みたりき。然れども彼れ其感情の豊なる容量を顯はすに當り、是等の形式の不適當にして且つ不充分なることは、自ら之を蔽ふこと能はざれば、再び「ドグマ」を嫌忌するの情を起したるも、竟に其羈絆を脫すること能はざりき。今其著明なる一例を擧ぐれば奇才ハーマン(Hamann)の如き是れなり、彼は一方に於ては時の教會を盲信するにも係らず、又他方に於ては傲然自己の默示に訴へ、敢て兩者の和中を計らざりき、夫の「ローマンチスト」の如き皆此類なりき。然れども斯の如く教會の權威を盲信し、其「ドグマ」に隷從するは、これ其の知識上の孱弱により、「ミスチシズム」に附隨する二個の危險中の唯一個のみ。「ミスチシズム」は自由を固執しつゝ、尙ほ眞率なる思想に乏しき所あるにより、往々妄想狂熱の深谷に墜落するの患あり、超絕的感情の熱に襲はれ、而かも眞率なる思想に依て制御せられざる妄想は宗教上の口碑、哲學及萬有學等の碎片を以て、自己の嗜好に從ひ縱に世界の繪畫を描出し、深邃なる思辨の分子と、幼稚なる鬼神論の粗なる概念等とを混同して、一種奇

態の現象を形造するに至れり。古代の「ノスチク」、近世の接神學派の如きは即ち此類なり。唯其價値の異なる所は、合理的分子と感觸的形狀との權衡如何にあり、感觸的分子多きに過ぐる時は、「ミスチシズム」に於ける理論上の混雜に加へて、實際上の混雜をも惹起することあり、而して其の世界に關する感觸的妄想的見解は、まゝ放肆なる感觸的生活の基となり、是等の墮落と腐敗の感情と妄想とに偏倚する「ミスチシズム」を去る事遠からざる例證は、夫の「ノスチク」以來東西の歷史に甚だ尠からざるを見る。

「ミスチシズム」の如く主觀的感情と、客觀的口碑とを混和せんと欲すれば、上述の如き混雜を來し且つ其中に誠なる原理の存することあるを見ざれば、余輩は正理及超自然の兩論を調和するの道を一層高等の點に求めざるべからず。「ミスチシズム」は余輩をして此調和の途に就かしめたるも、未だ以て其目的を達するを得ざらし む若し右二個の異論を實際に調和せんと欲せば、須く先づ吾人の知識中の主觀及客觀兩分子の關係の原理に基き、大躰上より其研究を始めざるべからず、何となれば神學界に於ける正理論と超自然論との相違は、これ唯一般の知識論に於ける二

個の異說、唯心論と實驗學との相違の特種なる形狀たるに過ぎず、前者に依れば總て吾人の觀念は吾人の心意より發す、即ちライプニッの敎えしが如し、後者に依れば總て吾人の觀念は外界の實驗即ち覺性の働により得るものなりと、これロックの敎にし所なり。此兩傾向は竟に一方に於てはウルフの獨斷說となり、他方に於てはヒュムの懷疑說となり、二ながら乾燥空虛にして維持しがたき謬說と成果てたり、されば此兩說を超越して一層高等の點に進むの必要を生じたり、カントの哲學は即ち此點に達したるものなり、彼れ其知力の批評に於て實驗學と正理論との相違を調和せんが爲に左の事實を示せり、即ち總て吾人の觀念は吾人の心意及吾人の實驗に依て得たる後者は內外覺性の働により吾人に與ふるに心意の容量を以てす、前者は吾人の心意に固有なる形狀即ち空間時間若しくば思想の形狀等を以てす、而して是等の形狀は總て主觀的の性質を帶ぶるによりカントは左の二個の結論を爲せり。(第一)是等の形狀は其基礎我にあり、總て實驗の以前にあり且つ先天的なれば彼等は通有の確實と必然とを有す(第二)然れども彼等の起原は單に主觀的なるを以て獨り我等の主觀的觀念に應用すべしと雖も、我等の意識以外に存する物其自身

に應用すること能はず、故に是等は以て我知識の目的と爲すこと能はざる也、去れば カントの說に依れば心意は我等の實驗の世界に於ける唯一の立法者なり、然れども其立法權の及ぶ所は唯其實驗の世界に限らざるを得ずと。

これ實に思想界に於ける一大變動なり、一方より見れば、人の心意を甚しく偏重したるが如く、又他方より見れば、甚しく之を偏輕したるが如し、茲に於て乎二個の誤謬此源より流出せり。フヰヒテー論すらく、若し吾人の心意にして吾人が觀念の世界に於ける唯一の立法者たらんか、心意は即ち觀念の世界に於ける唯一の創造者なり、而して吾人意識の世界の外、他に眞實なる世界あるを見ざれば、世界は即ち吾人の「エーゴー」の意識の結果と云はざるべからずと。此極端なる主觀的唯心論は忽ちセルリング及ヘーゲルの手により大に矯正する所となり、彼等は世界の基址なるものは、吾人の思想にあらず、寧ろ絕對の思想なりと云へり。然れども これ尙ほ思想と實體とを同一視するものなり、世界は即ち絕對觀念の發現に外ならず、故に世界の知識は、また純正思想の先天法によりて得らるべしといふに至れり、茲に至りて抽象的唯心論再び顯はれ、カントが之を以て實驗學と調和せしめんと欲したるの功は竟に水泡に屬し、實驗學の反動を惹起するに至れり。カントに返れと近世の呼聲は、即ちカントの思想中にて實驗的及懷疑的の側面、彼が知識を以て現象の世界に限りたる事を回復せんとの意也、而して物其自身は暫く疑問の間に置き、或は之に充すに實理の公準を以てせんとす、これ即ち當世紀の初期に於て神學者間に流行したる懷疑的超自然論の復活なりといふを得べし。然れども斯の如き懷疑的實驗論は、これカントを越えてロック及ヒュームに返りたるもの、其のカントの哲學の眞誠なる傾向と符合せざるや、夫の思辨的唯心論に異なるなし、否、一層之より甚しきものあり。

右の誤謬を避けんが爲め、吾人は先づカントの議論に於ける誤謬の存する所を明知せざるべからず、カントの誤謬は其批評學の根本的傾向、即ち吾人の知識に主觀と客觀の分子あるを區別したるに存せず、却て彼の批評學に於ける永久の大眞理は茲に存す、即ち凡て吾人の觀念は吾人の意識の働の結果なり、故に其の意識の特狀に依て制限せらるゝところあり、去れば吾人の觀念は物其自身にあらず、また純然、直接に彼等に照應すべきものにもあらず、即ち吾人の意識中に存するもの

は、直ちに客觀的の眞理にして、通有に確實なりとなすべからず、否、却て總て意識の現象は、これ唯記號のみ、思想は之に依て物其自身を推知するの外なし。然り而してカントの議論に關する疑點も亦此に存す、吾人の觀得及思想の形狀は、其基礎吾人自身にあれば、單に主觀的に確實なりとするにより、カントは意識の容量よりして物其自身に論決するの可能を斷ちたるが如し。斯くして彼が主觀と客觀との間に於る區別は、此兩者を離隔し、客觀の性質、否、其存在までも甚だ疑はしきものと爲すに至れり。主觀は將に客觀を退けんと欲して、未だ實行し能はざるものゝ如し、故にカントの哲學は、其基礎の確實を欠き、或時は客觀の實なるを說くが如く、又或時は其然らざるを論するが如し。然れどもカントは吾人の知識の形狀は、唯意識の現象中にありて確實なるを說論するにも係はらず、曾て自ら此を證明したる事なし、また之に關する自己の說を確守する如くにも見へざる也、却て彼は原由の公準により現象の基趾に存する物其自身に論結し、之に附するに本躰夥多及永久の諸公準を以てしたるが如し。彼は吾人の心意を以て自然の唯一なる支配者なりと斷定せしに係はらず、自然は神に依て排列せられ、其目的は至高の善を成就するにありと云へり。彼は吾人の觀念の連環せる秩序は、必竟是等觀念の齊しく「エーゴー」に歸着するに由るといひ或は全く吾人の思想と獨立せるものに歸着するに由ると云へり、而して彼は斯の如き獨立者の存在を假定するのみならず、亦吾人の思想と觀念とは之に歸着するの可能たるをも假定するものゝ如し。

これ甚だ必要なる事なり若し觀念を形造する「エーゴー」の統一なくば、諸の觀念を知識に組成すること能はざるが如く、諸の觀念の歸着すべき客觀的獨立の外物即ち是等觀念の原因たるものなくんば、亦以て觀念を知識に組成すること能はざるべし。若し我等の觀念をして斯の如き外物に環連せしむること無くんば、吾人が心意の內部は渾沌として不規則なる諸觀念の輻湊する所にして其去來常なく何人も孰方より來り亦孰方に行くべきかを知らず、相互の間に內心の關係なく唯觀念繪畫の其中に躍るあるのみ。其の接續して現に來る有樣のみを以ては吾人直ちに其原由の關係を見出す事能はず、又自己中に於て之に適應する所の原因を發見すること能はざる也。此眞理は何人にても若し自己の心意中に起る所の事柄を少しく注意し來れば必ず了解するならん。然り而して其渾沌たる觀念をして之に合理

的の秩序を附し得るは、獨り吾人の觀念を以て或る實在者を指示する所の記號なりとするにあらざれば能はざるなり、換言せば結果よりして原因に推論し、意識の現象には必ずこれに應する所の者なかるべからず、而して其者たるや獨立自存し吾人を離れ吾人の外に於て現存し、また吾人の心意の働に關係せずして互に相連關し、其の基礎も亦彼等自身にありとせざるべからざるや、一たびこのことを爲せば吾人の意識中に存する諸の觀念は、其の吾人が假定したるところの外物の關係によりて自ら吾人の思想の爲に整列するものなり、彼等は即ち其の關係の片々たる現象を示すものにて必ずこれに憑依するところなかるべからず、這時の意識の觀念と夢中の觀念との差は、前者に在りては其觀念の脊後に存する實際の連環と關係するところありと雖とも後者に在りては更に斯の如きの關係なし、吾人の觀念は或る眞實に存在する所のものゝ發現にして、空虛なる外見のみにあらず、彼等は即ち實物の記號にして單に我想像の繪畫にあらざる事は左の事實に依て徵し得べし、吾人は我思想の中に我意識の現象の線條を設く、而して其線條たるや互に相遮斷し、此處彼處に於て外部に逸出し吾人の知覺以外に存するもの、即ち物其自

身の存在中に於て相互の關係點を求む、かゝれば吾人の合理的知識は徹頭徹尾左の事實に基かざるを得ず、いはく、吾人は我意識の現象的世界に止ること能はず、必ずこれを越え思想に於て物其自身の客觀的存在に達せざるを得ず、素より其の存在は外に顯はれたるものにあらざるも、吾人はこれを假定す然れども若し思想にして主觀的世界より客觀的世界に移るを得ば、何の理由ありてか吾人は主客の間に境界を設け、我知識は之より前に進む事能はずと爲すを得ん哉、若し吾人が內外の實驗に依て得たる所の觀念繪畫の中に於て或る存在者の記號を得たりとせば、吾人が思想は猶ほ進みて彼等を比較し、或は結合し、或は歸納し、或は類推して、物の作用の種々なる性質及形狀、若しくば彼等相互の關係の理法の知識を得るは、決して拒否すべきにあらず、然れども理法てふ想念は總て理學の中心點なるが、一たび之を追從するに於ては、吾人をして忽ち理躰學の區域に進入せしむ、蓋し理學の常に知らんと欲する理法は、單に吾人が觀念の過程の主觀的定規にあらず、寧ろ實際の存在者の通有的必然的關係、即ち吾人の實驗の知覺に依て得たるにあらず(實驗の中に含有するものは通有にも又必然にもあらず)寧ろ吾人の思想に依て其知覺

に加へたるものなり、かくして吾人は吾人の觀念中の原由の關係に照應すべき客觀的原由の關係は、物其自身の中に必ず存する事あるを假定せざるを得ざる也。此事の眞實にして、更に疑を容るべからざるは、恰も外形的世界の眞實なるを疑ふ能はざるが如し、而して外界の眞實なることは、斯の如き原由の連鎖の假定に於て既に包括せらる。若し吾人の思想中に存する世界と、吾人に關渉なく存する外界とは、互に照應することなくんば、吾人は意識の現象中に於て、眞實の存在の記號を見ることを能はず、また前者よりして後者に推及することを能はず、吾人の意識に係はらざる存在を假定する論理的基礎も亦全く奪去せらるゝに至らん。然れども若し吾人の意識中の諸現象の渾沌たる形狀に、秩序若しくば連環を附せんとせば、斯の如き存在を假定するは甚だ必要なるを知る。然り若し此思想上より起る必要は吾人が假定する所の外界の誠なる事、即ち斯の如き世界の存在することを保證するものとせば、また其世界は如何なる者なるかを保證し能はざるにあらず、即ち其外界は我思想の世界と性質を齊しくする者たる事を保證す、而して此內外の照應する事實は、吾人の思想中に於ける實在の連環、即ち理法に基き吾人が希望したる所の現象は、

其希望に負かず、實際吾人の意識に入來する實驗によりて、尙一層の鞏固を得。日常の實驗吾人が由て以て吾人の動作を整理することを得る所のものは、これ即ち吾人の思想中の世界と實際の外界とが、互に符合するとの事を證するに足る。然れども此兩者の符合の可能たるを理會せんと欲せば、吾人の本性に賦與せられたる知識の理法と、外物に存する實在の理法とは、其源を同一なる造化の理性に發することを假定するの外なし。其理性の思想は世界に於ける諸の實在者の必然の關係に於て客觀的に顯はれ、又其世界を反射する吾人の知識固有の理法に於ては主觀的に顯はるゝ思想の批評的運動は、竟に此思辨的結論に達せざれば止まざるもの、如し。

されば吾人は再び夫の思想と實在とを同一視し、總ての實躰を純然たる思想より演繹し得るものと思惟したる絕對的唯心論に達したりとするか、曰く然らず、吾人は左の二個の考案により此極論に達するを得ざるなり。第一吾人が先天に有するものは、意識の容量にあらず、又た諸の限定及容量の源たる明白の思想にもあらず、否、先天に世界を撙造するの基礎となるべき明白なる總念、即ち空間、時間、運動、數、原

因、實躰等の如きものにもあらざる也。唯吾人が先天に有する所のものは感覺を觀念に、觀念を斷定に組織するに當り、吾人が依て以て進むべき明白なる規法を指示する形式的排列に外ならず、これ蓋し吾人の避くる事能はざる論理的必然の情操あるが爲なり。此情操は道義、審美及宗教的情操と類する所あるも、直ちに之を以て彼等に歸すべからず、何となれば此情操は吾人の心意中に於て彼等と全く異り、亦彼等と全く無關係なる側面に屬すれば也。又吾人が感情的或は實際的生活と直接の關係を有せず、たゞ其中に吾人の理性の働に關し、論理的及形式的の規法を有するのみ。然れども形式的作用の排列は、其の實際の働を爲すにより、始て進化し、眞實となり、吾人の知識の能力は、外界及內界より得たる所のものゝ救助により、漸く進化又は眞實となるもの也。斯くして吾人が有する知識の先天的形式の發達及吾人が是等の形式を、諸の總念に依て確知するに至るは、必意實驗により得たる先天ならざる知識の材料を得るとに是れ由る也。去れば吾人の觀得及思想の諸形式は吾人が內心の本能的行爲を反察するに依て得たる空間、時間及原因等の明白なる諸總念たるを悟らば、是等は吾人先天に有するにあらず、寧ろ世界の實際の知識を得るによりて得たりと云はざるべからず、然れども若し觀得及思想の明白なる規法生來より吾人の中に存し、本能的必然の勢力を有すると無くんば、是等は亦單に實驗のみに依て得らるべきものにあらざるや明なり。されば實驗に依らざれば、知識の先天の理法を實際に應用し亦其理法あるを覺知すると能はざるべし。然れども先天に賦與せられたる知識の形式なくんば、吾人ハ亦一個の正當なる實驗を得ること能はざるべし、而して前者を看過するは抽象的唯心論の誤謬、後者を看過するは實驗論の誤謬也。」茲に一個の注意を要するものあり、ヘーゲルの主張せし絕對的唯心論は、世界を先天的に形造するの權利を左の假定に基せしめ、即ち思想と實在とは同一なり、實躰は觀念の要素、別言すれば論理的思想の要素の開舒したる統計たるに過きざるなり。プラトーの唯心論もこれと同一の方向を取れり、彼に依れば世界は「エーゴー」の意識の結果なり、然れども斯の如きは批評的運動の最初の精神に脊馳するが如し、何となれば實驗の形狀を限定し、また觀念の連環を限定するは、思想の先天の形狀を有するの知性なれども、其容量及性質に至りては更に智性の與かる所にあらず、かくて本躰と思想の形狀とを混淆せざりしは、これ即ち批評的運動の當初の精神

なりき、實に然り、唯吾人は其知識の形狀を、吾人の外に存在する事物に應用すべきの必要あるを知るのみ、固より是等の外物は空間の形狀中に排列し、時間の形狀中に連續の運動をなし、原由の形狀中に在て互に相連環すれども、其本質に至りては更に吾人の知る所にあらず、吾人は其本質は是等の形式的公準によりて、悉く表彰し盡したりと假定する事能はざる也、然れども唯心論の說に從ひ物の本質をして思想の中に消失せしむるを非なりとすれば、實驗論の主張する如く、其本質は全く吾人の知識の及ばざる所なりとして放棄すべきか、否、若し我等の意志感情の働ある「エーゴー」の中に於て觀念繪畫よりして本質に推及するに及ばず、却て直接に之を知ることを得るの點ある事を忘却するにあらざれは、以て實驗學に同意を表することを能はざる也、吾人は吾人の意志に於て繪畫、形狀、關係、觀念若しくは總念の類にあらず、却て本躰たり原因たる實在者の直接なる知識を得るものなり。

セルリング、及ショペンハウエルが、ヘーゲルの「パンロギズム」を批評するに當り、意志は思想の中に消失するにあらず、寧ろ思想の範疇には緊要なるものたりとて、意志の實躰に向て注意を喚起したるは、甚だ至當の事なり、吾人は原動的の働をなす

に當り、吾人の意志は周圍に現はるゝ諸の結果及變化の原因たるを知る、又受動的の動作に於て吾人の意志は自己以外に存する或原因の爲に其運動を妨げらるゝものたるを知る、かくして吾人の意志即ち吾人の意志の原動受動の狀態よりして第一に原由の意識、次に外界の實躰の意識を生ず、茲に於て乎曩に吾人が意識の現象の論理的結果の必然なる假定として、理論上より達し得たる外界の實躰の實際的證據を得たり、然り唯に物の存在を知るのみならず、其物は如何なるものなるをも併せて知るを得たり、一たび吾人の意志感情ある「エーゴー」に於て、實躰は一の勢力にして獨立なるもの、又原動受動の變化の間に於て其同一を確知するものたるを知らば、直ちに此論法を外界に適用し、外界も亦斯の如き實躰即ち原動受動の働ある勢力の獨立なる中心たることを認むるは、敢て不當の事にあらざるを信ず、已に身躰の現象は斯の如き活潑なる勢力、若しくは其勢力の集合躰なることを知らば、世人の想像したるが如き躰と靈との絕對的反對は茲に消滅し、躰其物は靈の如き勢力の組織躰となり、而して彼此の間に交叉の動作あるは、決して理會し難き事にあらざる也、去れば目下の問題は靈と物質の如き、絕對的に反對したる二個のも

のが、如何にして相影響し得るやといふにあらず、唯其本質に於て無形なる諸勢力の複多は、如何にして相互の間に不斷秩序ある交叉運動を爲し、また靈の機械となりて其用を爲すを得るやにあり、是等の點に就ては、假令明了に理會する能はざるも、少くとも左の一事は明白なりと信ず、即ち唯に各個の有機体のみならず、全世界にある諸の勢力間に秩然有益なる交叉運動の存する事あるは、之を唯一なる基趾の業に歸するにあらざれば、到底了解する事能はず、而して其基趾は諸の勢力の源なる點より見れば、即ち原勢力と稱すべく又其間に存する論理的關係の理法の點より見れば、即ち原思想と稱すべし、故に吾人は之を以て思想あり意志ある吾人の「エーゴー」に比するの外他に道あるを知らざるなり。

かくて吾人の意識の現象を解說せん爲に、獨立自存の基趾あるを假定するに同一の方により、世界の理躰的解釋の結論として、吾人は神の觀念に達せざるを得ず、神の觀念は已に完全せる世界の解釋にたゞ實際上の必要より、假に加へたる無用の附加物にあらず、此點に就ては吾人はカントの說に服する能はず、寧ろシグワルトの言に同意を表す、曰く神の觀念を假定せざれば、一の眞誠なる知識をも得ること能はず之を假定するは實驗以上に超越するに相違なしと雖も、其の之を爲すや普通の實驗を理會せんとするに於て、之を超越すると同一なり。孰れに於るも實驗以外に於て假定する所のものは、嚴密なる論理的證明を得ること難事也、蓋し吾人以外の實躰は、決して證明し得らるべきにあらず、唯吾人の思想と外物が互に符合する所あるを見て、吾人に與へられたるものは、必ず理會せらるべきものとの吾人の心意の要求を滿足せしむるにより、始て其結果の誠なるを知るに足る、他の學術と理躰學との區別は其方法にあらず、總て知識の方法は絕對的に同一なり、即ち問題の通有なる事、而して理躰學の問題は、一般知識の問題と同一の權力を有す云々と。フェヒネルも亦曰く、凡そ自己以外の事物に自己より推論するの法は、普通に此處にあるものより彼處にあるものに、今日より明日に推論するの道と更に異なることなし、凡て實驗的科學は、已に與へられたるものより、未だ與へられざるものに論及することなり云々と。

凡そ理躰學上の目的、殊に神の如きは、吾人の知識の達及し得ざる處なり、何となれば彼處は吾人の實驗し得ざる所なればなりとの說は、近來一般に流行するところ

なるが一たび此主說の意義を明瞭に解する時は、其主說の眞の價値を知るは蓋し難からざる也。嚴密に之を云へば、吾人が實驗に依て得る所果して何ぞ、或る特殊の時間內に於て意識中に存する感覺と觀念の外なきにあらずや、何者か是等の外に存するや又果して是等の物以外に、存する者あるや否やは、吾人之を實驗に依て得ること能はず、唯意識中の現象より之を推知するに外ならず、例せば吾人の心意中に或人の繪畫ありと雖も、其繪畫は果して吾人以外に存する實物に應照し、彼等は亦吾人に等しき內心の生活を有するものなりとは、これ即ち實驗を超越する所の假定たるなり、吾人の動作と內心生活との關係に照らし、原因結果の推理法により て漸く之に達するを得るのみ。唯外界に於て吾人に接近する所のものに關しては、斯の如き推及を爲すと最も早く、又無意に爲すことあるより、吾人は其推及たるを感せざる程なり、唯吾人の覺性が吾人を欺くの時に於て、始て觀念と物其自身との間の齟齬あるを注意するのみ、又其近因及遠因をも尋ぬる時に當り、始て斯の如き推及を爲しつゝあるを悟るのみ。斯くして順序を追ひて、かゝる推及を爲し、近より遠に及び、既知より未知に渡るに當り、吾人之を稱して科學的研究なりといふ、而して

猶ほ同一の方法を繼續し、各個の原由の關係を一の普通の關係に集め、此通有なる原因に於て、思想の中にあるものと、現に存在するところの原由關係の同一の基礎を尋るの時に於て、始て之に理論的思想の名稱を附す、固より此最後の働に於ては、前者よりも多少不明瞭なる處あり、而して吾人の假定する所疑問に陷り易きは、當然の事なり、然れども其相違は僅に程度の相違のみ、其原理に於ては彼此共に同一の方法に由る、故に知識の世界に於て縱に境界を設け、之よりは一歩も蹈み入ること能はずといふが如きは、頗る不當の所爲なりと云はざるべからず。

吾人の理論的思想は絕對的知識を去るや遠し、亦決して概然の假定以上に達することを能はざるは、吾人之を許諾せざるを得ず。然れども斯の如きは獨り理論學に限らず、吾人の主觀的觀念を越えて直ちに實論に關する總ての知識も亦悉く然らさるはなし。されば自然界に於ける精密なる知識と、宗教の理論學に於ける不可思議との間は、絕對的區劃を設くるは不可なり、然り吾人は二者の間孰れの場所に於て其境界線を設けんと欲するや、夫の自然、勢力、運動、空間、時間、原因、理法、細分子、重力、發育生活、刺戟、感覺等の如き總て知識上の根本的總念は、皆これ疑問の附隨する理論學

上の總念なるにあらずや、アヒテルいはく、總て實驗を超越し、若しくば論理的に確實ならさる所のものは、皆これ信仰の領分内にあり云々と。

夫れ然り唯心論も主張する絶對的知識は、單に理脉學に於て之を排斥すべきのみならず、總て實躰に關する學術に於ても、亦之を排斥せざるべからず、然りと雖も健全なる理性は、必ずしも其位地を全く心情の願望に讓與するに及ばざる也。人は假令神の如く全智なる理性を有せずと雖も、亦或種の理性を有す、已に之を有すれば假令其間に於て誤謬あり欠點ありと雖も、稍々神の有するが如き通有なる眞理に達するを得ざるの理あらんや、始め吾人の心中に存する情操を解說せんが爲に、試に設けたる假定も、總て吾人の思想を調和するに適するに從ひ、漸々其概然性を增加す。斯の如き調和の爲に緊要なる事情は、吾人の心意に存する知識の先天的規法に適應するにあり、如何なる敬虔の情願と雖も、吾人をして論理の理法より離れしむることを能はず、內心に撞着を有し、或は既知の世界の論理的連環を破るが如き觀念は、客觀的眞理の權威を有することを能はざるなり。然れども論理的思想は詐を看破する消極的の準率たるに於ては、打勝つべからざる勢力ありと雖も、直ちに吾人

を引て積極的に眞理を理會せしむるの力なし。形狀の眞確なるは以て其容量の眞確なるを證するに足らず、要する所は其形狀を正當に實躰に應用するにあり、實驗上の事たる頗る複雜にして之を解釋するの道多端なれば、眞理に達するの道は、唯常に不適當若しくば不實なる分子を陶汰して止まざるにあり。

理論的知識は常に比較的にして絶對的の眞理に達する能はざるの患あるも、其の足らざるを補ひて圓滿なる確信に至らしむるものも、亦實際的の側面にあり、此兩側面の合同は、知識の最も初步なるものと、最も高尙なるものに於て、共に等しく見る所也。何人も外界の眞實なるを信せざるものなからん、而して其故を問へば、第一理論上よりして若し此假定なくんば、吾人は意識の現象を合理的に解釋することを能はざる也。然れども此議論にして未だ足らざる所あらんか、乎は直ちに實際的必用の補ふ所となる、何となれば何人と雖も外界の眞實なるを信ぜずして其動作を爲すこと能はざれば也。神の眞實なるを信するに於ても亦然り理論上の議論と實際上の動機とは、互に相助援して此確信に至らしむ、理論上より云へば世界の連環を解說する爲には、必然神の觀念を假定せざるを得ず、而して其假定たる已に滿足

なる世界の解說の上に裝飾的に附加したるものにあらず、却て此假定なき時は世界に關する吾人の論理的見得は、之を支持するの基趾を失ひ、而して統一と必然とに向ふ知識の衝動を滿足せしむること能はざるべし。實際上より云へば神の觀念は吾人の意志と感情とに其結局の目的、即ち至高の善を與ふるに最も必要なる假定なり、然れども亦必ずしも道德の意識の不完全を補はんが爲に、此假定を要するにはあらず、蓋し道德の意識は是等の外援を待たずして、自ら充分なるものなれば也、然れども若し完全なる理想は唯心意の主觀的情操にして客觀的實躰を有すること無くんば、吾人の意志は其結局の目的を失し、吾人の心情の安息と滿足とを欲ぐに至らん。去れば實際的動機と理論的上の議論とは、互に相助援ること恰も窮形の兩側か互に相援けて其全躰を全ふするが如し此兩者互に相調和するに至りて、吾人は至高の事に於て、圓滿なる確信を得るに至らん。

今や吾人は、宗教と理學の關係問題に達したり此兩者は人心の潰滅し難き必要上より發す、而して其至高なる目的即ち神の觀念に於て邂逅す。然れども其の之に達するや、兩者各其道を異にし故に各々異れる觀得の點より之を觀る也。理學は論理

的知識に向ふ吾人の心意の衝動より發す、先づ意識の中に與へられたる現象により發程し、彼等相互を連環せしめ、且つ其原因に依て之を解釋せんとす、茲に於て乎世界を解釋するに於て、必然假定せざるべからざる原因として神に達する也。宗教は理論的に世界を解釋せんことを勤めず、唯感情あり意志ある「エーゴー」若しくは心情と世界との間に正當なる關係を設けんことを勤む、これ其人間の生活と之に接する外物とを擧て、世界を支配するの能力と直接に連環せしむることに依て成就す。總て宗教心の發生及其心理的事情等に就ては余輩數々陳述したる所あれば茲に、多辨を費すを要せず、唯其要領を擧くるを以て足れりとす、宗教心の基礎は世界の高大なる能力に憑依するの感情にあり、假令其能力は全能ならざるも人は之に抗抵し、若しくは之を避くること能はず、人類の禍福兩ながら其掌中にありと想像せる所の能力也。宗教心にかゝる基礎あることを知るは甚だ緊要の事なり、何となれば此情操あるか爲め、人類は不知不識の中に宗教的關係の必要を感ず、然れども憑依の感情は以て宗教心の全般を悉したるにあらず、唯其れのみにては人類を高潔ならしめ、活潑ならしめ若しくば幸福ならしむるの力なし。人心は一種奇態の

組織なり、自己の生活は世界を支配する能力に憑依するとの感情は、直ちに其能力と活ける交に入り、以て憑依の爲め將に失はんとする自由を保存し、否、相對的勢力に對し一層之を强からしめんと欲するの感情となる。憑依の感情に隨伴する世界統御力の觀念は、茲に於て愈々意味深遠となるに至る、何となれば若し其力にして吾人と等しき性質と意志とを有し、且つ吾人に向ふものにあらざれば、吾人の生活の目的を成就せん爲め之と交通し能はざるや明也。然り人類は此力を以て自己の生活と働との保護者、又は摸型と爲す、即ち此力は我等の信任と尊敬の目的となり得べきもの、宗教的神の觀念の動機は、神と生ける交通を望み、又世界の統御力と連環して吾人の生活を神の理想に進め、吾人を圍繞する世界に憑依することを免れんと欲する心情に存す、略言せば神に依て救はれんことを欲するに存す。

宗教に於ける神の觀念の動機と、理學に於ける神の觀念の動機とは、大に異殊なる所あり、而して其異殊の結果は左の如し。兩者に於ける觀念の形造は、吾人の心理的生活の異なる作用に由る、理學に於ては、論理的思想は順を追ひて、此點より彼點に遷り、與へられたるものより其近因及遠因に達す。此進行は感情に由らず、單に論理的

强迫、若しくは思想の抑制に由る、然れども是又夫の實際的動機と混合すべからず固より論理的動機にして、尙ほ不充分なる處あれば、實際的動機は、之に加はりて其不足を補ふことなきにあらざる也。理學の進行は思想の抑制に伴はるゝにより、其點までは、之に依て達する所の知識は客觀的にして、一般に確實なりとの要求を爲すを得れども、其要求は是より以上に達すること能はず、理學の進行の區域は制限あり、至高の場所に於ては理學も亦實際に必要なる明白と確實とに欠乏するとあり、宗教は斯の如き痴鈍なる反察力に由らず、亦疑はしき假說にもよらず、寧ろ大膽に其心の希望に從ひ、形狀容量の二者を直接に要求するものなり、去れば宗教心の動作の類する處は、理學上の反察よりも、寧ろ美術上の直覺にあり、宗教と美術とに於ては、其使用する機關は、自在に運動する想像力なり、固より論理の理法に依て束縛せられず、其關する所は實驗に依て得たる、自己の目的に適ふ所のものゝみなり、而して其目的たるや、普通の知識の如く實体を摸寫するにあらず、寧ろ實在の元形、を理想的に描出するものなり、詩人は時として自己の理想に存するものを、宛も歴史的人物の如くに描出し、或時は歴史上の人物若しくは事實に、自己の理想及時の

理想を注入し、以て過去の人物を現時及將來の爲の理想たらしむるとあり、宗教的想像力の働も亦之に等し、敬虔なる心情の內心的歷史、禮拜に於ける一般の實驗、教會の希望、豫言者の幻影等を理想的歷史の事實、即ち高等なる實在者の奇跡及顯現、篤信者と神との直接なる交、神の使者及徵候の發現として之を戲曲的に描出す、又歷史的口碑の眞人物を理想的に描出し、以て後世に於ける宗教的理想の摸範と爲す、斯の如き想像力の結果充積して、宗教的昔譚の類を生ずるに至る。かゝる理想的歷史又戲曲的理想は、互に相錯綜して玆に聖なる昔譚及歷史を形造す、然り而して此盤根錯節を裁斷して、各其處を得せしむるは、これ即ち歷史的宗教研究學の大問題にして、固より容易の業にあらざる也。宗教心は其自由なる詩歌的の直覺により、連綿たる神の普通の支配をも想像的に描出し、其自然の方便を看過し、各個の出來事を以て理想的に解釋するにより、神の動作は殆ど奇跡的の性質を帶び、普通一般の理法以外にある如く看做すに至れり。

宗教的想像の働と詩歌的創造の働とは、斯の如く密着なる關係を有すと雖も、其間には緊要なる異點あるを忘るべからず、詩歌的の想像に於ては、其業は全く自由の

創造に由るものなれば、其結果は客觀的の眞理即ち理論上の價値を有するものにあらずとの明白なる意識あれども、宗教に於ては全く之と異り、其創造力は無意的の動作を爲し、其容量と形狀とは、殆と離るべからざるまでに錯綜するにより、總て自由なる想像の働なることを感ぜざる也。總ての結果、即ち容量も形狀も、直接に與へられたりと思惟するにより、宛も客觀的の眞理の如く認めらる、然れば斯の如くにして描出したる世界の繪畫は、客觀的眞理を有せず、即ち論理的知識の結果の如き、一般普通に確實なる者にあらざるや明白也。然れども又確實なる眞理と認められんことを要求するも、全く無道理なりといふべからず、何となれば宗教上の知識も、亦理學上の知識と等しく吾人の心意の破滅しがたき必要を滿足せしむる者なれば也。去れば宗教心の描出せる世界の繪畫には、如何なる意義の眞理を附加して可なるや、これ實に容易ならざる問題にして、頗る精密なる研究を要する所なり。若し宗教上の眞理を以て直ちに理學上の眞理と比較せず、却て美術上の眞理と比較することあらば、之を解することも亦容易ならん。然れども玆に注意すべきは、これ唯比較のみ、未だ以て宗教上の眞理と美術上の眞理とを同一視したるものにあら

ず、されば此比較を以て吾人の研究の終極に達したりとするは、そも〳〵非なり。抑吾人が美術の眞理、譬へば詩歌の眞理と稱するは、必ずしも實躰を正確に摸寫する論理的眞理の謂にあらず、寧ろ審美の理法に從て美妙の感覺を吾人に與ふるものなり。固より茲に於ても其性質若しくば內心の理法に好應し、吾人が心意の作用の先天的規法の要求する處、即ち正當確實なる所のものを、始てこれを誠なりといふを得べし。然れども美術の作用は、必ずしも實躰を正確に摸寫する知識の作用と等しからず、寧ろ事物を理想的に形造するの類なり。其作用の規法とする所も、亦後者の規法と自然に異なる所あり、又正確なるや否やを質し、或は其價値を測るの標準も從て異ならざるを得ず、美術的に正確なり若しくば美麗なりといふは、論理的に正確なり若しくば眞實なりといふと同一なるものにあらず、又道義的に正若しくば善といふが如きものとも異なる所あり。然れども結局に至れば此三者は互に相連環し、相合同せざるを得ず、何となれば此三種の作用の規法は、其根本等しく吾人の心意の合理性に基く所あれば也。宗教上に於ても其要する所は、宗教的觀念に依て發揮せられたる感情は、果して吾人の宗教性の規法に適ひ、宗教の目的を正確

に達し得たり耶否耶といふを以て、其眞理の價値を測るものにあらずや、而して宗教の目的とする所は、吾人に與ふるに、合理的知識を以てするにあらず、寧ろ吾人の心情を合理的ならしめ、其感情意志をして神の合理的意志と調和せしめ、世界に於ける神の支配の下に服し、以て圓滿なる內心の調和と滿足とを吾人に與ふるにあり。去れば宗教的觀念を測るには、先づ此實際的目的を成就するや否やを以てし必ずしも直ちに其論理的の確實を問ふを要せざる也。宗教的眞理の價値は、吾人に與ふるに理論的知識を以てするにあらず、寧ろ吾人の德を建つるにあること、恰も美術的眞理の價値は、美妙の觀念を惹起するにあり又道義的眞理の價値は、其動機の善なるにあるが如し、これ唯比較のみならず、宗教的美術的及道義的意識の間の關係は、頗る密着にして重要なるものなれば、其中の一にして正當なる時は、他も亦隨て正當ならざるを得ざるものなり、宗教的觀念の實際的眞理若しくば其見得の價値は、之を測るに其人心に與ふる善且つ美なる動機の如何を以てせざるべからず、善に對しては何人も之を否むものあらざるべし、而して善と宗教的眞理とは、其本質に於て皆同一なる事は、今更に多辯を要せず、然れども美妙を以て宗教的觀念の價

値を測るの準率中に加ふる事も、亦必ずしも其分疏を要せざる也、吾人は美術の情操と禮拜の潔操との間に、如何なる密着の關係あり、又高尚なる美術に依て受くる所の感覺は、殆ど宗教上の敬拜の感情に類することあるを記臆せば即ち可なり、去れば宗教的觀念にして、人心を活し、人心を調和し、人心に喜悅と敬心とを與ふるに適當なるものは、これ即ち宗教的に正確にして價値あり、また實際的に眞誠なりと稱し得べし、斯の如きはスピノザが、それ信仰は知識上より「ドグマ」の眞理を質さず、寧ろ其敬虔を質すものなり、即ち靈魂をして神に柔順ならしむる能力を有するものなりや否やを問ふにありと云ひしは此れ之の謂ならん。

以上論せし所により多少宗教と理學との關係を明にしたるも、これ未だ以て盡したりと爲すべからず、宗教と理學との關係は微頭徹尾美術と理學との如しと見做すべからず、美術的判斷は更に重きを美妙の感覺を發揮する事物の理論的眞理に置かず、蓋し是等は唯方便にして其目的を達する要具たるに過ぎざれば、自ら重きを有することなし、然れども宗教家の如きは實際的に誠なるもの、即ち敬虔心を惹起するの力を有する宗教的觀念は、悉く皆理論的にも誠なりと假定するは、普通の

事にして、必ずしも咎むべきにあらず、宗教家は宗教上の觀念の理論的眞理と實際的眞理とを混同し、其一を放棄すれば他も亦併せて放棄せざるべからずと思惟す、故に教會は其教義を維持するに熱中し、學術と宗教の口碑との間には爭鬪間斷なし、蓋し學術は其知識を求むるに當り、宗教の主張する世界の見解に關する教義と若々相反する處あるを免れざれば也、近世に至り此兩者の間を調和せん爲に其中間に境界を設け、學術をして實際の事を司らしめ、宗教をして理想の事を司らしめんと試みたりき、然れども實驗の示す所によれば、宗教は曾てかゝる調和策を甘受し能はざるが如し、而して余輩は亦此事あるを怪まず、宗教にして若し其の諸の觀念、殊に神の觀念の眞實なる意義を失ふことあらんか、これ即ち宗教自らを亡すなり、若し神は唯これ主觀的理想に附したる名稱にして、世界の上に位する眞實の勢力にあらずとせば、何が爲に斯の如き神に依賴し、之を信任することをせん哉、余輩の見に依れば、此兩者の調和を圖るには必ずしもかゝる極端の策を用うるを要せず、余輩が數々論せし如く、學術にして其論理的進行の絶頂に達する時は、必ず神の觀念に至らざるを得ず、縱し其神には如何なる性質を附するにもせよ、若し此觀念なき

時は、世界の思想は不完全にして、之を支持するの基趾なしとすれば、彼れ何の權利ありてか、此絶頂より發起せし宗教が總て客觀的の眞理なき、單に想像に基く所の宗教的觀念を理想的に描出するを制することをせん哉。

宗教と理學は神の觀念に於て邂逅するとの事實は、此兩者の間に積極的調和の必要、又可能あることを指示す、たゞ要する所は早計に其調和を試みざるにあり、此事決して容易にあらず、余輩が飽まで宗教の權利を主張したるを見、總て宗教上の口碑中に存する世界の觀念は、客觀的の眞理にして、世界の知識に關する唯一の規法なりと思惟するが如きは、寧ろ誤謬の甚ともきものといはざるべからず、斯の如きは單に過去の宗教的思辨と宗教と想像の結果を無研究にして承諾せよといふの類なり、故に思想の正當なる働を放棄せよといふの類なり。假令各個人中には之を放棄するもの無きにあらざるも社會全躰は、必ず之を爲す能はず亦爲すべからざるなり、何となれば正當なる思想の働は、これ亦人類の天職中の一部にして、道德上の義務なれば也、加旃宗教中にも其教說甚だ夥多なれば其中孰れの爲に吾人の思想の權利を放棄して可なる耶、之を定めん爲には、少くとも吾人の智性は種々なる教

說中にて孰れに依るべきかを撰まざるべからず、一たび此事を爲すや、諸の觀念中に於て其眞實の種核、表號的形狀との間を區別し、眞理は儀文にあらずして、靈にありとの事顯然たるに至らん。

現今にありては宗教上の口碑的教義を以て、理學を壓服するの患なし、然れども却て危難は他方より存す。宗教は已に俗界の知識を支配するの希望を放棄したり、故に只管俗界の知識の爲に昧犯せられんことを慮り、其關係を斷ち獨り自ら口碑の中に籠城せんとするの傾向あり、公然たる戰鬪を休め、進擊に代ゆるに防拒を以てし之に依て有ゆる困難を排除せんと試みるが如し。然れども斯の如きは、これ豈に安全なる血路ならんや、其理由二個あり、假令宗教は理學より對し籠城するも、之に依て更に其襲擊を免るゝ道なし、否斯の如きは自らを一層の危難に投するもの也。斯の如き宗教は種々雜多なる非宗教的の學說が天下に徘徊し、至る所宗教の勢力を減殺しつゝあるを防拒すること能はざるべし、却て文明の正當なる結果に反對するにより、愈々其勢力を減殺せられ、社會に向て活ける感化力を及ぼすこと能はざるべし。最後に於て若し學術に對して籠城する時は、徒しく宗教は其根を斷れ其進歩

を阻遏せられ、自ら饑餓凍餒に陷り、終には自滅を招くに至らん。

宗教も理學も二ながら眞理の所有權を放棄せず、然れども亦兩々相並び相對して無頓着なること能はずとせば、最早此兩者の關係を正則に整理するの外他法あるを知らず、而してこれ即ち宗教と學術との間に立つ唯一の中保者たる宗教學の責任也。宗教學は明に宗教中の形狀と容量、實際的の價値を有する表號と正當なる理論上の眞理、常に變化すべきものと永久存すべきもの、方便と目的儀文と心靈との間を區別し、以て兩者の調和を計るべき也。宗教學は凡そ人情は古今種族の別を問はず、皆悉く同一なれば、吾人は自己の實驗に照して宗教上の事柄を解すべしとの外、一も假定する所なく、固より此假定は之を證明するの道あらざれども、亦之を拒否すべきの道もあらざる也。斯の如きは何れの科學に於ても、殆ど定理たるの價値を有す、何となれば若し此假定に依らざる時は、一の科學をも成立すること能はざれば也。宗教學の範圍は、一方より見れば甚だ廣く、又他方より見れは甚だ狹きものなり、其廣き點より云へば、宗教學は人類歴史の全躰に於て、少くとも總て其重なる現象に就き、殊に太古の起原に於て宗教を研究すべき也。夫れ活物は、其發育の全躰を見

るにあらざれば、以て其性質の全部を顯はすことなし、また全躰の發育の理法は、原始に於て最も明白に認め得らるゝものなれば、苟も宗教的生活を學理上より研究せんと欲するものは、單に其生活の一端、例せば發育の最高點に於ける現象のみを研究することなく、須く其歴史の全躰に就て觀察を下さゞるべからず、若し然らざれば特殊なるものを全躰と誤り、已に發達して稍々複雜なるものを以て、其原始の單純なる狀態と誤解するの弊を免れざる也。然れども宗教學者は亦外形的歴史の實驗の廣漠たる區域、其の諸現象の渾たる沌る有樣に於て、其進行すべきの道を求め、且つ諸の信仰及禮拜に於ける種々なる形狀の存することある、宗教的進化の理法を悟らんと欲するに當り、須く先づ其眼を最も狹隘なる觀察の區域に止め、自ら直接の實驗を有する、自己内心の宗教的生活に就きて、綿密に攻究するを要す。彼先づ自己の腦中に存ずる實驗の聲を聞き、宗教的感情の事實に接し、内心の必要及び外界の刺激、動機の反動及原動を實驗するにあらざれば、以て宗教歴史に於ける、諸の勢力の運動を正當に了解し能はざるべし。斯の如き内心の鍵を有せずして、徒に宗教歴史を研究するものゝ見解は、如何に其の皮想たるやは、近世實驗學派の主張す

る所を見ても明ならん、見よ、彼等は博識以て多種の材料を蒐集しながら、自己内心の實驗なきにより、宗教歴史を正當に解明すること能はずして、憐むべきの誤謬に陷りたり。

去れば宗教學の第一に勵むべき所は、宗教の歴史的發達を示し、其變化の模樣を明にするにあり、可及的最古の口碑と推理法の助援とにより、宗教の起原に遡り原始の狀態を明にすべし。各國民の間に於ける宗教が樣々なる發達を爲せし形跡を尋ね、尚ほ爲し得べくんば、或る宗教は漸々發育して高尚の域に進みたるも、或る宗教は依然として更に變化の痕あるを見ず、却て退歩せし道理をも説明すべし、殊に解説を要するものは、高等なる宗教が、其最初の國民的境域を脱して、大に進化したるの事實と、其發達を促すに與りて力ありし、動機とを明示するにあり。諸宗教の間に於ける現象の異同を細に研究し、彼此比較するに當り、其同一なるよりして宗教進化の普通一般の理法を演釋し、又其異れる所よりして、各種の宗教に存する特質及異點を定むるとを得る也。然れども是等の研究を爲すに當り、吾人の注意を要するものは、從來世に用ゐられたる宗教學研究の法は頗る不完全にして、到底之にのみ

依賴して吾人の目的を達する事能はざるものある事なり。

宗教の起原及其發達を精細に解説する時は、必然其中には之に下す斷定をも包括し、而して其斷定は最も客觀的なり、蓋し歴史は明に宗教發達の摸樣によりて其活力の多少を示すものなれば也。劣等なる宗教は、少時は繁榮する事あるも直ちに衰亡腐敗し、以て自己の勢力により、自らを新にすること能はず、高等なる宗教の爲に、其地位を讓らざるを得ざるが如きことあれば、其歴史は正しく彼等の劣等なるを示すものにして、吾人は唯其制限の理由を發見するを以て足れりとす。基督教以外の高等の宗教、譬へば「バラマ」教、佛教、「ユダヤ」教及回々教の如く、稍々活氣を示し、或者の如きは大に傳播擴張の力あるも、其進歩は或る程度に止り、爾來依然として數世紀の間一の進歩あるを見ず、又各國民の歴史的生活に進入し、新鮮なる觀念により て自ら新にすること能はず、却て自己の不變なる狀態により、彼等民人の歴史的發達を害傷し、其元氣を滅殺するが如きことあらば、これ即ち其宗教の歴史は、明に彼等にたとひ多少の眞理を其中に含有することあるも、开は偏頗有限の眞理たるを發明するもの也。之に反して基督教の如きは、其始め「バイブル」の豫言者及使徒より發

し來りしものなれども、最初より無限の傳播力を有するのみならず、各國民の生活に入り國民と共に生長し、其心靈的生活の良分子を吸收して、其觀念は愈々豐饒に、其動機は愈々鞏固となり、而して內心生活の圓滿なるより、假令其間に欠點若しくば疾病の患起ることあるも、自ら之を醫癒し、苦難に遇ふ毎に愈々其氣力を增すの趣あれば、其歷史は正しく基督敎が、有ゆる他の宗敎に超越する唯一無比の良敎たるを證するに足らん。若し基督敎の過去の歷史にして、斯の如く無限の發達を爲すの能力を示したらんには、將來に於て此能力の消滅することありと假定するは、即ち專恣の獨斷たるを免れず、却て過去に於て時勢の必要に從ひ、變遷進化し來れる基督敎は、將來に於ても亦必ず時々の必要に應じ、變化進步するの力を失はざるべしと思惟せざるを得ざるなり。

夫れ然り、啻に進化の可能あるのみならず、吾人は其必要あるを認定せざるべからず、これ實に今日に至るまで基督敎の進步せし事實より生し來れる必然の結論なり。基督敎は其の始て世に出づるの時に當り、「ユダヤ」敎より多の材料を輸入し、之を以て其敎義の形造に利用したりき。固より是等「ユダヤ」敎より輸入し來れる敎義の

材料は、頗る劣等なる宗敎心の結果にして、基督敎の本質とは內心の關係なく、却て之に反對するが如きものなれども、基督敎の力能く之を用ゐて、自己の發達を助けしむるを得たりき。後異邦に傳はるや、彼等の文明を採取して、自己の宗敎上の眞理を敎義的に表彰するに當り、專ら當時に流行せる哲學上の思想及其思想の形狀を利用したりき。然れども斯の如くして基督敎の描出せる世界繪畫は、固より絕對的の眞理を有するものにあらず、其理論的眞理は、其使用したる理論的假定、即ち時の哲學及科學と其存廢を共にすべきものの也。第十六世紀に於て敎法改革起るや、專ら「バイブル」に存する道義及宗敎上の眞理に重きを置き、之を以て其敎義の中心と爲すに至れり。然れども啻にコポルニコス以前の世界の見解、尙ほ其位地を保ちしのみならず、口碑的「ドグマ」の要具は依然として殘頽する事なく、敎會は之を以て決して離るべからざる信仰の寶として保存するを勗めたりき。これ實に吾人が宗敎歷史に於て常に目擊する所なり。宗敎の進化に於ては舊物も一時に之を廢棄せず、寧ろ暫く背後に退けらるゝのみなれば、よし其實際上の權威を減殺せらるゝことあるも、將來必要に從ひ再び之を回復するの勢力を保存し得るなり、これ吾人が稍々發

達したる宗教に於て、奇異なる混淆を見る所以なり、眞誠なる觀念及潔白なる動機は、陳腐迷信の觀念及習慣等と屢々並立並行するものあり、これ獨り吾人をして宗教の性質に對する正當なる判斷を下すこと能はざらしむるのみならず、亦宗教と文明の結果たる知識の間に於て、爭鬪軋轢の絶へざる一大原因也。

若し宗教學の要は、歷史的宗教と時の科學的知識との間を調和するにありとせば、必然宗教的口碑を綿密に攻究して、其中の幾分までは論理法及世界の科學的知識の結果と符合する處あるやを探究せざるべからず、若し宗教の口碑にして客觀的知識を有する是等の學術に撞着するが如きことあらば、これ其口碑は客觀的眞理を有するものにあらざるべし、若し然らずんば世には矛盾せる二個の眞理ありといはざるべからず、然れども斯の如きは、これ豈に吾人の思想の許す所ならんや、かゝる斷定に反對せん爲に直ちに宗教的感情に訴へんとするも、これ亦無益の業なり、何となれば宗教的感情の下す斷定は、唯其實際的價値に應用すべし、即ち宗教的感情の教育の力を保證するに過ぎず、世には往々理論的には正當ならざるも、實際的の價値を有する觀念尠からず、去れば單に宗教的口碑の理論的眞理を貫すのみ

を以て、宗教學の義務を盡したるものといふべからず、若し宗教的觀念の中に存する實際上の動機を了解し、之に照應する感情の必要を明白にし、其の生する所の道義上の結果及是等の口碑によりて、表號的に顯はれたる心の狀態を明にするにあらざれば、未だ以て信仰の觀念の眞誠なる意義を了解したるものといふべからず。

近世宗教學の大に昔時の文華に優り、一層深邃に、一層公平なる所以は、蓋し宗教を心理上より積極的に了解するを得たるが爲なり、而して是等の進歩は、職として歷史及心理に基く近世宗教學の方法、其宜きを得たるか爲なり。一たび夫の奇跡天啓默示及化身等の諸觀念は諸種の宗教中に顯はれ、而して其中に含有する心理的動機は、皆悉く同一なりとの事を明にするに於ては、苟も有眼者にして、是等の觀念を解釋するは、專ら此實際上の宗教的動機に依るべきものたるを看破し得ざるものあらん哉。かくて歷史的—心理的宗教學は、是等の觀念の心理上の源を發明するにより、古今煩瑣學派の提出したる教義上の解釋を不用に歸せしめたり。

然れども此歷史的—心理的解釋は未だ全く宗教學の職務を盡したりといふべからず、外界より發程する他の理學も、其構造したる世界の基趾たるべき神の觀念に

達するにあらざれば、未だ以て完結せりとせず、況んや宗教學の如きは、現象的より理脉的の研究に遷るにあらざれば、未だ完全なりといふべらず、抑理學は孰れの場所にに於ても、唯諸の觀念は主觀的に如何にして吾人の中に發生したるやを知らんと欲するのみならず、是等の觀念に照應する客觀的基礎、即ち物其自身を尋ねざれば止まざる也、今や宗教的觀念は、神と吾人との關係を以て其容量と爲す、而して宗教學の問題たる吾人の心意に存する、此宗教上の關係の根底には、如何なる事實の存することありや、或は如何に吾人と神との關係を思考せば可なるや、又吾人は世界の一部なれば神と世界の關係は如何なるやを攻究するにあらざれば、未だ以て其分を盡したるものと爲すべからず、去れば理脉的思辨は宗教學の始を爲すにあらず寧ろ其結論たる也、他の理學も直接なる實驗の外面より發程し、愈々深く進むに從ひ愈々中心の哲理的問題に近づき、竟に一の中心なる神の觀念に達せざるを得ざるが如し、若し人あり宗教學の思辨的結論は到底得らるべきにあらず、何となればかゝる思辨の主觀は、實驗を超越するものなればなりと、反對論を試むるものあらんか余輩は必ず左の如く之に答へん、余輩が屢々陳辨せし如く、かゝる反對論は、一見

正當なる批評の結果なるが如く見ゆるも、能く其實を質す時は、是れ唯通俗の意識の非批評的假定に基くものにして、未だ眞誠なる實驗に屬するものと、之に屬せざるものとを明劃すること能はざるに由ると、凡そ終局なる理脉的基趾を探究するに當り、吾人が最も注意すべきは、之に關して絶對的知識を得るとの妄想是れ也、殊に本問題に於ては、最も此點に注意せざるべからず、從來宗教的思辨學の想像せし如く、神は直接なる意識の中に於て、吾人に與へられたるものなれば、彼に就て思考し彼を理會し、彼に就て說明するも、吾人が宗教的直覺に由るを得ると爲すものあらばこれ實に甚しき誤謬なり、獨り宗教に於けるのみならず、他の事に於ても、吾人が直接に實驗する所は、唯觀念或覺の外なし、是等の理脉的基趾に至りては、吾人の思想によりて之に推論するの外なし、然り斯の如くにして得たる所の假說は、理論的概然の價値を有するのみ、其假說にして曾に吾人の宗教的意識のみならず、又全脉の意識の事實、また獨り吾人一己の事實のみならず、古今に渉り人類全脉の意識の事實を解釋するに適當なるの度に從ひ、其概然の程度をも進むるなり、これ宗教思辨の常に看過せし所なり、宗教思辨は一己人若しくば教會の宗教上の實驗を以て

理論上滿足に絶對的に誠なる神の總念に達するに充分なるが如く思惟し、而して宗教的實驗は、唯これ吾人が意識の容量全躰中の一小部にして、神の觀念によりて解釋すべきものたるを忘れたるが如し、又現時に於ける吾人の意識の容量は、假令全世界の意識及全世界の知識を集むるも、亦これ全人類の意識の容量の一小部分にして常に變化增進するものたるを忘れたるが如し。去れば此至高の假說の基礎となるべきものは、頗る濶大にして又頗る不定なるにより、吾人は之を意識に於て、完全に測量すること能はざる也、故に神の觀念の證據は理論上より云へば寧ろ概然の證にして絶對的の確實に達すること能はざる也。

人或は問はん、吾人は何が故に此理論的の一方に止まらざるを得ざるか、理論に於て不足する所は、實際に於て補充すべしとは、既に論決したる所にあらずや、若し理論と實際の兩側面にして相合することあらば、茲に始て絶對的確實を得るにあらずやと。余輩は之に答へて然り、或は否といはん、たゞ其の孰れに出づるかは所謂確實なるもの、意義如何に由る。客觀的の確實即ち一般に認諾せらるべき知識は、孰れの場所に於ても、吾人の理性が思想の必然に迫られて働く區域内に限らざ

るを得ず、吾人は此道によりて愈に神の觀念に達す、然れども之を解釋せんと欲するに當り、茲に始て種々なる難問を惹起し、異種の解釋を容るべき餘地を生ずるに至る。かくて思想の必然は漸次に減少し、之と共に客觀的確實をも漸次に消失するに至るなり、之に反して實際上より假定する神の觀念は、愈々人心の要求を滿足せしむるに從ひ、愈々其確實を增せども、斯の如くにして得たる處の確信は、これ唯主觀的のみ、換言せば信仰の確實にして知識の確實にあらず、是に由て之を觀れば、世に二個の知識の道ありて、互に相補充する所あるが如し、理論上と實際上との神の觀念即ち理學上と宗教上との世界の觀得にして、愈々相調和するに從ひ、曾に信仰上の主觀的確實を强むるのみならず、亦客觀的眞理の重量を加へ、かくして實際に於ては絶對的確實と同一なる結果を生ず。理學と宗教との世界の觀得を調和するは、これ宗教と理學との間に立つ中保者たるべき宗教學の責任なり。然れども茲に注意すべきは、假令或る事件に於て是等の問題を滿足に解釋し得ることあるも、直ちに以て絶對的眞理に達し得たりと爲すべからざることなり、却て宗教學の職務は、理學界の人をして一の絶對的知識なるものあることなきを知らしむるにあり、

余輩を以て之を見れば、人各々其性質を異にし、而して知識は常に進歩して止まず、且つ世人が翹望する所の理想も、間斷なく進歩するものなれば、理論的及實際的意識を斷定するの標準も、各人各個更に一定すること能はざれば、世界に關する二個の觀得が總ての民人に向ひ、絶對的に又永久に同一たること能はざるや宜べなり、故に其結果たるや、決して完全絶對なるにあらず、寧ろ比較的にして進歩の窮りなきものなり、夫のパウロが、我儕の知る所全からずと云ひしは眞に然るが如し、

斯の如く吾人は神學上の問題に關し、絶對の知識を得ること能はずとの說を容るゝ時は、爲に獨斷說の弊を免る、蓋し獨斷說の本旨は、有碍的の眞理を絶對的なりと主張するにあり、「ドグマ」及「ドグマチズム」の名稱必ずしも意義なきものにあらず、其根據は理學にあらず、寧ろ「ドグマ」の關係する實際上の利害にあれば也、余輩の考ふる所に依れば、敎會と理學との利害得失及其職務の異點を明にし、從來混同せられたる宗敎學と「ドグマチクス」の區別を劃するは、相互の爲め甚た便益なりとす、「ドグマ」は知識よりも信仰の關する所、其目的は禮拜に於て、宗敎的意識を練磨し、或は之を分與する爲の方便を、宗敎社會に與ふるにあれば、「ドグマチクス」の目的は純然たる

理論にあらずして、寧ろ敎會の實際上にあり、即ち或時代に於ける、或る敎會の「ドグマ」を正當に解釋することなり、故に其區域頗る狹隘にして、固より宗敎學の比にあらず、後者の如く諸宗敎を比較的に攻究し、或は各宗の間に存する普通の分子より して、宗敎心發達の通有理法に推論し、或は各宗敎の特質を比較し、其價値を定むるが如き業を爲すものにあらず、則ち其職務は敎會の信仰を、當時に適する處の形式を以て顯はすにあり、

然れども敎義學者も亦宗敎哲學を研究するは、甚た必要なりとす、彼之によりて其知識を增進し、其見解を廣濶にし、敎會の「ドグマ」中にて、永遠に保存すべき貴重の種核と、一時便利の爲に使用せられて、終には廢滅すべき其外形とを區別するの道を知るに至らん、此批評的攻究は、敎義學者の避くべからざるものなり、何となれば敎會の「ドグマ」に關する種々なる解釋敎會歷史に存し、而して彼は其の比較的價値を定むべき義務を有すれば也、加旃現今に於て理學の思想一般に普及し、敎會中の或部分は、業に已に「ドグマ」に對して不滿足を感し、縱し之を嫌忌せざるも、「ドグマ」に對し、全く無頓着の傾向を顯はすものなれば也、若し敎義學者にして、敎會の口碑的敎

理を現時の人に了解せしめ、將た其實際上の利益をも示さんとならば彼先づ須く現時の學理に通曉する所ありて、宗教知識の玉石を分別するの能力を有せざるべからず。然れども斯の如く宗教と理學との間を調和するは、余輩が已に陳辨せし如く、これ宗教哲學の事業なれば、後者も亦教義學者の準備の爲には、必須欠くべからざるものにして、若し之を缺く時は、正當に其義務を盡すこと能はざるものたるや明也。

然れども教義學者にして、若し其教義學を純粹なる哲學に變し、教義上の觀念を論理的總念に變し、以て教會の爲に實際上の價値を減ずるが如きことあらば、これ又教義學の精神を誤りたるものと云はざるべからず。余輩が已に述べたる如く、實際的動機及感情の進行は、宗教的觀念の要部を占むるものなるが、是等は論理的範疇によりて完全又適當に表彰せらるべきものにあらず、何となれば彼等は寧ろ心靈中の理論的側面とは大に異れる側面に屬すればなり。凡そ感情的生活即ち宗教的生活并に審美的生活の如きは、論理の嚴法を以て束縛し得べきものにあらず、基督教の中心たる教義に於て此事最も然りとす。救濟及中保の教義に關する問題は、高貴なる

理想的人物を景慕するにより、人心に受け得たる高尚なる感覺の經驗にあり。去れば右の如き宗教上の知識に關する「ドグマ」は、必竟内心の實驗を表彰する處の形式に過ぎざれば、之を抽象的哲學の總念に變更する時は、其「ドグマ」は理論上の滿足をも來す能はず、且つ實際上の効力をも失ふに至らん。假令哲學上の總念は「ドグマ」の根底たる理躰學上の眞理(神、創造、攝理等に關する教義及其他の「ドグマ」にして、直接に理躰學の區域内にあるもの)を表彰するに適當なるものとするも、是等は唯煩瑣學的の形式にして、教會全躰の爲には不通無益也。去れば實際に於ては哲理上の總念も、之を民人一般に通用する宗教上の辭に再譯するを以て必要なりとす。然れども何が故に斯の如く迂廻旋轉するの必要あり耶、寧ろ始より「ドグマ」の宗教的意義を教會の實際に適應する形式及教會の全躰に通用すべき辭によりて顯はすの勝れるに如かざるにあらず耶。これ夫の聖書の單純なる辭を以て、煩瑣學的の總念に代ゆるによりて其目的を成就し得る所以、蓋し聖書の文學は、近世の開化したる民人普通の辭によりて解說すること甚だ容易なり。去れば煩瑣學派の助援に依らずして、直ちに現今に於ける教會の意識に向ひて明白なるを得べし。

然れども人或はいはん、果して斯の如くなる時は、吾人は「ドグマ」に就きて科學的の精確を失ふにあらずや、蓋し聖書の辭は彈力ありて、之を解釋するに種々の道あり、或は高尚に、或は素樸に、或は感觸的に、或は心靈的に解し得ること容易なりと、然れども余輩の考ふる所に依れば、これ却て「バイブル」の言辭は、煩瑣學派の論理的總念に勝る所也。已に余輩が述べたる如く、教會の生活は單純なるものにあらず、其中には宗教上の大人もあれば小兒もあり、故に禮拜及宗教的教育の辭は、智愚老幼の差別なく或は高尚なる宗教上の思想を有するもの、或は頗る劣等なる宗教上の感想を有するもの等に向ひ、齊しく有効ならざるべからず。是等諸種のものを教育するに當り、教會は種々なる動機即ち高尚なる觀念或は較々劣等なる觀念等を有し、場合に從ひて之を用ゐるの必要ある也。されば聖書の中には、凡て教會の中に生活する諸種の人物に適應する所の教義及宗教的動機を含有するにより、其單純なる辭を以て哲理上の總念に代ゆるは、甚だ其當を得たりといはざるべからず、最後に於て余輩は、宗教學と「ドグマチクス」を分離するは、從來教會の中に横りたる大なる難問を解釋するに便利ありと思惟す。教會にありて禮拜の形式及其信仰の形式等は、成

べく變更することなく永久なるを要す、然れども理學は常に進行して止まず、教會は疑惑の爲に動かさるゝを好まず、成べく確固なる信仰を得て其中に安心立命せんと欲す、これ甚だ至當の事なり。然れども理學は斯の如き安心を要ひることを能はず、亦要ひべきものにもあらず、常に疑惑の刺撃を被り、日々に新なる知識を加へつゝ進行して止まざるべし。去れば若し宗教學と「ドグマチクス」とを混同するに於ては、其結果たる一方に於ては教會の安寧信仰の確實を害し、他方に於ては理學の進歩を妨ぐるの患なきにあらず。若し之に反して兩者の間を區別し、其境界を明にする時は、理學は理學として遠慮なく進歩し、教會をして疑惑と不安心とに陷らしむるの禍を免かるべし。然れども「ドグマチクス」も亦永久不變なるものにあらず、其進歩、甚だ緩漫にして、理學界の激烈なるに比すべくもあらず、唯宗教社會の大勢に從ひて這も亦進化して止まず、其點に於ては宗教學と「ドグマチクス」とは、等しく宗教に於ても其進化間斷なし、而して他の一切の知識は不完全なりとの事を證明するものの也。

自由神學大尾

七百七十六

明治二十五年七月二十日印刷
明治二十五年七月廿一日出版

譯述兼發行者　岡山縣平民　金森通倫
麻布區材木町三十五番地

印刷者　兵庫縣士族　梅村之芳
芝區三田四國町二番地第十一號

印刷所　公友舍
赤坂區溜池町五番地

43
81

020725-000-2

43-81

自由神学

プライデレル／著

M25

ABI-0545